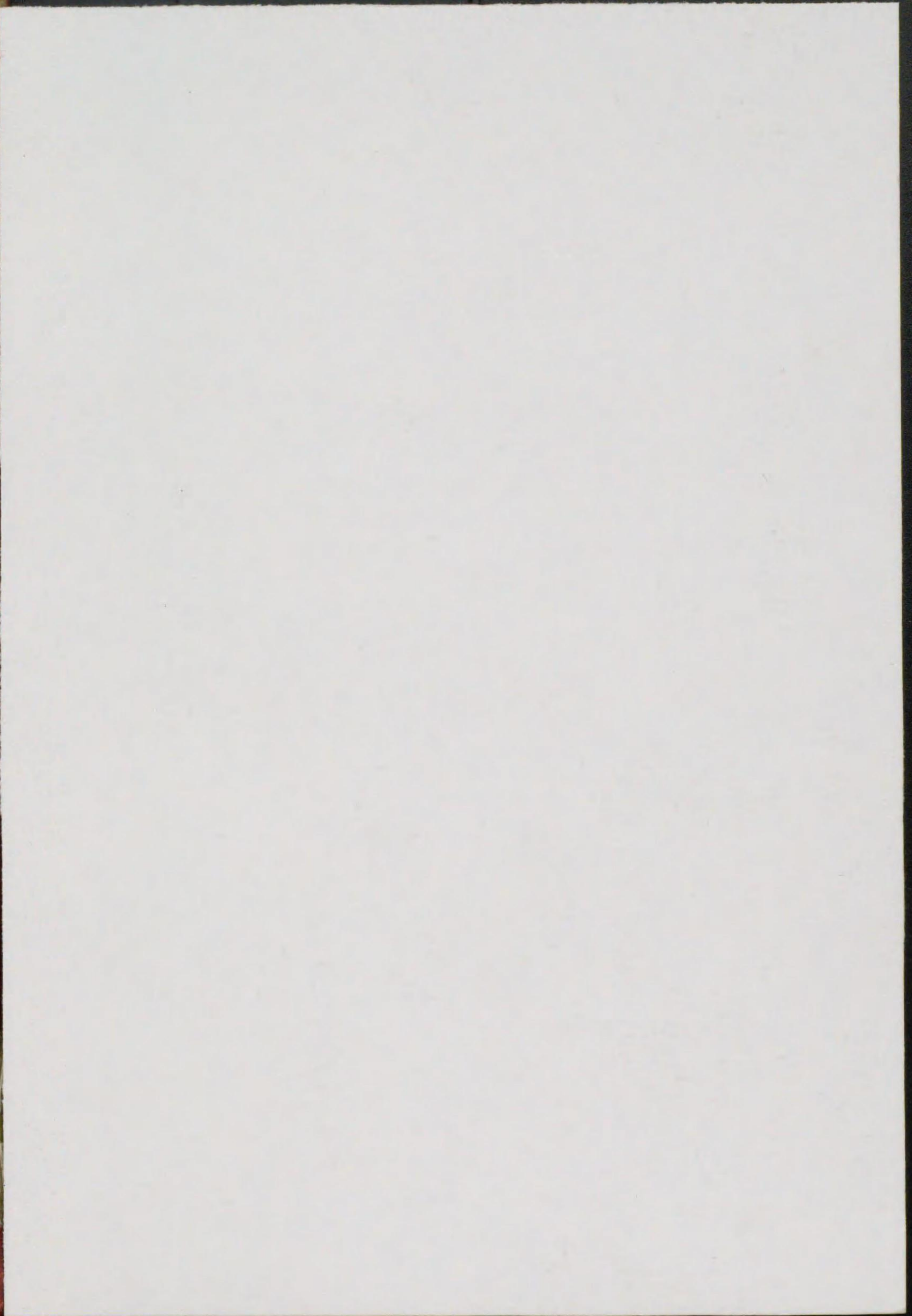


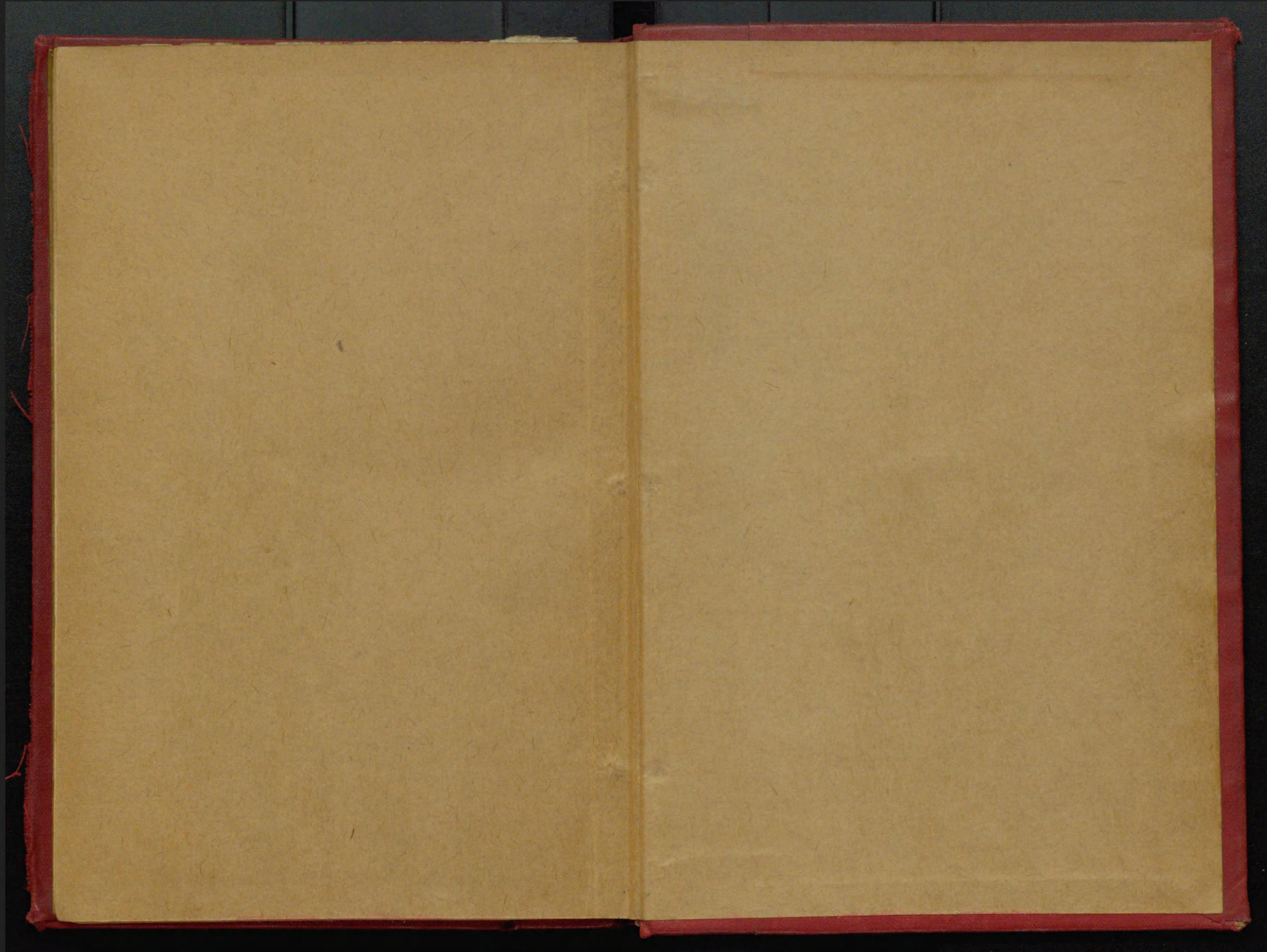
569-14



1200501516215

569  
4





56

14

岩波文庫

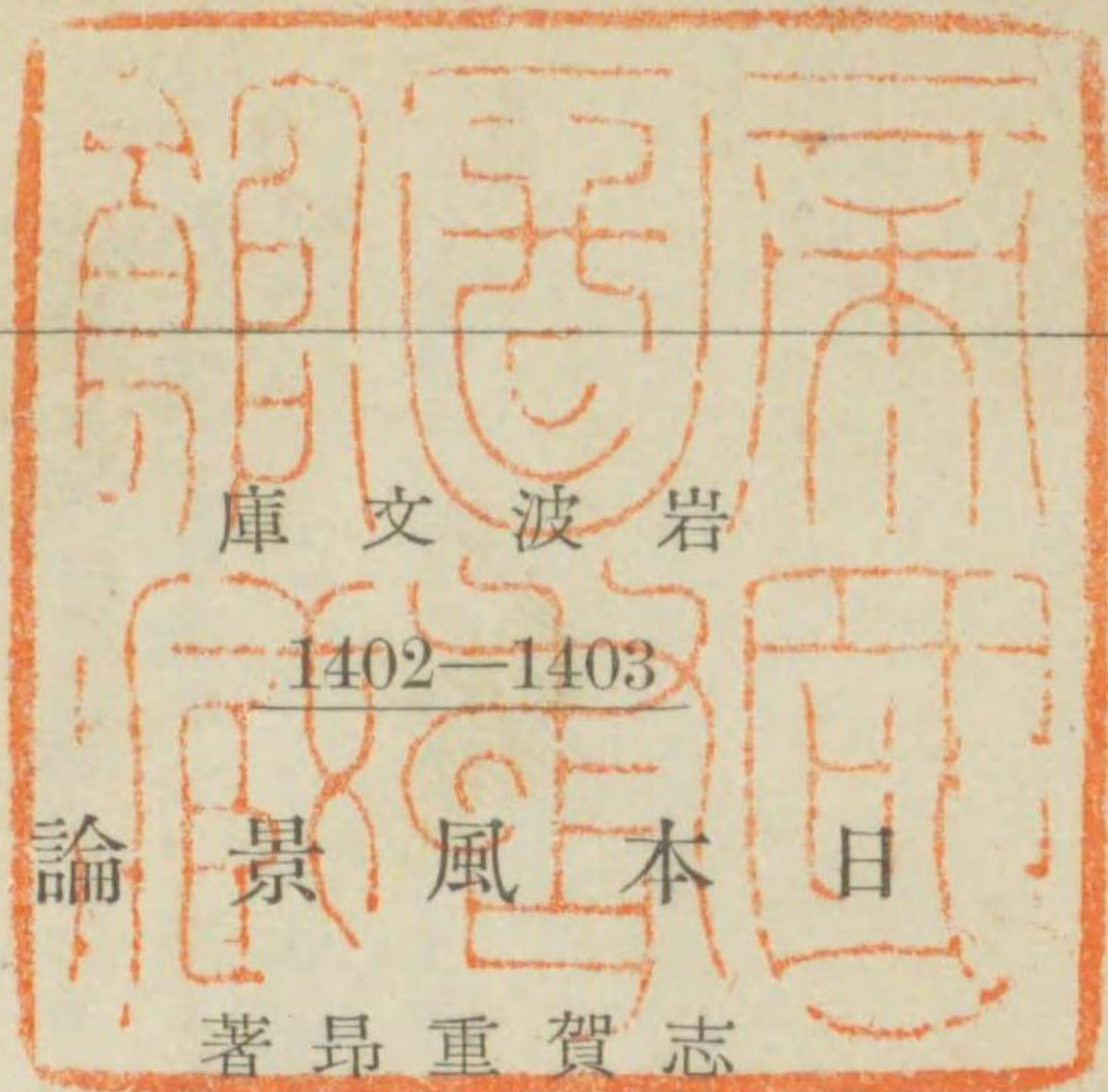
1402—1403

納本

日本風景論

志賀重昂著  
小島烏水解説

岩波書店



岩波文庫

1402-1403

日本風景論

志賀重昂著  
小島烏水解説



岩波書店



解  
説

小島 烏水

明治二十七年、日清開戦の折柄、日本の山岳文學史上に、忘れることの出来ない一書冊が現はれた。それは志賀重昂氏の「日本風景論」である。此書に依つて一般世人は、日本には氣候海流の多變多様なること、水蒸氣の多量なること、殊に火山岩の多きこと、流水の浸蝕激烈なること等を教へられた。日本の風景保護すべく、登山の氣風興作すべきことを説き聞かされた。その書の清楚なる體裁といひ、詩味饒かなる文章といひ、所謂科學と文學を調和する企てといひ、當時にあつては最も目新しいものであつた。

少なくとも本書に據つて、山岳殊に火山の如何なるものなるかを教へられ、愛山の念を養成された人々は、日本山岳會の發起者の中にはある、世間も如何ばかり、此書に惹き付けられてゐたかといふことは、嘗て「時事新報」で諸名士より、古今の愛讀書百種を募られたとき、その答案の大多數が、明治年間の書籍として、福澤先生の著書の外には、「日本風景論」であつたのである。

はれる、その外に重野安繹氏の「國史眼」が加はつてゐるが、その點數は「風景論」より遙かに  
 少なかつたと記憶してゐる。

この書は、その當時米國の「菊」といふ雑誌にも、矢部八重吉氏に依りて、一部分が翻譯せら  
 れたといふことであるから、外人にも、知られてゐたことであらうと信ずる。

即ち志賀氏は、日本山岳のためには、恩人である、山岳會のために、間接の創設者である、勿  
 論山岳國に、山岳會の起るのは、寧ろ必然の運命であらうが、「日本風景論」なかりせば、機運が、  
 このくらゐに早くは熟さなかつたかも知れないと、想像せられる理由がある。

志賀氏は、福澤氏を國民的教育家といふ意味に於て同じく教育家である、福澤氏を新文明の先  
 覺者といふ意味に於て、同じく先覺者である、殊に山岳愛好者として、山岳讚美者として、氏が  
 何人も超越することを許さない先驅者 (Forerunner) であり、熱心家 (Enthusiast) であつた事  
 實は、之を堙滅することが、出来ないものである。

例令今日の進んだ知識を土臺として「日本風景論」から、多少の誤謬をさがして見たところで、  
 氏が我々當時の青年に與へた感化力を、秋毫も動搖させることは出来ない。

## 二

風景論の出版年次は左の如くである。

- 明治廿七年十月廿四日初版
- 明治廿七年十二月二十日増訂再版
- 明治廿八年三月二日増訂三版
- 明治廿八年五月十二日増訂四版
- 明治廿八年七月三十一日増訂五版
- 明治廿九年六月廿三日増訂六版
- 明治廿九年十一月三十日増訂七版
- 明治三十年五月十七日増訂八版
- 明治卅一年三月七日増訂九版
- 明治卅二年八月一日増訂十版
- 明治卅三年八月三日増訂十一版
- 明治卅三年十二月五日増訂十二版
- 明治卅四年七月廿五日増訂十三版
- 明治卅五年四月廿五日増訂十四版

そして各版毎に、多少の増補が加へられてゐる。第一版は本文二一九頁、第十四版は本文二二三三頁で、圖版等も増されてゐる、初めは政教社の發行であつたが、後に文武堂の發行となつた。絹糸の假綴ぢで厚紙の青表紙に、木版風景畫が、大きく收まつてゐたが、第十五版（明治三十六年六月十日）で、クローズの表紙となり、却つて十四版までの清楚の趣きを失つた觀があるが、第十五版が、増訂を盡くした最後のものであるから、本文庫は、それに依つた、但し初版の表紙を挿畫として挿入して置いた。

原書に挿んだコマ繪の類は、本文にさしたる關係もないが、又就かず離れずの風情を添へたのもあるが、紙幅の都合で、凡べてを収録といふわけにゆかなかつたのは、遺憾である。

風景論が出てから、從來の近江八景式や、日本三景式の如き、古典的風景美は、殆ど一蹴された觀がある。第一に、吾國風光の美を擧げて、審らかに其然る所以を論じ、我に固有にして特殊なものであることを明らかにした。第二に、地學的の眼孔を以て、風光を洞觀してゐる、その頃でも、教科書用の地理書地文學書は、乏しくなかつたが、それが「風景論」に至つて、敘景詩ともなり、詩文と畫圖と兼ね備はる名所圖會ともなつて、風景の觀方、描き方までが教へられ、日本人自らの風景觀も變革せざるを得なかつた。日本人として、あまりに慣れ過ぎた火山の形容や、流水の浸蝕、又は或意味に於て嫌厭されてゐた濕氣（水蒸氣）までが、光を放つやうに見えた。

第三に、未だ一般に邦人に知られてゐなかつた遠僻幽邃の土地から、或は溪流、或は高山大岳、或は岩石美などが、續々と發表せられ、その中には、假令他人の書いたものの拔萃轉載があるにしても、志賀氏の筆にかゝると、妙に魅力を有つ。是等は、若かりし頃、愛讀者の一人であつた私などは、今でも猶ほ昔日の酔ひ心地を、喚び起すことが出来る。

### 三

志賀氏は、今の北海道帝國大學の前身なる札幌農學校を、明治十七年に卒業せられた「農學士」である。同級の人には、内村鑑三氏、宮部金吾氏、などいふ、人物がゐた。西洋列國が、南洋諸島を分割占領したとき、志賀氏は明治十九年二月、帝國軍艦筑波號に便乗して、濠洲、ニュージランド、フキジー、サモア、布哇を視察して、歸國すると「南洋時事」なる一書を著はした。科學的頭腦を有する志賀氏のことだから、デアウインが、ビーグル號に搭乘して、南米地方を視察し、歸來、名高い航海記を書いたやうに、科學的紀行文でも、發表するかと思ひのほか、書かれた本「南洋時事」は、經世の一大文學であつた、志賀氏自身の文名を高めると共に、一代の視聽を集めた。徳富蘇峰氏の「國民之友」と對立して「日本人」を發刊したのも、滔々たる歐化主義、西洋崇拜の世潮に反抗するため、「國粹保存」の大旗を押し立て、志賀氏自ら、その旗手

となつたのである、「大和民族」といふ言葉を、はやらせたのも、志賀氏であつた。

「日本風景論」を書いたのも、國土の愛から出立したのである、足許から一握の土をすくつて、隣人の前に突き出し、この土の匂ひを、どうおもふかと訊ねたとき、隣人は、セメンかコンクリートでなければ文明開化の土でない、ふだん妄信してゐるから、そんな土は、汚いと顔を反ける、いづくんぞ知らん、この土は、富士の白雪の融けて流れた土である、こんな美しい土が、世の中にあらうか、これを説いたのが、風景論だとおもへばいゝ。

「江山洵美是吾郷」とは、開卷第一に、眼に飛び込んだ文字であつた、卷を閉ぢてから、全卷を通じて歸納されたのは、結局、やはり「江山洵美是吾郷」である、恰も法華宗徒の御題目が「南無妙法蓮華經」の七字以外にも、以上にもない如くである、だがその中でも「山」に打たれた、彼は「日本の美」を説いて云ふ「駒ヶ嶽（信濃）の峯頭、翠然たる偃松は、雪の如き花崗岩の上に匍匐し、翠は白に抹し、白は翠を粉す」と、跌宕を説いて云ふ「秋高く、氣清く、天長へに織雲なく、富士の高峯、武藏の地平線上に突兀す、芙蓉萬仞、月中に高き處、嶽影太平洋上に倒映する處」と、さながら是れ、北齋の繪ではないか。そして彼は「富士山は名山の標準」といひ、我が富士山を「岱宗」となし、臺灣の最高峰玉山は、富士山に形似するから「臺灣富士」と轉名し、山東省の泰山を「山東富士」と變稱せよ、などと論じてゐるところは、人に依つては、

稗氣として一笑するかも知れないが、現に日本人は、米國に移住してまでも、太平洋岸最高のレイニア山を、「タコマ富士」と通稱して、自他共に之を怪しまないのである、日本人の山に對する觀念では、富士山は米の飯なのである、志賀氏は、當然の事を言つたまでである。

「日本風景論」の御題目は、吾郷の洵美を説くにあるから、山を説くにしても、アルプス式の褶曲性山岳を説かない、だから彼は、白峰赤石を素通りにしてしまつた。只だ花崗岩を説くときに「日本の山岳中、火山岩に次ぎ、高邁なるは、花崗岩に屬す」ることを言ふくだりに於て、（秩父岩より組成せる甲斐の白根山系を除く）と、軽くあしらつて、觸れずに置いてある。彼は同じ立場から、高山に於ける氷河の美を、不問に附した、彼が親しく私に話したうちに、日本の地理書で、日本に無い氷河だの、沙漠などを、詳しく説く必要はない、といふ意味のことを言はれたが、併し「日本風景論」に於て、

日本中央の大山系や、冬間、水蒸氣の多量に因り、氷雪滿積、而して隆夏、其の一たび融消せしもの、今少しく寒冷なる溫度に遭遇せば、更に凍冰して、所謂「氷田」<sup>グレイシヤ</sup>を化成せしや、必然、唯だ溫度の少しく高きが爲めに、竟に此に到らず、日本に「氷田」を見るべからざるは、太遺憾、然れども、既に榕樹椰樹を見、兼て亦た「氷田」を看んとす、是れ貪慾墜くを知らざるもの、既に隆夏、針木嶺上、二里四方の雪田を看、又嶺の谿間に「氷河」を見る、



亦た以て「氷田」の看を做して可。

と、一種の「あきらめ」を表白してゐる。「氷河」とは、氷冷の河川といふ意味であらう。彼は日本風景の第一位に、火山を置く主張であるから、日本アルプスなどいふ言葉を使はない、飛驒山脈に對してすら、其名稱を採らず、「立山火山脈」を以て、之に代へてゐる、併し立山火山脈の一節は、全然日本北アルプス論である。

想ふ、后土の大活力、日本本州中部の地骨たる大花崗岩帯を破りて、迸發し、立山火山脈を聳出す、故に此脈や、他の山系と特立して、越、信、飛の境界に盤踞し、日本本州の中部に、人跡甚だ到らざるの寰區を作す、「石劍鑽青」の四字、實に立山火山脈を代表し、「非人寰」の三字、眞に此の寰區を盡くす、蓋し日本の地形、其幅狭小、故に眞成なる「深山幽谷」少し、唯だ、此間、南北二十里、東西十里、人屋を見る、立山温泉浴屋二あるのみ、故に人間に會せざる、時に半月に涉ることあり、麻衣を着け、鹿皮を穿てる山下の民は、能く案内に應ぜん、乃ち米、味噌、鹽漬物、罐詰、餅（溪水無き所にて之れを食ふ）毛布、油紙、麻繩（數十丈の斷崖を下る際に用ゆ）を、此輩に負はしめ、以て入らんか、熊、鹿、カモシカは人を恐れざるものの如く、原人時代の形象は、宛として目前に映出し來る、豪興の士は、此の寰區に入らずんば、寄傲し得ず。

當時の日本アルプス系に於ける山谷の景象と、探檢旅行の状態は、この通りである、むしろ、私たち其頃の青年は、「風景論」に感化されて、本文通りを實行したのである、但し志賀氏が、飛驒山脈に、立山火山脈なる名稱を宛てたのは、當時の知識の範圍内に於ては、全山脈の火山性なることを、信ぜられてゐたからである、専門の地理學者さへ、立山は勿論、大蓮華山（白馬嶽）を、火山と信じ、白馬の大池を、火口湖と誤まり、鹿島槍ヶ嶽の山頂近傍は、火山岩で被覆されてゐると報告され、薬師嶽の大カアルを、舊火口と、遠望判定を行ひ、笠ヶ嶽を、燒嶽及び硫黃嶽（これを、別々の火山塊と解釋して）と連續する火山錐と誤まり、御嶽、乗鞍嶽を加へて、大體に火山性の山脈と看做してゐたのだから、同様の説を採録した志賀氏をのみ咎むべきではない、立山の條項に於て「世に大を説く者多し、然れども、眞成なる自然の大は、實に立山絶頂より、四望する所に在り」と結ばれた一言など、我々青年登山家を、狂喜させたものであつた。

後年に至つて、志賀氏は「日本のアルプス山に登るべし」といふ一文を起草せられ、歐洲アルプス山は、俗了せられたが、未だ俗了せられない一大風景區域が、日本にある、長老ウエストンの、所謂日本アルプスがそれであると言つて、彼アルプスに無く「此アルプスに見得る動物は、瀑布直下、カヤクマリ鳥の、巖樹の間に和鳴するもの、花崗岩の清冽、潺湲たる澗水に鮎魚きんせうごの遲疑するもの、是れなり、而かも彼の俗了せるアルプスが、到底此のアルプスに及ばざる所は、

原人時代の景象なり」として、ウエストンの、同じ意味の述懐を援引してゐる、彼も竟に「日本のアルプス」の文字を用ゐたのである、だが、それにしても、恐らく日本人としては、最も早く日本のアルプスなる文字を用ゐた方であらう、木曾川に對して「日本ライン」の稱呼を、世にみなぎらせたのも、彼であることは、世人熟知の如くである、その稱呼が、妥當であらうと、なからうと。

「日本風景論」が、よく行はれて、人心に大なる影響を與へたのは、書中に言つてゐることもいゝが、文章が實にうまかつたのである。理を盡くした歐文素と、簡潔勁拔な漢文脈が、よく融和してゐる、しかも翳々ともいふべき餘韻が、漂つてゐる、繪でいへば、トーンが整つてゐる、漢文脈といつても、破墨山水でなく、歐文素といつても、油繪のこつてりではない、謂はゞ水彩畫の、輕快なる筆觸と明朗なる色澤である、當時の文壇に於て、柴四郎（東海散士）徳富猪一郎（蘇峰）志賀重昂（矧川）は、三大文章家として、並稱されてゐたが、或は柴氏を除いて、朝比奈知泉（碌堂）を加へる人もあつた（碌堂は政論家で、最も辯難攻撃の文に長じてゐたが、私は讀まなかつた）、その徳富氏が「漫興雜記」（明治三十一年）の中で、志賀氏を評して、

矧川の文、浅井忠氏の畫、併論す可し。浅井氏の妙技、その刻苦經營の油畫よりも、寧ろ一氣呵成の、水彩畫にあり、矧川の文、亦然り、其大篇巨作、讀むに堪へざるにあらざるも、

寧ろ其粗毫率筆、興に乗じて、揮灑したるの神品に若かず。浅井氏の畫、骨格雄勁、色澤枯瘦、矧川の文、色澤豊麗、骨格或は及ばず。

と言はれたのは、同感である。

私は「日本風景論」の卷末に附した評語の中から、ラスキンの名を、初めて教へられたほどの晩學であつたが、志賀氏と、ラスキンとは、とかく聯想意識に上る名だけあつて、志賀氏も、ラスキンと比べられるなら、日本に、もつと名文家があるぞ、とばかり「利根川圖志」に載せられてゐる小金ヶ原の一文（安政二年十月）を艶稱して、ラスキンに超ゆる一等、と同じ風景論中に、述べてゐる。

「日本風景論」第三版印刷中、二十八年一月十三日、事を以て常陸筑波郡に行く、途次、小金ヶ原を過ぐ、冬景清瘦、車上「利根川圖志」を讀む、此間の風色を描きて、眞に逼る、想ふ、鄙著を批評する者、間々「ラスキン」「ラスキン」の語あり、噫、鄙著の如き、固より言ふに足らざるなり、唯だ「利根川圖志」中の此文、眞個に、ラスキンに超ゆる一等、讀過して、絶嘆に堪へざりき、既にして、午後五時半、筑波の山色を、約七里の外に望む、其色濃厚なる純碧、所謂普魯西亞藍プルシヤンブルーにして、光澤は之に優るもの、惜む、「利根川圖志」の能文者をして、此の山色を、寫さしめざりしを。

志賀氏自身が、好むと、好まざるとに拘はらず、彼は、ラスキンの感化を受けてゐたことは、争はれない。「風景論」述作の基調としては、ジョン・ラボック卿の「瑞西風景論」(一八九六年)、アーキボルド・ゲイキイ教授の「蘇國風景論」(一八六五年)などの先業が在つたとは思ふが、詩味と情趣に於て、「日本風景論」に及ばざること遠く、國語の差別を絶して、比較すれば、「日本風景論」の、兄たり得るものは、獨りラスキンの「近世畫家論」があるのみだと思ふ、志賀氏の訃音が、英國に聞えたとき、ウエストンは嗟嘆して「彼は日本のラスキンであつた」と言つたさうだ、彼自身が、離れたくとも、世間は、彼をラスキンから離さなかつた。

## 四

「風景論」中に於て、最も今日に適しないものがありとすれば、それは登山案内(山名の下に、小活字で、案内を記したるもの)であらう、本書製作の當時に於ては、交通機關も備はらず、自動車は勿論無く、電車と雖も、大都市を除いては、其便利が無い。登山は則ち徒歩登山で、草鞋や赤毛布持參の體たらくであつたから、所用の時間に於ても、路筋に於ても、其後舊道が廢滅したり、新道が専ら用ゐられたりして、今日から見れば、實用向きでもなく、これを當てにすることは、先づ出来ないことである。しかも本書に、原文の儘を取り入れた所以は、本書出現の年代に於ける登山の状態を知るに足るといふ歴史的の興味以外に、案内記の行文、壯麗健勁、その山の風姿を躍動して餘りあるものがある。例へば白山、立山、鎗ヶ嶽(今は槍の字を用ふ)の記事の如きもので、この中の鎗ヶ嶽は、當時の青年をして、鎗登山の念を起さしめたものであるし、前にも引用した立山の「眞成なる自然の大は、實に立山絶頂より、四望する所に在り」の一句などは、當時の若い登山者(至つて少數ではあつたが)を、興奮させたものであつた、故に一切洩らさず、之を採用した。

## 五

風景論の挿繪は、志賀氏自ら述べるところに依れば、大方は樋畑雪湖氏の作で、洋風の畫は、海老名明四氏の筆とあるが、茲に特筆したいのは、本書の挿畫は、木版に於て日本式の板目木版と、西洋式の木口木版とが、兩用せられてあることだ。併し板目木版の方は、日本では、古來有り來りて、浮世繪などに、板目がその儘、刷り出されてゐることは、珍らしくなく、色彩の濃淡は、凡べて刷りで出てゐる、即ち摺師の技工に待つところが多い。西洋の木口木版は、木口へ彫刻して、その彫刻家の獨創的な線に依つて、濃淡を刻み出すのである。風景論の挿繪の、木口木版は、森山天葩氏の刀であることは、その落款で知られる。この木口木版なるものは、西洋でも、

寫眞版やコロタイプ版が發明採用せられるやうになつて、俄かに衰頽し、今では所謂創作版畫方面に、餘喘を保つかの觀があり、日本の、木口木版作家としては、合田清氏などが、疾くに名を知られて明治中期までには、多くの作が散見された。志賀氏の風景論も、木口木版を挿畫とした點に於ては、最後の期に屬するもので、その點だけでも、挿繪として珍重するに足る、榛名山葛籠岩、女阿寒嶽、飛驒の山中など其一例である。それ等は、主要なものとして、本文庫にも複寫せられてゐる。

## 六

志賀重昂氏は文久三年十一月十五日、參河の岡崎に生れ、矢矧川に因んで、知川、又は矧川漁長などと號せられてゐた。重昂の名は、氏自身シゲタカと訓んでゐられた。明治七年、近藤眞琴氏經營の攻玉社に學び、十一年九月、東京大學豫備門に入學、十三年四月北海道に渡り、札幌農學校に入り、十七年七月同校を卒業。北海道在學中は、アイヌ人を案内として、好んで人跡未到の僻地を探檢、風餐雨虐、殆ど足跡を北海道全土に印し、後年も屢ば這般の冒險旅行のため、行衛不明を傳へられたことがあると云ふ。氏の得意とする詩に、「鴻爪雪泥幾往還、安南之海瑞西山、平生著述何邊獲、多在風衫雨笠間」の絶句があるが、全くこの通りである。南洋旅行のことは既

に前に述べたが、明治二十一年四月に三宅雪嶺、棚橋一郎、其他諸氏と共に雑誌「日本人」を創刊し、國粹保存主義を高調せられ、明治二十七年「日本風景論」を著はし、其前後にも著述尠からず、昭和二年四月六日、病歿せられた。享年六十四歳。

自然に關する著書は「日本風景論」の外に「河及び湖澤」「地理學講義」等があるが、私の見るところ、畢生の三傑作として「南洋時事」「日本風景論」及び「大役小志」(日露大戰、殊に旅順攻圍の從軍記録)を推すべきであらう。

目次

解説……………小島烏水…三

一 緒論……………二七

青ヶ島の住民——占守島土人——エスキモー土人——日本の江山

瀟洒(二六)——瀟洒の粹——日本の秋——植物黄色素の代表者——植物紅色素の代表者——槭樹の紅葉は美と瀟洒を兼併す——日本の秋色は英國の秋色に優る

美(三三)——美の精——日本の春——支那人、朝鮮人は所謂「鶯花」の眞面目を知覺せざる者——歐米諸邦の春は言ふに足らず

跌宕(三三)——日本の江山の洵美なる理由——日本の日本海岸と太平洋岸との太差

二 日本には氣候、海流の多變多様なる事……………四三

日本の氣候——日本の海流——日本の風候——日本の氣候の偏差は多様なり

日本の生物(四三)——日本の生物は寒熱二帯のもの相錯互す——日本は寒熱二帯の風物を兼併す

日本の松柏科植物(四四)——松柏は日本人の性情の標準となすに足る——日本は松柏科植物に富むこと全世界第一なり——對馬の海岸——日本は松國なるべし

日本の禽鳥類(四六)

日本の昆虫類(四七)——日本の蝴蝶——日本蝴蝶の「同種變形」

日本の花(四八)——日本の禽鳥、蝴蝶の雄麗燦爛たる所因——櫻花と松柏とを調合安排せしものを以て日本人將來の特性となさざるべからず——橘南谿の「氣候」説——日本は一個の島山なり——薩摩、大隅、日向地方の氣候、生物——北

國地方の氣候、生物——南國と北國と諸般の比較——中部の地

日本の生物に關する品題(四九)——歐米人の其國に在りて見る能はざる所を取り品題となすべし

三 日本には水蒸氣の多量なる事……………

五四

日本に於ける水蒸氣の現象(四九)——曙色——暮雲、殘煙——霞——卯の花くだし、五月雨、虎の涙雨——二百十日——雪空、雪もよひ、雪おこし、六花

東山道の水蒸氣(春)(五〇)——東山道に於ける百花一時競發の盛觀——百花一時競發の所因

東海道の水蒸氣(初夏)(五一)——日本をして米産國たらしめたる所因——日本國植物の蒼翠秀潤なる所因——山林保護法の實際上の勵行——柑——柑の日本に繁生する所因——石材に菴苔蘿葛の蔓生する所因——函根山の草樹鬱葱たる所因

——茶の日本の主産物となりし所因——富士山——晨夕富士山嶺を白雲の上に仰望する所因——畫師の太悟すべき所——富士、大井、天龍諸江の夏間流水の滾々たる所因——水蒸氣多量の感化に因り音響を殊に分明に聞く

山陰道、北陸道の水蒸氣(夏)(六一)——山陰道の夏——針木嶺山道の雪——針木嶺頂の壯觀——日本海岸に於ける夏季の來狀

紀南半島、四國の南半、九州の水蒸氣(秋)(六二)——紀南半島の秋——紀南半島に柑の繁生する所因——四國南半の秋——四國南半の天候、植物——四國南半は日本國中にて最も水蒸氣多量の處——魚梁瀬山脈の雲——土佐國中の溝渠運河の水量は多々なり——四萬十川の水暈——九州の秋——九州の秋の雜色——日本の秋色は北亞米利加、獨逸の秋色に優る

北海道の水蒸氣(冬)(六七)——北海道の雪景——北海道雪景の奇觀——北海道東海岸の冬——海上の冰封——コマイ魚釣山陽道、四國の北半(六八)——山陽道、四國の北半は日本國中の最も乾燥せる部分なり——山陽道、四國の北半に製鹽業の盛なる所因

迷景(六九)——伊勢那古浦の廢樓

颯麗(七〇)——曲亭馬琴の沖繩海上颯麗の紀事

東京に於ける水蒸氣の現象(七七)——東京に於ける天巧人作の相調和融渾せる大觀——東京は太俗の處にあらず

岩石の霽敗(七八)——妙義山——五剣山——笠置山中の「搖石」——日本國にして水蒸氣の多量ならざりせば天文地章の洵美なし

日本の水蒸氣に關する品題……………

八一

四 日本には火山岩の多々なる事……………

八三

日本の火山脈——富士帯——火山岩の多在する日本の景色をして洵美ならしむる主原因

日本の風景と朝鮮、支那の風景(八三)——朝鮮の地質——支那北方の地質——支那の黄土——支那南方の地質

日本の火山「名山」の標準(八五)——「名山」の標準——橘南谿の「名山論」——「名山」とは火山の別稱なり

富士山(八六)——富士山に對する世界の曠聲——理學上富士山の優絶なる所——富士山は全世界「名山」の標準なり

千島列島の火山(九〇)

北海道本島の火山(九四)——千島列島より連續せるもの——後方羊蹄山羣に屬するもの——渡島山系の東脈——噴火灣——全世界中雄絶壯絶の觀

本州東北の火山(七七)——中央火山脈——西岸火山脈——寒風山火山脈

中部日本の火山(二九)——富士山火山脈——立山火山脈——日本國中の眞成なる「深山幽谷」——此の繁區を跋渉する準備——原人時代の形象目前に映出し來る

南日本の火山(三〇)——日本海火山脈——白山火山脈——山陰諸國をして幽邃神聖の區域たらしむる所因——阿蘇山火山脈——霧島山火山脈——ラボック博士の英國風景説——英國の風景——英國には火山岩の一大山だになし

日本火山の綠色(三〇)——日本の火山は綠色にして韻致あり

火口湖(三〇)——火山力の副産物たる湖——噴起の際生出せる窪地に化成せし湖——河道を遮斷して化成せし湖——火山湖の景象——世の「平和」中の最平和の代表者——火山湖と大陸所在の湖——洞庭湖——西湖

玄武岩(三〇)——岩代の「材木巖」——越後「七不思議」田代ノ七ツ釜——但馬の玄武洞——玄武岩の大觀——筑前芥屋浦大門崎の玄武洞——肥前神崎の「七ツ釜」——肥前神崎より呼子港に到る間の玄武岩——陸中の「岩屋」——鹽原の「材木石」——富士川の「俵岩」——阿仁の「柱石」——火山力の地球に於ける功績——火山力の日本國に於ける功績——羅馬國と火山岩——歐米文明の淵源火山國に在り——火山、火山岩を頌美せざるは日本人の本色にあらず

附録

登山の氣風を興作すべし

山は太地の彩色を絢煥す——雲の美、奇、大は山を得て映發す——水の美、奇は山を得て大造す——山中の花木は豪健磊落なり——澤元愷の「登富士山記」

登山の氣風を興作すべし(二七)——學校教員に申言す

登山の準備(二八)——衣——食——器

花崗岩の山嶽(二五)——日本の山嶽中火山岩に次ぎて高邁なるもの——花崗岩、片麻岩の本色——花崗岩、片麻岩の有形的結果と無形的感化——伊太利人と山嶽——九州の花崗岩——嶺中振山——四國の花崗岩——中國の花崗岩——中國の花崗岩山嶽——瀬戸内の花崗岩——瀬戸内の春——瀬戸内の夏——瀬戸内の秋——小豆島寒霞溪——瀬戸内の冬——「世界的の絶勝」——澤元愷の「汎海紀行」——神戸港より長崎港に到る海上湮程——畿内の花崗岩——生駒山以南の片麻岩——山城、大和、近江、伊賀境上の花崗岩塊——笠置花崗岩塊の南に在る片麻岩——山城、近江境上の花崗岩塊——湖東の花崗岩——中部日本の花崗岩——參河の花崗岩——海道の眞風景たる「白沙青松」は參河に入り始めて眺め得——岡崎以北の花崗岩の將來——甲斐國の二花崗岩塊——北日本の花崗岩——北日本と南日本と景物の特異なる所因——北海道の花崗岩

登山中の注意(二七)——日本人の自然拜崇

五 日本には流水の浸蝕激烈なる事

火山岩に於ける浸蝕(三三)——花崗岩に於ける浸蝕(三七)——花崗岩水蝕後の踳躑躅岩なる處——花崗岩内部罅隙の結氷——木曾地方の景象——花崗岩の湍水は銀河の如し——花崗岩と月——花崗岩と梅花——月ヶ瀬の梅花——月ヶ瀬の梅花に勝絶する偶爾にあらず——花崗岩と白沙青松——中國の美觀

石灰岩に於ける浸蝕(三四)——石灰岩の洞窟——修驗道の祕所、役ノ行者が密法を修したる處、弘法大師の護摩洞など云へるは石灰の洞窟なり——地下の流水及び地上の流水石灰岩を穿鑿する現象及び痕跡——石灰岩の石門

各岩の浸蝕に伴へる雑多の結果(三四)——日本の大瀑布——奇巖——石門——峡谷

流水の浸蝕に伴へる他の現象(三五)——天界の虹と流上の虹——溪聲——流水と岩石の状態——「辨慶の携へ來りたる石」、「天狗の携へ來りたる岩」

湖水の浸蝕(三五)——竹生島

六 日本風の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す……………二六八

海水の浸蝕(三六) — 陸上に遺存せる太古浸蝕の奇蹟  
絶大の大作、曠世の傑品を新創せんと欲せば、日本國土絶特のもの、即ち水蒸氣、火山、流水の浸蝕に寄托するを要す  
— 北海道に一遊すべし — 原人時代の景象 — 樺太島の風景 — 臺灣島及び山東半島 — 富士山を「岱宗」となすべし — 「臺灣富士」 — 「山東富士」

七 日本風景の保護……………二七二

江山の洵美、生植の多種は日本人の審美心を涵養する原力、此の原力を殘賊するは日本未來の人文啓發を殘賊すると同  
一般 — 名所舊跡の破壊は歴史觀念の聯合を破壞す — 名所圖會類 — 美、利と未だ調和せず

八 亞細亞大陸地質の研鑽 日本内地學家に寄語す……………二七六

亞細亞大陸の地質系統は須らく日本内地學家の使用せる新術語を以て概括すべし

九 雜 感 花鳥、風月、山川、湖海の詞畫に就て……………二七八

日本國を構造せる主要の岩石 — 富士山は名山の標準 — 詩文、俳諧、繪畫は理學と調和適合せざるべからず — 驟雨を畫くに — 太陽の光線を畫くに — 畫人青涯 — 沼豈に美なからんや — 自然の太妙は變々化々限り無きの間に在り  
— 筑波山頂の眺望 — 百鳥譜 — 鳩 — 雉子 — 蒼鷹 — 斥鴳 — 大鵬 — 鳳凰 — 稻負鳥 — 呼子鳥 — かやはく  
— 椋 — 鶯 — 鶉 — 駒鳥 — 目白 — 頬白 — 鶉 — 雲雀 — 三光 — 佛法僧 — 鶯 — 提壺 — 布敷 — 蜀魂 — 雁  
— 時鳥 — 鶉 — 燕 — 鶉 — 水鷄 — 千鳥 — 鴨 — 馬糞鷹 — 鳩 — 泉 — 鶉 — 啄木 — 鶯 — 雀 — 鶉  
— 家鴨 — 鶉 — 鷹 — 鶉 — 鶯 — 翡翠 — 鶯 — 瑠璃 — 鶯 — 鶯鳥 — 發句、俳諧 — 自然を寫す跌宕の語  
— 名取川の秋 — 河内の景象 — 紀伊の景象と仁科白谷 — 日本人は自然の美を愛す

限りなき樂しみ

内の樂を以て本とし 耳目を以て外の樂を得る媒としてその欲になやまされず 天地萬物の景色のうるはしきを感じれば其たのしみ限なし 此の樂朝夕目のまへにみち／＼て餘あり これをたのしむ人は則山水月花の主となりて人に乞ひもとむるに及ばず 財もて買ふにあらざれば一錢をも費さず 心にまかせてほしきまゝに用ふれども盡きず 常にわが物として領すれども人諍はず 何となれば山水風月の佳景は固より定れる主なければなり かく天地のうち窮なき樂を知りてたのしむ人は富貴の奢を羨まず そのたのしみ富貴にまさればなり 此の樂を知らざる人はたのしむべき事常に目の前にみち／＼て多けれど 其の樂を知らざれば樂まず 世俗のたのしみは其のたのしみ未だやまざるにはやく我が身のくるしみとぞなれる 譬へば味よき物を貪りてほしきまゝに飲み食へば始は快しといへどもやがて病起りて身のくるしみとなるがごとし

凡世俗のたのしみは心を迷はし身を損ひ人を苦ましむ 君子のたのしみは迷なくして心を養ふ外物を以て言へば月花をめ山水を見風を吟じ鳥をうらやむ類 其の樂淡ければ終日たのしめども身に禍なく人のとがめ神のいさむるわざにあらず 此のたのしみ貧賤にしても得やすく後の禍なし 富貴の人は其の奢り怠りにすぎみて此のたのしみを知らず 貧賤の人は此の二の失なくして志だにあれば此の樂を得易し

貝原益軒



## 日本風景論

志賀重昂著

### 一 緒 論

「江山洵美是吾郷」(大槻磐溪)と、身世誰か吾郷の洵美を謂はざる者ある、青ヶ島や、南洋浩渺の間なる一頃の噴火島、爆然轟裂、火光煽々、天日を焼き、石を降らし、灰を散じ、島中の人畜殆んど斃れ盡く、僅に十數人の船を犠して災を八丈島に逃れたるあるのみ、而かも此の十數人竟に其の噴火島たる古郷を遺却せず、火の熄むを待つこと十三年、乃ち八丈を出で欣々乎として其の多災なる古郷に歸りき。占守<sup>シユムシル</sup>や、窮北不毛の絶島(千島の内)層氷累雪の處のみ、後開拓使有司の其の土人を南方色丹島<sup>シユコタン</sup>に遷徙せしむや、色丹の地棋楠樹<sup>オコノ</sup>青蒼、落葉松濃かに、黒狐、三毛狐其蔭に躍り流水涓々として處々に駛り、玉蜀黍穫べく馬鈴薯植うべく、田園を開拓する者は賞與の典あり、而かも遷徙の土人、新樂土を喜ばずして、歸心督促、三々五々時に其の窮北不毛の故島に返り去る。シカゴの博覽會、近世紀に於ける人智の粹を盡くし、會場亦た金碧燦爛、眩耀眼

を奪ふ、中にエスキモー土人の村落を置き、土人此處に居る幾多、而かも之れを欲せず、其の氷山雪塊の本國に逃れ去らんとしき。脆きは人の情なり、誰か吾郷の洵美を謂はざらん、是れ一種の觀念なり。然れども日本人が日本江山の洵美を謂ふは、何ぞ管に其の吾郷に在るを以てならんや、實に絶對上、日本江山の洵美なるもの有るを以てのみ。外邦の客、皆な日本を以て宛然現世界に於ける極樂土となし、低徊措く能はず、自ら

花より明くる三芳野の春の曙みわたせは

頼 山 陽

もろこし人も高麗人も大和心になりぬへし

の所あらしむ。想ふ浩々たる造化、其の大功の極を日本國に鍾む、是れ日本風景の渾圓球上に絶特なる所因、試みに日本風景の瀟洒、美、跌宕なる所を謂ふべきか。

(一) 瀟 洒

(一) 脩竹三竿、詩人の家、梅花百株、高士の宅、是れ歐米諸國に在りて絶えて見る能はざるの景物。

(二) 一聲の杜宇知る何の處ぞ、澱江の渡頭新緑流れんとす。

(三) 芭蕉庵外、一泓の綠淨、青蛙雨を喚び來る。

(四) 一雨空を洗ひて覺東の樓臺愈々高く、東山の嵐翠滴れんとし、眉の如きの新月、山の側面に懸る。

(五) 須磨の古驛、賤が苦屋の鹽焼く煙一縷、方さに磯馴松の間より颯がる。

(六) 鈴蟲聲は咽ぶ萩花の路、風は清し宮城野外の秋。

(七) 老雁一聲、寒砧萬戸、多摩の江心恰も秋月の白きを見る。

(八) 南都の客舎、聴き得たり鹿鳴の呦々を。

(九) 鮭捕り網を斜陽に曝らす石狩江村の晩、奥州訛りの漁唱、雪の如き萩花の間に起る。

(十) 夜雪初めて霽れ、分明に認め得たり屯田村(北海道)の燈火三四點。

日本風景の瀟洒なる所此の如し、而して瀟洒の粹を

(一) 日本の秋

となす。若し夫れ亞細亞大陸よりの西北風微かに吹き初め、霜氣漸く動きて、爽籟八十餘州に徹透するや、歐米諸邦稀に看る所の白桐は、黄ばみ盡くして笛聲、砧聲と共に落ち、頃しも鴻雁は、朔北地方に餌食の缺乏するを以て、黨派を團結し相競ひて寒雲を渡り、餌食の饒多なる日本に南來して蓼汀蘆渚の間に下り、時に看る、植物黄色素の代表者にして而かも歐米諸邦に看得ざる公孫樹は、葉々黄金を累ね來るを。獨り植物黄色素の代表者の日本に多在するのみならず、植物紅

色素トチアンの代表者たる槭樹モミヂ屬も亦た日本國中到る處に普遍し、槭樹モミヂ、ミヤマモミヂ、ツタモミヂ（一名トキハカヘデ）、オニモミヂ、三角楓タウカヘデ、ハナカヘデ、ヒトツバカヘデ、ミツデカヘデ、ウリカヘデ、ウリハダカヘデ、ハウチハカヘデ、テツカヘデ、カチカヘデ、カラコギカヘデ、オガラバナ、チドリノキ、メグスリノキ、チャウヂヤノキなる十八種の一齊に紅葉して宛然天女の雲錦を曝らす如きは、實に瀟洒と美とを兼併するもの。想ふ此の如きの大觀、歐米諸邦に多く看得ざる所、英吉利人、自尊自大、動もすれば輒ち其のテーマス江畔ニューンハム、パンボールンに於ける九月の秋色を夸揚し、マダレンに於ける十月初旬の秋色を矜説す、然れども槭樹屬は英國に殆んど絶無たり、槭樹屬にして絶無なる處、如何ぞ秋の大觀を知覺せんや、乃ち知る、

紅葉ちるなからのやまに風吹けは

刑部卿範兼

にしきをたむ志賀の浦なみ

の如き句は、彼の自然界の景象を細察し酷愛する「湖畔詩人」ウォルヅウォルスの頭腦中にすら描く能はざること。スコット、一代の天才、自然の景象を寫すや往々妙に入る、特に自然界百多景象の彩色を調合鹽梅するの頭腦に到りては、優に第一流の畫家と比肩し得、而かも惜む其の文筆紅楓を寫すの絶少なるを。要するに英國の人、其國に在りては紅楓を描寫する能はざる者、英國の秋たる何すれぞ日本の秋と相對比するに足らんや（第六十四頁より六十七頁に到る「紀南半島、四國の南半、九州の水蒸氣」と參照すべし）。

(二) 美

- (一) 綠楊は煙の如く畫の如く名古屋城中を籠め、樓閣高低其間に隱見す。
- (二) 桃山（山城）の落花、亂點して紅雨の如く、地に布きて錦繡に似。
- (三) 嵐峽の櫻雲、微月を掠め、夜色朦朧。
- (四) 川中島四郡、菜花麥苗、黃綠繡錯、千曲の一水其間に屈折し、上野、信濃の群嶺、濃淡高下、地平線上に繚繞す。
- (五) 二州橋下、春潮雨を帯び、鱸シラウオ殘魚網に上る。
- (六) 灌佛の人は歸る國分寺の外、一群の少女山躑躅花を髮に挿みて過ぐ。
- (七) 櫻島（薩摩）の圓錐的火山、籬落其の腰脚を環ぐり、綠竹之れを圍み、其間柑、柚ダイダイ、臭橙キシキシ、金橘キンカン、朱欒ザボーンの枝條相雜接し、烟草の畦圃高低參差す。
- (八) 肥後の山間、俯して谷を下瞰す、深サ數百尺、内に人家數楹、空翠映發し、一抹の炊煙、鷄聲、犬聲と共に起る。
- (九) 駒ヶ嶽（信濃）の峯頭、翠然たる偃松ハシマツは、雪の如き花崗岩の上に匍匐し、翠は白に抹し、

白は翠を粉す。

日本風景の美なる所此の如し、而して美の精を

(一) 日本の春

となす。支那人、朝鮮人や輒ち「鶯花三月」と稱ふ、「鶯花」の眞面目を知覺するか、

漢土無櫻。又無鶯。非無櫻也。無我櫻也。鶯亦然。彼之有鶯。其形大。其色殊。其聲不若我鶯之美也。其或來于肥筑之地。我稱之爲高麗鶯。至於我鶯。則曰。黃頭鳥也。柴鶴鴝也。皆以其近似者。比擬之云爾。其實我鶯聲之美。既過彼鶯。而使彼有之。則誰舍此而不稱耶。而吾未見黃頭鳥。柴鶴鴝之詠於詩也。舍繞梁遏雲之巧。而愛閨巷無節之謠。是豈人之情也哉。故知其果無我鶯也。嗚呼。櫻而不若我花之麗。鶯而不若我聲之美。謂之無櫻無鶯可矣。」人而不得爲人之道。孰謂之有人乎。苟生於我而爲人者。修其德音。勿使鶯獨擅其聲之美。

齋藤竹堂

正德辛卯。韓使來聘。時宣義筆語於客館。與彼學士。書記等。質問物產。宣義曰。此樹我土名櫻花。樹高二三丈。葉與垂絲海棠一樣。惟枝條不柔軟爲異也。三月初生葉開花。略似薔薇長春花形。其色有白。有紅。又有重瓣。單瓣之異。蒂長三四寸。於葉間或三萼至五六萼。爲叢而生。一如海棠花。而蒂差長。單瓣者結實。形似郁李子而小。生青熟紫赤味甘。其葉穉者淺紫色。大者縹綠色。至霜後。葉丹可愛。花品甚多。至數十百品。其最可觀者。有都勝。粉紅重瓣。花頭甚豐。特極嬌麗。有御愛。單瓣粉紅。比常花差大。有美人紅。重瓣嬌紅開早。有緋櫻。千葉初綻深紅。及開色漸衰。有香櫻。芬郁特甚。又有一叢中開花。重單相間者。衆花攢爲毬者。繁密綴枝作花。如千葉郁李花者。豐腴艷美。群芳皆在下風。徧查古今載籍。率收垂絲海棠。不言有此花。豈以中原之地所稀有而不及見耶。貴國與弊邦相鄰。地氣當不甚遠。或有此花。名字亦以何稱之也。學士李東郭答曰。俺始到馬島。得見貴邦所謂白櫻桃。其枝葉之奇。信如書中所跡。而第恨已後花時。不得見其花色爛熳耳。俺國櫻桃樹高不至一二丈。不過鬱密叢生。其實有紅白兩種。而花色亦零碎。婆娑不甚美好。故種之者。只爲其食實而已。與貴邦之櫻。絕不相類矣。

稻宣義

と、支那人、朝鮮人は「鶯花」の眞面目を知覺せざる者。歐米諸邦に到りては、初春に梅花なく、晩春に櫻花なき處、其の春なる者、畢竟言ふに足るなきのみ。

(三) 跌宕

(一) 那須の曠野、一望微茫、松樹或は三或は五蒼健高聳す。

(二) 萬頃の太平洋面、<sup>タケノコイハ</sup>筍岩(洋客は「ロットノ妻」<sup>ワイフ</sup>)と稱す、基督教經典の所謂ロットの妻女

天命を犯し上帝の罰を蒙りて鹽の柱に化す云々より斯く附名せしもの、岩は八丈島と小笠原列島との間、太平洋上に在り) 峭起し、雪浪之れに怒撃し、一隻の信天翁アホウトリ舞翼を張りて岩頂に佇立す。

(三) ブランド薬師の古堂(信濃)、高巖絶壁の上に在り、危欹墜ちんとす。

(四) 雁寒雲を渡り、匹馬白川關外の曉色に嘶く。

(五) 秋高く、氣清く、天長へに纖雲なく、富士の高峯、武藏野の地平線上に突兀す。芙蓉萬仞、月中に高き處。嶽影太平洋上に倒映する處。

(六) 北海道の沿岸、路左幾百尺の石壁峭立して天を挿み、路右斷崖に臨み、其下怒濤騰沸、飛噴逆上す。

(七) 立山(越中)の絶頂、百餘の山嶽を下瞰し、一齊に雙眸中に收むる處。

(八) 阿蘇の峯巔、側に二條の噴烟空を衝きて蒸上し、前に直徑七里ある舊火口外輪の連山隄防の如くに圍繞するを目八分に看、輪内陡開して平林田疇、村落簇々、煙火東西に起り、耕鋤馱馬隱約の間に在り。

(九) 樽前(膽振)の嶽腹、大塊なる赭褐色の溶岩相錯列し、噴火後、高樹は乾皮龜裂し、枝葉悉く去りて骨立竦峙する處、一片の缺月慘澹に照し來る。

(十) 捨子古丹(千島)の満島積雪皚々、最高點より一條の噴煙斜めに騰沸す。

(十一) 日本海上、雲霧冥合、其上より鳥海上の三角形なる峯尖忽焉と露はる。

(十二) 雷雨鳴門(阿波)の上を過ぎ、雲色は潑墨の如く、渦流は人立す。

(十三) 驟雨一過、太平洋上、四望浩渺、虹半ば消えて、紅色、黄丹色、黄色の彩雲、滾々として天、水に連る處に湧く。

(十四) 最上川の上流、飛泉疊湍、一瞬十里、毛髮爲めに豎立す。

(十五) 仰ぎて大川の天上より落つるを看、俯して奔雷を地下に聽く、是れ那智の瀑布。

(十六) 滿眸皆な梅、月色皎々、他に此の一物を看ず。

日本風景の瀟洒、美、跌宕なる所此の如し、其の此の如きある抑々故あり、曰く、  
一、日本には氣候、海流の多變多様なる事

二、日本には水蒸氣の多量なる事

三、日本には火山岩の多々なる事

四、日本には流水の浸蝕激烈なる事

此の四の者を逐次縷述するに先ち、日本國の日本海岸と太平洋岸との百般上に太差ある事を知了せざるべからず、唯だ其の大體を表記し、以て曉々たる縷述に代へんか



## 日本海岸

- (一) 日本海岸は傾斜急劇なる所多く懸崖も多し。
- (二) 日本海岸は曲屈少し、故に短。
- (三) 日本海岸は曲屈少し、故に港、嶽、熱鬧なる埠頭少し。
- (四) 日本海岸には沖積平原割合に少し。其の平原と稱するものも岡臺の連濱まで延長する間に緩慢なる斜面をなす所を云ふもの多し。
- (五) 日本海岸の地質は堅硬なる所多し。
- (六) 日本海岸の土地は沈降若くは減少する所多し。
- (七) 日本海岸には鑛山殊に多し。
- (八) 日本海岸の風位は規律正し。殊に冬季は強半西北風吹く。此の西北風は亞細亞大陸より

## 太平洋岸

- (一) 太平洋岸は傾斜急劇なる所少く懸崖も少し。
- (二) 太平洋岸は曲屈多し、故に長。
- (三) 太平洋岸は曲屈多し、故に港、嶽、熱鬧なる埠頭多し。
- (四) 太平洋岸には沖積平原割合に多し。岡臺の連濱まで延長する間に緩慢なる斜面をなす所の所謂平原としては少し。
- (五) 太平洋岸の地質は疎鬆なる所多し。
- (六) 太平洋岸の土地は升起若くは増加する所多し。
- (七) 太平洋岸には鑛山殊に少し。
- (八) 太平洋岸の風位は變化あり。然れども夏季は大概東南風吹く。此の東南風は印度洋、支

直ちに吹き到る故に本來甚だ乾燥せるものなれども、日本海を經過する間其の發上したる水蒸氣を收納し、之れを傳送して日本本州の分水脊をなせる山脈の頂巔に衝突し、此の水蒸氣は即ち此所に凝結して、分水脊以北なる土地を濕潤模糊たらしむ、故に

冬中曇天多く、雪を降すこと多量。

冬季は濕氣多く、夏季乾燥す。

年内を概するに太平洋岸より晴天少し。

- (九) 日本海岸は北方に在るが上に、其の氣象は亞細亞大陸の感化を享け(即ち大陸的)、且つ日本海の中央には寒帯海流流駛するを以て、氣候寒冷。

- (十) 日本海岸は潮汐干満の差少に、最退潮の間と雖も干潟を看るなし。潮水は月の盈虧に應

那海を經て吹き到る、故に本來甚だ温熱なるが上に、印度洋、支那海を經過する間季候風中なる多量の水蒸氣を收納し、之れを日本に傳送し來り爲めに梅雨を醸す。又た八九月の候に到れば印度洋を經て大雨暴風の來襲すること多し。

冬中晴天多く、雪を降すこと少量。

夏季は濕氣多く、冬季乾燥す。

年内を概するに日本海岸より晴天多し。

- (九) 太平洋岸は南方に在るが上に、其の氣象は支那海、印度洋の感化を享け(即ち洋海的)、且つ其の沿岸には赤道海流流駛するを以て、氣候温暖。

- (十) 太平洋岸は潮汐干満の差大に、四五尺乃至一丈に到り、又た干潟數里を看る。潮水は月

ぜず。

(十一)日本海岸は冬春の間風濤險惡、船舶の難破するもの多し。

(十二)日本海岸の氣壓は概して太平洋岸より強し。然れども太平洋岸よりも濕氣の多量なる地方も多し。氣壓暑中強。

(十三)日本海の蒸發は太平洋より遲緩なり。其の鹽分は太平洋よりも少量。而して晴天少し。故に製鹽の事業盛ならず。

(十四)日本海に注入する川河は北流す。

- (い) 石狩川 (石狩)……………對 十勝川 (十勝)
- (ろ) 御物川 (羽後)……………對 北上川 (陸中、陸前)
- (は) 信濃川 (信濃、越後)……………對 利根川 (上野、武藏、下總、常陸)
- (に) 犀川 (信濃川の一幹流、信濃)……………對 天龍川 (信濃、遠江)
- (ほ) 神通川 (飛驒、越中)……………對 木曾川 (信濃、美濃、尾張、伊勢)

の盈虧に應ぜず。

(十一)太平洋岸は夏秋の間風濤險惡、船舶の難破するもの多し。

(十二)太平洋岸の氣壓は概して日本海岸より弱し。然れども日本海岸よりも濕氣の少量なる地方も多し。氣壓寒中強。

(十三)太平洋の蒸發は日本海よりも急速なり。其の鹽分は日本海よりも多量。而して晴天多し。故に製鹽の事業盛なり。

(十四)太平洋に注入する川河は南流す。

- (い) 伊豆七島及び小笠原列島。富士山火山脈の南走し洋中に入りたるものにして、大島より八丈島を崛起し、小笠原十七島を崛起し、明治廿四年新版圖に入りたる硫黃三島に到るもの。
- (ろ) 大隅列島及び沖繩列島。火山脈遠く南洋諸島に起り、臺灣島を經、沖繩列島を崛起し、大隅列島より薩摩に上り、櫻島を崛起

(十五)日本海中に在る島嶼は海岸に并行す、即ち海岸に沿ひて横線的に海中に並列す。此等の島嶼は、火山脈の海中に走りて、低所は海中に沈没し最高點のみ海上に崛起し以て島を成すものにして陰然二群島を成す。此等の中未だ全く本土より分離せず島と成らざるもの多し。

(い)羽後の男鹿半島より起り、日本海に入り、羽前の飛島、越後の粟生島を崛起し、越後に上り、角田山、彌彦山、米山、妙高山を崛起し、竟に富士山火山脈に合するもの。

(ろ)火山脈佐渡に起り、能登半島に上り、寶立山、高洲山、鷹爪山を經、再び海に入り、隱岐の島後、島前、長門の見島、壹岐島を

(十五)太平洋中に在る島嶼は洋岸に并行せず、即ち飛石の如く縦線的に洋中に羅列す。此等の島嶼は、火山脈の洋中に走りて、低所は洋中に沈没し最高點のみ洋上に崛起し以て島を成すものにして歴然二群島を成す。此等は皆な本土より全く分離し悉く眞正の島と成れり。

(い)伊豆七島及び小笠原列島。富士山火山脈の南走し洋中に入りたるものにして、大島より八丈島を崛起し、小笠原十七島を崛起し、明治廿四年新版圖に入りたる硫黃三島に到るもの。

(ろ)大隅列島及び沖繩列島。火山脈遠く南洋諸島に起り、臺灣島を經、沖繩列島を崛起し、大隅列島より薩摩に上り、櫻島を崛起

崛起し、平戸島、五島に到るもの。

(十六)日本海岸には概して砂糖、煙草、藍の類を産出する所少し。

(十七)日本海岸は在來交通の利便甚だ少し。

(十八)日本海岸は太平洋岸よりも人口少し。

(十九)日本海岸にては未だ日本歴史中の重要な事件を演出せしことなし。

(二十)日本海岸は未だ發達進暢せず、今日より發達進暢せんとするもの。

(廿一)日本海岸は露西亞、滿洲、支那の北部、朝鮮に對するもの。

如繩路傍北溟通。不與南方景象同。

隨月潮頭無大小。礎崖濤勢有雌雄。

天開鴉帶崦嵫日。海遠鴻呼鞞鞞風。

孤客老懷自語得。越山四度七年中。

市川寬齋

し、霧島山を経て肥前に入るもの。

(十六)太平洋岸には概して、砂糖、煙草、藍の類を産出する所多し。

(十七)太平洋岸は交通の利便甚だ多し。

(十八)太平洋岸は日本海岸よりも人口多し。

(十九)太平洋岸にては在來日本歴史中の重要な事件を演出し、王朝歴代の興亡多くは此所に決せり。

(二十)太平洋岸は甚だ發達進暢し、日本の文化は多く此所に聚りたるもの。

(廿一)太平洋岸は支那の南部、南洋諸島、濠太利、米國に對するもの。

紅墩直上亂松邊。萬井人家乍粲然。

水合群流歸大壑。山陀餘勢赴平川。

少連逸事哀殘闕。武衛遺民痛變遷。

滿眼昇平今有象。蘆花洲化稻花田。

曾我耐軒

不信人間竟無力。欲倩神斧破天慳。遺恨力薄破未了。枉教馮夷癡且頑。大塊文章看何日。黑風白雨妙義山。

矧川生



## 二 日本には氣候、海流の多變多様なる事

日本、細長き島國、蜿蜒として北より南に延び、其間互ること實に三十度たり、北の方北極圏を距るゝ纔に十度半、南の方熱帶圈に入る一度半強、氣候宛として半寒帶、溫帶、熱帶を包羅せり。海流や、太平洋沿岸の南半は赤道海流（黒潮）の洗ふ所となり、北半には寒帶海流（親潮）駛走し、日本海沿岸にも亦た赤道海流の一派（對馬海流）注ぎ來り、寒帶海流（リマン海流の餘派）其間に錯流し、日本實に寒熱二海流の會所に當る。風候に到りては、冬春の間は亞細亞大陸より西北風蓬々として到り、五月、六月、印度洋上季候風變化の餘派到り、九月、十月、復た到り、而して沖繩臺灣の邊は東北貿易風吹くこと嫻々。既に然り、日本や、寒溫熱三帶の間に據在し、寒熱二海流の會所に當り、變風、季候風、恆風の三風域に跨り、加ふるに日本の地勢たる、幅狹きが上に、高崇たる山脈の聳立するを以て、海岸より山嶺に到るまで氣候の偏差多様にし、熱帶、溫帶、半寒帶、寒帶を併有す、宜べなり造化の萬象、其の開闔變化の狀、昇降奇正の形、生育植養の功を日本の内に鍾めたることや。

且つ夫れ日本の地形、一葦水の海峽を隔て、朝鮮半島より滿洲の寒帶平原に通じ、北海道より樺太島（薩哈連）を経て髮の如きの峽水、直ちに西比利亞寒帶平原に入り、又た千島列島より忽ちカムサッカに連り、而して南の方沖繩列島より臺灣を経て、印度、支那、南洋諸島と應接す。是を以て其の

### (一) 生物

の如き、寒熱二帶のもの相錯互し、百尋の雪塊、上に北極アウロラボレアリス光高く半空を繞ぐり、其影氷海を掩映して地平線外遙に紅を抹する處、一群の海豹聲を和して長へに嘯き、臘肭獸身を掠めて相躍るの邊（千島列島）より、白珊瑚礁上、椰樹影婆娑、鳳梨パイナップル、朱欒ザボン、芭蕉、鳳尾松ソテツ、翠色滴れんとし、榕樹蓋アココヤの如く、乳枝地に垂れて根を生じ忽ち幹と成り、更に乳枝を生じて新乳枝復た新幹と成り、宛然人をして印度、亞弗利加の内地に携へ去るの感あらしむる處（榕樹は土佐の蹉陀岬、同岬上の諸島、紀伊、日向、大隅、薩摩、沖繩、澎湖、臺灣等に繁殖す。珊瑚礁は沖繩列島の一部、小笠原列島に見る）に到るまで、造化は此處に一幅の妙畫譜を開展す。冬中富士川の谿間に入らんか、谿の亂竹、雪に壓せられ、折れて憂々響をなすや、猿の稟性素と怯懦なるを以て、爲めに恐慌し、凄絶哀絶なる啼聲を放ちて聲々相和すを聞く、日本人或は靚聞して以て尋常の事となす、而かも累雪の下に竹蔭猿聲（共に熱帶生物）を靚聞すとは、到底印度、亞弗利加の人の腦

裡に描く能はざる所、寒帯、熱帯の風物を兼併する、宇内寧ろ日本の如き處あらんや。且つや夏間は降雨連りに到り、其量多大、加ふるに其間の温度甚だ高きを以て熱帯植物能く豊茂し、諸般植物も亦た蒼翠秀潤、到る處熱帯地方に在るの觀あらしむと想へば、亦た温帯、半寒帯に生育する

(二) 松柏科植物

は國中到る處に之れを看る。蓋し松柏科植物の日本國中到る處に存在する、是れ、日本國民の氣象を涵養するに足るもの、日本人間、櫻花を以て其の性情を代表せしむ、櫻花固より美にして佳、且つ其の早く散る所轉た多情、是れ人に憐まれ惜まるゝ所なるも、忽ちにして爛慢、忽ちにして亂落し、風に抗する能はず雨に耐え得ず、徒らに狼藉して春泥に委する所、寧ろ日本人が性情の標準となすべけんや、松柏科植物は然らず、獨り隆冬を経て凋表せざるのみならず、轟々たる幹は天を衝き、上に數千鈞の重量ある枝葉を負擔しながら、孤高烈風を凌ぎて扶持自ら守り、節操雋邁、庸々たる他植物に超絶するが上に、其の態度を一看せば、幾何學的に加ふるに美術的を調和する所、誰か品望の高雅なるを嘆ぜざらんや。想ふ松柏の轟々天を衝くは本性たり、而かも根を托するの土壤や少量に、四圍の境遇も亦た逆ならんか、假令其幹をして天を衝かしむ能はざる

も、豪氣竟に屈せず、斷崖絶壁、石面稜層の上と雖も猶ほ且つ根を硬着し、幹や、枝や、葉や、四時能く風、雨、霜、氷、雪に禦敵し、他の生平艶を競ひ媚を呈せる軟弱の植物は枯死し盡くすも、獨り堅執して生存し、會々斧を以て斬伐せられんか、些の未練を遺すなくして昂然斃るゝ所、他の花木の企つ所にあらず、眞に日本人の性情中の一標準となすに足れり。瑞西の歴史を立論する者曰く、瑞西の歴史は不羈獨立を酷愛する民人の歴史なり、而して瑞西史の精粹は、蒼健高聳なる松林の中に成育せるシュウキツツ、ウリ、ウンテルヴァルデン三州の民人に存す、松以て三州民人の性情を感化し、所謂テル（假成人物なりと雖も、當時の情勢所謂テル一流の人物を輩出せしや必然）松林の中より身を挺で、壞太利の苛政に抗し、近古三州の民人松林の中より首として羅馬法王及び僧侶の非行を倡へたりと。獨り瑞西人のみならず、古のノルマン民屬、今の露西亞人も、亦た松林の下に豪健硬勁なる性情を涵養されきと。松や、松や、何ぞ民人の性情を感化するの偉大なる、特に日本は松柏科植物に富むこと實に全世界中第一、即ち黒松、赤松、五鬚松、リウキウマツ、海松、檜、杜松、ハヒネズ、シマムロ、杉、椴、アヲボウモミ、トママツ、シラビツ、ハリモミ、トウヒ、エヅマツ、コウヤウサン、金松、水松、イチキ、キヤラボク、落葉松、羅漢松、竹柏、公孫樹、羅漢柏、ヒノキ、サハラ、ヒムロ、側柏、イトスギ、ニホヒビバ、ヒヨクヒバ、ゴラウヒバ、オニヒバ、スイリウヒバ、榧、粗榧、寧ろ列擧するに遑なからんとす、是

れ日本人の性情を感化するに足るもの、何ぞ漫に英吉利人をして其の榭カシハ、蘇格蘭人をして其の山毛櫟マツ、佛蘭西人をして其の落葉松、伊太利人、西班牙人をして其の橄欖を誇揚せしめんや。對馬の海岸を過ぎり、其の懸崖直立數百尺、西北風蓬々として黃海より吹き到り、怒潮百碎、崖に激して萬斛の白雪を噴く處、岩石の罅隙より松樹の些も屈撓せずして生長し、或は聳直風を凌ぎ、或は欹斜して水を探らんとするの状を看る者、誰か夫の元寇の際、州の目代右馬允七郎宗助國（文永十一年十月六日）が慨然八十餘騎を拉して胡元の戰艦九百餘艘三萬餘人を反撃し、三子親姻と共に身を國に殉じたる偉蹟に酷類するを想起せざらんや。日本は「松國」なるべし、「櫻花國」と相待たざるべからず。

### (三) 禽鳥類

に到りては寒帯よりする者、熱帯よりする者、皆な日本を以て集會所とし、且つ熱帯より寒帯に到る者、寒帯より熱帯に去る者、皆な日本を以て經過所とし、「鵲の渡せる橋」の如くす。是を以てか日本に翱翔する禽鳥三百八十一種中、百四十六は全く寒帯種に屬し、百三十九は、「舊北地方」種に屬し、四十七は熱帯種に屬し、而して殘餘の四十九は日本絶特の者に係る。夫の丹頂鶴や、巻旋せる長き細き氣管を有するを以て一たび鳴きて其聲劉亮、所謂九臯より天に聞ゆる者、是れ西比利亞、朝鮮を沖けて日本に到る所、彼の「島巡り鷺」や、アマ鷺や、新秧十里、一望蒼茫、其の白色を以て此間を點綴する者、是れ熱帯地方より來る所。且つや日本の地、四方を環らすに洋海を以てし、別に特立するを以て、禽鳥も亦た此處に到來して特立する者多く、爲めに新種、新變種を化成するに到る、日本に絶特なる禽鳥の多在するは此の所因、ダーウキン、ウォレ1スの「島國は生物の新種を多成す」と立說せしもの、日本之れを例證して餘あり、即ち鳩鵲の一新種の如き日本に絶特なる者あり、焉んぞ知らん其の

門巷蕭條夜色悲。鳩鵲聲在月前枝。誰知孤帳寒絮下。白髮遺臣讀楚辭。

栗本 匏庵

と賦せしめたる鳩鵲の如きも、亦た悲涼凄楚の聲を以て長嘯する所の一新種にあらざるなきを得んや。想ふに此個の鳩鵲、月前の枝に在りて聲々悲涼凄楚、此の亡國の遺臣をして數莖の白鬢を添へしめたるらん。

獨り禽鳥類のみならん、

### (四) 昆蟲類

に到りても多種に、寒帯、溫帯、熱帯の者相齊しく生息し、特に



の禽鳥、蝴蝶の瑰麗燦爛たる固より所因あり。試みに日本の花卉の大抵  
 (別表參觀)

此の錦繡の間、蒼健高聳せる松柏科植物を點綴す、花之れと映發して

色	春 (晩冬ヨリ初春ニ)	夏 (晩春ヨリ初夏ニ)	秋 (晩夏ヨリ初秋ニ)	冬 (晩)
白	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎薔薇科 梅・桃・李・杏・梨・林檎・郁李・梅桃・木瓜・山楂・鶏麻・シロバナイチゴ・コデマリ・ハゼバナ・ユキヤナギ</li> <li>◎穀斗科 コナラ</li> <li>◎十字花科 ナツナ・ダイコン・カブラ・蕪・菜菔・蕪菁</li> <li>◎木蘭科 ハクモクレン・コブシ・玉蘭・辛夷</li> <li>◎石楠科 ツバキ・イハナシ</li> <li>◎葡萄科 葡萄・ヤマブドウ</li> <li>◎荳科 レンゲサウ・イハフチ・紫雲英・胡豆</li> <li>◎菊科 ナシボロ・高首・蒲公英・高首</li> <li>◎蘭科 シンラン・チサラン・染々香・雀饅飴</li> <li>◎山茶萸科 ウリノキ・八角楓</li> <li>◎厚皮香科 ツバキ・山茶</li> <li>◎木犀科 タマツバキ・女貞</li> <li>◎楊柳科 キツタ・白楊</li> <li>◎樺木科 ハンノキ・赤楊</li> <li>◎松柏科 イチウ・公孫樹</li> <li>◎瑞香科 チンチヤウゲ</li> <li>◎忍冬科 ハコネウツギ・錦帯花</li> <li>◎唇形科 フドリユサウ・野芝麻</li> <li>◎毛茛科 ユキワリサウ・蹄耳細辛</li> <li>◎堇菜科 マルバスマミレ</li> <li>◎五加科 ウユギ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎百合科 カノコユリ・タモトユリ・オニユリ・紫萼・鷺毛玉</li> <li>◎薔薇科 蘭花・ハウチヤクサウ・シラフヂ・シロツメクサ・葛・イハフジ</li> <li>◎錦葵科 アフヒ・ムクゲ・キリアサギンセン・錦葵・木槿・苘麻・野西瓜苗</li> <li>◎蘭科 ハマナス・薔薇・玫瑰・カナメガシ・コマメウツギ</li> <li>◎芸香科 カヤラン・クワクラン・フウラン・石船</li> <li>◎毛茛科 柑・臭橙・柚・枳</li> <li>◎虎耳草科 アツセシ・鐵線蓮・牡丹・芍薬</li> <li>◎木蘭科 ウツギ・ヒメウツギ・虎耳草</li> <li>◎厚皮香科 ナツツバキ・木天蓼</li> <li>◎茜草科 ナツツバキ・満天星</li> <li>◎忍冬科 ツクバネサウ・コツクバネサウ</li> <li>◎菊科 菊・ウスユキサウ</li> <li>◎罌粟科 ケ子粟・虞美人草</li> <li>◎旋花科 アサガホ・ヒルガホ・牽牛・旋花</li> <li>◎馬鞭草科 海州常山・ビジヨザクラ</li> <li>◎澤瀉科 サシオモガカ</li> <li>◎睡蓮科 蓮</li> <li>◎千屈菜科 サクロ</li> <li>◎夾竹桃科 キヤウチクトウ</li> <li>◎海桐科 トペラ</li> <li>◎柿樹科 柿</li> <li>◎桑科 カウツ</li> <li>◎穀斗科 クヌギ</li> <li>◎鼠李科 ナツメ</li> <li>◎漆樹科 スルメ</li> <li>◎桔梗科 ホタルアキロ</li> <li>◎景天科 山小葉</li> <li>◎繖形科 ベンケイサウ</li> <li>◎胡椒科 水蕪</li> <li>◎金粟蘭科 蕪菜</li> <li>◎柳葉菜科 センリヤウ</li> <li>◎葫蘆科 ヒシ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎蓼科 薔薇・水蓼・馬蓼</li> <li>◎菊科 菊・翠菊・苜蓿</li> <li>◎木犀科 モクセイ・モウリシクワ</li> <li>◎穀精草科 ホシクサ</li> <li>◎木犀科 木犀・茉莉・ヒラギ</li> <li>◎荳科 ケイトウセン・ニチサウ</li> <li>◎荳科 雞冠・千日紅</li> <li>◎木犀科 シラハギ</li> <li>◎荳科 ナデシコ</li> <li>◎旅花科 アサガホ</li> <li>◎櫻草科 珍珠菜</li> <li>◎千屈菜科 ミソハギ</li> <li>◎敗醬科 フトコヘシ</li> <li>◎龍膽科 リンダウ</li> <li>◎玄參科 キンギヨサウ</li> <li>◎鳶尾科 ハマユウ</li> <li>◎禾本科 蘆</li> <li>◎薑科 メウガ</li> <li>◎菊科 菊・藤菊</li> <li>◎薑科 芭蕉・皇華</li> <li>◎木犀科 モクセイ</li> <li>◎錦葵科 トロアフリ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎厚皮香科</li> <li>◎薔薇科</li> <li>◎五加科</li> <li>◎菊科</li> </ul>
白	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎荳科 錦鶏兒・レダマ</li> <li>◎胡桃科 テウチケル・オニケル・胡桃・山胡桃</li> <li>◎木犀科 迎春花・連翹</li> <li>◎菊科 蒲公英・蒿苳・金盞草</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎葫蘆科 胡瓜・越瓜・菜瓜・甜瓜・南瓜・絲瓜</li> <li>◎錦葵科 菊・日向葵・旋覆花</li> <li>◎睡蓮科 草綿・黃蓮</li> <li>◎金絲桃科 金絲桃・金絲梅</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎菊科 芭蕉・皇華</li> <li>◎木犀科 木犀</li> <li>◎錦葵科 黃蜀葵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎菊科</li> </ul>

冬季間ハ花ノ  
 園丁ノ勞苦  
 成シタル寒  
 冬櫻アリ、  
 ニ原種ヨリ  
 ニ到リテハ  
 國ニ冠絶ス  
 茶梅、山茶  
 屬ス、而カ  
 山茶ハ中冬  
 氷ノ中ト雖  
 クシテ其ノ  
 翌年四月頃  
 是レ海外人  
 ス



◎瑞香科 チンチヤウゲ	◎忍冬科 ハコネウツギ 錦帯花	◎唇形科 野芝麻	●毛茛科 ユキワリサウ 罂耳細辛	◎堇菜科 マルバスマミレ	◎五加科 ウコギ 五加
◎鼠李科 鼠李	◎漆樹科 鹽膚木	◎桔梗科 山小菊	◎繖形科 水蕪	◎胡椒科 胡椒	◎柳葉菜科 柳葉菜
◎玄參科 キンギョサウ	◎鳶尾科 文殊蘭	◎禾本科 蘆	◎薑科 薑	◎薑科 薑	◎薑科 薑
山茶ハ中々	水ノ中ト	クシテ其ノ	翌年四月	是レ海外	ス

◎菊科 蒲公英・蒿苣・金盞草	◎木犀科 迎香花・連翹	◎胡桃科 胡桃・山胡桃	◎荳科 錦雞兒・レダマ	◎木蘭科 南五味子	◎毛茛科 側金盞花	◎薔薇科 林檎花	◎石楠科 メシヤクナゲ	◎瑞香科 黃瑞香	◎忍冬科 接骨木	◎十字花科 山菜黃	◎山菜黃科 山菜黃	◎蘭科 エビネ			
◎胡蘆科 胡蘆	◎菊科 菊	◎錦葵科 錦葵	◎睡蓮科 睡蓮	◎金絲桃科 金絲桃	◎薔薇科 薔薇	◎無患樹科 七葉樹	◎殼斗科 栗	◎天南星科 天南星	◎薔草科 雨久花	◎毛茛科 毛茛	◎牻牛兒科 醉蝶草	◎景天科 景天	◎唇形科 唇形	◎百合科 百合	◎十字花科 十字花
◎玄參科 玄參	◎木犀科 木犀	◎薑科 薑	◎錦葵科 錦葵	◎敗醬科 敗醬	◎龍膽科 龍膽	◎無患樹科 無患樹	◎南天星科 南天星	◎玄參科 玄參	◎荳科 荳	◎玄參科 玄參	◎金絲桃科 金絲桃	◎龍膽科 龍膽	◎松柏科 松柏	◎椴科 椴	◎檜科 檜
◎玄參科 玄參	◎木犀科 木犀	◎薑科 薑	◎錦葵科 錦葵	◎敗醬科 敗醬	◎龍膽科 龍膽	◎無患樹科 無患樹	◎南天星科 南天星	◎玄參科 玄參	◎荳科 荳	◎玄參科 玄參	◎金絲桃科 金絲桃	◎龍膽科 龍膽	◎松柏科 松柏	◎椴科 椴	◎檜科 檜

◎石楠科 山躑躅	◎楊梅科 楊梅	◎蘭科 エビネ
◎燈心草科 燈心草	◎紫葳科 紫葳	◎松栲科 松栲
◎椴科 椴	◎無患樹科 無患樹	◎龍膽科 龍膽
◎檜科 檜	◎無患樹科 無患樹	◎龍膽科 龍膽

◎薔薇科 梅・桃・櫻桃・ヒガンザクラ・榎・海棠・木瓜	◎石楠科 山躑躅・山巖・石楠	◎厚皮香科 山茶・茶梅	◎木犀科 女貞	◎忍冬科 錦帶花	◎櫻草科 クリンサウ	◎毛茛科 罂耳細辛	◎荳科 紫雲英	◎蘭科 エビネ
◎薔薇科 薔薇・シモツケサウ・玫瑰	◎毛茛科 牡丹・芍薬	◎罌粟科 罌粟・虞美人草	◎馬鞭草科 馬鞭草	◎菊科 菊	◎夾竹桃科 夾竹桃	◎木蘭科 木蘭	◎睡蓮科 睡蓮	◎茜草科 茜草
◎椴科 椴	◎無患樹科 無患樹	◎龍膽科 龍膽	◎錦葵科 錦葵	◎敗醬科 敗醬	◎厚皮香科 厚皮香	◎秋海棠科 秋海棠	◎牻牛兒科 牻牛兒	◎玄參科 玄參
◎檜科 檜	◎無患樹科 無患樹	◎龍膽科 龍膽	◎錦葵科 錦葵	◎敗醬科 敗醬	◎厚皮香科 厚皮香	◎秋海棠科 秋海棠	◎牻牛兒科 牻牛兒	◎玄參科 玄參

漆樹科  
 桔梗科  
 景天科  
 繖形科  
 胡椒科  
 金粟蘭科  
 柳葉菜科  
 葫蘆科

玄參科  
 鳶尾科  
 禾本科  
 薑科

山茶ハ中冬ヨリ開花シ、積雪層  
 氷ノ中ト雖モ依然タリ、此ノ如  
 クシテ其ノ數十ナル變種ハ大概  
 翌年四月頃マデ開花ヲ連續ス、  
 是レ海外人ノ最モ驚嘆スル所ト  
 ス

葫蘆科  
 菊科  
 錦葵科  
 睡蓮科  
 金絲桃科  
 荳科  
 薔薇科  
 無患樹科  
 殼斗科  
 天南星科  
 薔草科  
 毛茛科  
 牻牛兒科  
 景天科  
 唇形科  
 百合科  
 十字花科

菊科  
 薑科  
 木犀科  
 錦葵科  
 敗醬科  
 荳科  
 玄參科  
 南天星科  
 無患樹科  
 金絲桃科  
 龍膽科

木犀科  
 蠟梅科  
 菊科

燈心草科  
 莎草科  
 紫葳科  
 鳶尾科  
 松栲科  
 千屈菜科

榛科  
 松柏科  
 旋花科

冬季間ハ山野悉ク頰黄色ヲ帶ブ

薔薇科  
 毛茛科  
 罌粟科  
 千屈菜科  
 荳科  
 馬鞭草科  
 菊科  
 百合科  
 蘭科  
 夾竹桃科  
 木蘭科  
 石楠科  
 睡蓮科  
 茜草科  
 藜科

蓼科  
 石竹科  
 菊科  
 千屈菜科  
 旋花科  
 荳科  
 薑科  
 錦葵科  
 厚皮香料  
 秋海棠科  
 牻牛兒科  
 茄科  
 玄參科  
 茜草科

厚皮香料  
 薔薇科  
 芸香科  
 毛茛科





◎十字花科  
山萵菜

◎龍膽科  
センブリ

◎燈心草科  
燈心草・タマイ・イヌイ  
◎莎草科  
カヤツリグサ  
◎紫葳科  
ノウゼンカヅラ  
紫葳

◎榛科  
ハシバミ  
◎松柏科  
イチキ

◎鳶尾科  
射干  
◎松栲科  
竹柏  
◎千屈菜科  
安石榴

◎旋花科  
牽牛

◎薔薇科  
薔薇・シモツケサウ・玫瑰  
◎毛茛科  
牡丹・芍薬  
◎罌粟科  
罌子粟・虞美人草

◎蓼科  
金線草・藍・水蓼・馬薊  
◎石竹科  
ナデシコ・石竹・剪秋羅  
◎菊科  
菊・翠菊・藤菊

◎千屈菜科  
百日紅・安石榴  
◎荳科  
合歡・アカツメクサ  
◎馬鞭草科  
紅花・アザミタンポ

◎荳科  
美人蕉  
◎薑科  
馬棘  
◎莧科  
羅冠・千日紅

◎百合科  
山丹・萱草  
◎夾竹桃科  
夾竹桃  
◎木蘭科  
天女花

◎厚皮香料  
茶梅  
◎秋海棠科  
秋海棠  
◎毛茛科  
鳳仙

◎睡蓮科  
蓮  
◎茜草科  
賣子木  
◎茄科  
曼陀羅花

◎茄科  
烟草  
◎玄參科  
キンギョサウ  
◎女青

◎藜科  
蒺藜菜

◎茜草科  
女青

◎莧科  
石臼  
◎菊科  
紅花・アザミタンポ  
◎百合科  
山丹・萱草

◎荳科  
木芙蓉  
◎薔薇科  
茶梅

◎木蘭科  
天女花  
◎石楠科  
杜鵑花

◎毛茛科  
オキナグサ・トリカブト  
白頭翁・附子・チドリ

◎莧科  
石臼  
◎菊科  
紅花・アザミタンポ  
◎百合科  
山丹・萱草

◎荳科  
胡枝子・マルバハギ

◎馬鞭草科  
蔓荆・ビジヨザクラ  
◎茄科  
ナス・枸杞

◎荳科  
桔梗・山梗菜

◎錦葵科  
錦葵・木槿  
◎馬鞭草科  
蔓荆・ビジヨザクラ

◎荳科  
胡枝子・マルバハギ

◎玄參科  
佛手柑  
◎芸香科  
佛手柑

◎荳科  
胡枝子・マルバハギ

◎木蘭科  
浮爛羅勒  
◎旋花科  
牽牛

◎荳科  
胡枝子・マルバハギ

◎桔梗科  
山小菜  
◎薔薇科  
地楡

◎荳科  
胡枝子・マルバハギ

◎虎耳草科  
アヂサキ  
◎唇形科  
野馬仙花

◎唇形科  
荒蔚益母草

◎天南星科  
ニハセキシヤウ  
◎龍膽科  
龍膽

◎龍膽科  
龍膽

◎睡蓮科  
ミツンキ  
◎馬鞭草科  
ニハセキシヤウ

◎馬鞭草科  
ダンギク

◎天南星科  
ニハセキシヤウ  
◎龍膽科  
龍膽

◎天南星科  
コニヤクイモ

冬季間ハ山野悉ク瀕黄色ヲ帶ブ

◎厚皮香料  
山茶・茶梅

◎薔薇科  
薔薇

◎芸香科  
茵芋

◎毛茛科  
牡丹

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ

◎荳科  
イウテフクワ



欄龍眼肉皆實のる松竹よく榮ふ北國は是に異なりて高山深谷は四時雪消せず冬は氷柱軒端にくだりて水晶簾のごとく氷厚く堅きこと玉石のごとし大河急流といへとも皆氷りて車馬水上を往來す此ゆゑに足袋頭巾冬春の二季はしばらくもはなすべからず火燧のみならず圍爐裏甚大にして晝夜盛に火をたく又九十月の比より春三四月の比までは毎日毎夜天氣曇り雪ふらざれば雨降霰あり北風また常に烈敷して面をむくべからず此故に秋冬春は無絶て無し夏も甚少し草木も皆色白く其種類も南方よりは甚少なし竹絶て無し松も又甚稀なり梅櫻桃山吹藤躑躅梨李石榴杯雪消て後に開くゆゑに皆四五月の比に一樣に花咲なり梅は若葉出ると花咲と一度にして葉花を一度にみる南國の梅は葉不落して花咲き北國の梅は葉出て花咲く氣候の相違かくのごとく甚し此ゆゑに北方は寒烈の氣にて水までも堅く南方は暖和の氣にて石までもやはらかなり北方は巖石堅剛なりゆゑに山嶽峩々として高く聳え是に應じて海甚深し越中立山の沖に當れる海ふかさ三百尋の餘に及べるにても知へし山高き所は其海必深し南方は石やはらかなるゆゑ土地に骨無く山嶽高く聳ることあたはず南蠻の諸國高山無く海また甚淺し地球の中にて凡日本程山高く海深き國は稀なり此事萬國の地理を論せる書に委し日本の内にても南方の山は平穩にして巖石なく樹木茂れり土地たにかくのごとくなれば人の氣も剛柔の相違あり獸も北方は猛惡のもの多し鷹鷲の類も北方の者に慄悍の氣あり毒有る物香ひ有る者は北方には稀にして南方に多し只中部の地は四時の氣候正しく生類も中和の氣を受得て剛柔の偏なく萬物ゆたかに備りて實に王者の住所なり。

## 日本の生物に關する品題

是れ日本の生物に關する文、詩、歌、俳諧、畫、彫刻の品題なり、植物、動物の日本固有の者、若くは日本固有の風物にして、歐米人の其國に在りて見る能はざる所のみを撰擇す。日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士は、須らく歐米人の其國に在りて見る能はざる所を取り品題となすこと可、

- (一) 新秧滿頃、白鷺魚を窺ひて悄立す。
- (二) 荒城古戍、夜深く鴝鷓孤棲して缺月に嘯く。
- (三) 紫騮嘶きて櫻花の雪に入り去る。
- (四) 夕陽倒射、公孫樹葉黄金を累ぬる間、浮圖塔脊其上に露はる。
- (五) 小豆花の深き處草蟲鳴く。
- (六) 南燭の實珊瑚を綴る、一雙の繡眼兒之れを啄き來る。
- (七) 瀑布直下、カヤクミリ鳥一群、巖樹の間に翱翔和鳴す。
- (八) 谷内の村墟、梅花遮蔽、屋脊少しく露はる。

- (九) 霽後の秋水、菱を採るの小艇蕩漾す。
- (十) 火山岩磊落、潮水に浸して半ば露れ、カラスバト鳥其上に停まる。
- (十一) 華表柱頭、暮煙方さに合し、林梢微茫、青鷺還り去る。
- (十二) 曙色滿天、水光千頃、曉露蓮花を洗ひて淡紅滴れんとす。
- (十三) 夕陽松樹に在り、馬を下りて古陵を吊ふ處、頭白の鳥啼く。
- (十四) 海豹氷塊の上に嘯き、峭帆北風を剪りて飛ぶ。
- (十五) 新漲柳根を齧み、菰蒲深き處、一隻の鮠魚遲疑して游行す。
- (十六) 秋雨一過、爽籟頓に起り、白桐樹上、殘瀝點滴、老葉と共に飛ぶ。
- (十七) 菜のはなや月は東に日は西に。蕪村
- (十八) 菜のはなのなかに城あり郡山。許六

### 三 日本には水蒸氣の多量なる事

日本、四面皆な繞らすに大瀛の水を以てす、水蒸氣の多量なる知るべきのみ、況んや溫暖海流（黒潮及び其の支流）の蒸發を促すあり、溫暖海流の寒冷海流と相衝突するあり、加ふるに西北風は亞細亞大陸より日本海の水蒸氣を拉して到り、東南風は多濕なる印度洋より來る、而して國の中央には峻崇たる山脈海岸線と相并りして連續す、水蒸氣の之れに撞撃して凝結する固より然り。

#### (一) 日本に於ける水蒸氣の現象

是を以てか朝暾僅に昇るや、光線は此の水蒸氣の分子を透して來り、紅靄濃淡、曙色特に一層の趣を加ふ、而して夕陽西山に春かんとするや、餘照は暮雲に掩映して五彩色をなし、殘煙は沈まんとして尙ほ樹梢に棲む。是の如きの景象、多く大陸に見ざる所、大陸の文人、詩客が雲の形容を誤り、其の畫師が雲を以て故さらに譎怪に描くは、蓋し多く水蒸氣の變化を目睹せざるを以て然るか。其の陽春三月、百花亂發するの候に到れば、這般の水蒸氣は霞となり、

小夜ふかくかすみの網にいる月を

正

徹

ひくやみなとの海人のよひ聲

霞の網や、海人喚聲の分明なるや、其の水蒸氣の多量なること測り知るべきのみ、既にして印度洋上、貿易風、季候風と相交錯し、季候風の北進するや、天象雨氣を催ほし、漸くにして「卯の花くだし」となり、「五月雨」（梅雨）となり、「虎の涙雨」となり、多感の詩人をして

罪々漠々滿天墜。云是名妓於菟淚。於菟曾在大磯里。玉貌華顏拔於萃。一夜奇緣昵十郎。慵向他人進杯觴。豈圖孤負鴛鴦枕。提劍去赴復讐場。黃泉報父死何烈。翠閨棄妾恨何滅。富士山下獨躊躇。涕淚萬行滴不絕。淚能化花竟凋萎。淚能染竹有枯時。妾淚好作滿天雨。長瀧富士山下祠。

村上佛山

の句あらしむ。九月、十月、印度洋上、季候風の南退し、貿易風と相交錯するや、所謂「二百十日」前後の天候を現はし、既にして冬季に入り、會々太平洋上の溫暖海流、所在の蒸發を促し、空氣方さに稀薄となるや、亞細亞大陸上なる重厚の空氣は之れに乗じて衝き到り、西北の方向を取り、日本海を経て、其間の水蒸氣を携へ來り、忽ちにして日本の中央に連續せる大山系に撞撃し、遂に此處に凝結して、所謂

大嶽削成三萬丈。絶巔縹緲有無中。吹散雪氷來作雹。濤聲動地北溟風。大山

仁科白谷

の状をなし、此の如くして中央大山系以北の地に「雪空」をなし、「雪もよひ」をなし、「雪おこし」をなし、六花繽紛、山陰、北陸、東山、北海の四道、一面の銀世界となるは此故、正に是れ立山如玉立。上有太古雪。三伏炎蒸日。寒光猶凜冽。況此深雪時。望之皆欲裂。立山

大窪詩佛

水蒸氣の感化、其の日本の天文、地章を洵美ならしむ現象を縷述すべきか。

(二) 東山道の水蒸氣(春)

亞細亞大陸よりの西北風、日本海を經過する間に、其の水蒸氣を拉して吹き到り、日本中央の大山系(即ち東山道諸國の中央に重疊せる山系)に撞撃するや、水蒸氣は此處に凝結して、霜となり、氷となり、霰となり、雪となり、山道諸國を充塞するも、四月春氣漸く發し、

具氏

灌のこほりもとけやそむらむ

の候に到るや、恰かも側金盞花は陽皇の正使として、南谿消氷雪の下、先づ咲ひて來り、次で赤

楊は流れ初むる潤水の上、副使として其の叢生花を示す。既にして溫度頓に高昇、雪俄に解け、

ゆき解けや鴨も首ふる最上川

素盈

の候となるや、石楠、梅、桃、櫻、李、梨、杏、カツラ、玉蘭、木蘭、辛夷、一時に競發し、紅なる者、白なる者、黄なる者、紫なる者、圓き者、細き者、珠玉の如き者、體式雷同せず、或は火山岩下に倚り、或は花崗岩の懸崖に臨み、或は棧橋に沿ひて潭水を探り、或は嶺上の茅店を環り、或は故關の曙色に開く、葛因是、句あり「梅桃李無次第。二十四番一時風」と、此の如きの景象南方人士の見る能はざる所、蓋し山道各地百花の一時に競發するは、冬季中蕾芽の多量の水蒸氣に涵養せられ、内心鬱勃、春來溫度の激昂に刺戟せられ輒ち發奮するに因る。試みに東山道各地と東海道各地と、冬季中の濕度及び春來溫度の變化を比較せんか。

濕度(一〇〇ヲ以テ飽和トス)

溫度(攝氏)

地名	北緯度分	海拔尺	十二月	一月	二月	三月	平均	一月	二月	三月	四月	五月	六月
東													
岐阜	三五、三七	四九、三	〇	七	三	三	七、五、三	二、五	三、四	六、九	一三、七	一六、九	二一、三
長野	三五、四〇	一三七、三	九	八	七	七	七、八、五	二、二	〇、一	四、四	九、八	一四、五	一九、二
宇都宮	三五、四三	四二、五	七	六	六	七	七、〇、三	〇、四	一、八	六、八	一〇、一	一六、七	一八、九
福島	三五、四七	二〇四、六	七	七	六	七	七、八	〇、四	一、五	六、一	一一、〇	一五、一	一九、〇
								下零	下零				

東海					山道					
銚子	東京	沼津	濱松	名古屋	津	秋田	山形	青森	宮古	石巻
三五、四	三五、四	三五、〇六	三四、四三	三五、一〇	三四、四三	元、四三	元、一四	四〇、五	元、元	三、二六
九、二	九、三	三、七	九、四	五〇、二	八六、一	三、七	五〇、三	一四、三	一〇〇、三	一四七、八
三	充	充	充	五	三	三	三	七	七	七
充	充	充	充	充	充	三	七	七	七	三
充	充	充	充	充	充	三	三	七	三	三
三	七	七	七	七	七	七	七	七	三	三
七、三	六、〇	六、〇	六、三	七、五	七、八	八、五	八、五	七、八	七、〇	七、〇
五、二	二、六	四、八	四、四	二、〇	三、九	下零	下零	下零	下零	下零
六、〇	三、五	五、一	四、九	三、九	五、六	下零	下零	下零	下零	下零
九、七	七、〇	八、五	八、二	八、四	八、四	二、三	四、三	〇、八	二、六	四、五
一三、六	二二、二	一三、四	一三、五	一三、九	一三、二	八、一	九、四	六、七	七、七	九、一
一六、九	一六、五	一六、八	一七、〇	一八、六	一七、五	二、九	一五、一	一、三	二、七	三、六
二〇、〇	二〇、三	二〇、七	二〇、八	二〇、九	二二、〇	一七、五	一八、七	一五、八	一五、一	一六、九

山道の各地、冬季中、水蒸氣の多量なる、春來温度の變化劇烈なる此の如し、百花の一時に競發する固より然り。山道、奥羽の人、滿眸白雪を看熟する十旬、而して忽ち春色の燦爛たるに會ふ、其の特に春を激賞する故なしとせんや。

(三) 東海道の水蒸氣 (初夏)

東京城中の春光將さに盡く。恰も印度洋上の季候風は是時より北進し來り、其の感化として眼前の風物は正に是れ

淺茅原上雨濛濛。班女廟前草接空。杜宇聲々啼不歇。鏡池一面落花風。

龜田 鷗齋

の如きあり。既にして藤花、燕子花<sup>カキツバタ</sup>了る。乃ち去りて東海道に上らんか、六郷、鶴見河畔、沖積層平地十里、季候風北進の感化は愈々顯著に、梅雨冥々、河水平常より嵩まること數尺、分流して諸溝渠に入り、其聲湯々、新秧勃然、鮮綠滿目。蓋し日本をして米産國たらしめたるもの全然季候風の感化(梅雨及び温度の高昇)に因る。漸く大磯に到る、高麗山、途に當る、喬木暢茂、蒼翠秀潤滴れんとす、想ふ大磯の地、海岸を距る三五町にして山脈逶迤す、萬頃の太平洋面より發上する水蒸氣は、東南風と共に此の山脈に撞撃し、山脈以南一帶の處に英々浮動す、高麗山は之れに潤澤せらるゝが上に、古來高麗神社の靈場として樹木の伐採を禁ず、其の喬木の暢茂して蒼翠秀潤滴れんとするもの故なしとせず。蓋し日本國植物の蒼翠秀潤なるは、實に水蒸氣多量の感化に因る、加ふるに神社、佛閣の樹木は、古來伐採を禁止せるを以て、愈々益々暢茂し、自



ら山林保護法を實際に厲行し來る、神社、佛閣の樹木伐採禁止の效能は冥々なるが如きも實は甚だ顯著。國府津に到る、驛背なる丘陵の南面に到る處柑を植う、花正に亂發、半丘皆な雪、蓋し柑は素と熱帶植物、而かも能く此間に繁生し、此處より南方一帶伊豆半島、紀南半島齊しく其の名産を以て鳴るは、實に水蒸氣の多量なると、地勢南方に斗出するが上に、溫暖海流（黒潮）の近岸を流駛するの三感化に因る。沿道の石材、大概は安山岩、凝灰岩を用ふ（所謂「相模石」、「伊豆石」。此岩亞細亞大陸に多く見ず）、是れ素と多孔なるもの、乃ち水蒸氣の潤澤に因り、莓苔之れを蒸し、蘿葛之れを纏ひ、千歳の下、古城斷礎の間、將軍の碑を讀むに當り、土花寸々、人をして懷古の情に禁へざらしむ。小田原を去り函嶺に入る、地質頓に激變、沖積層及び第三紀層此所に盡きて、新火山岩のみ累積す、草樹鬱葱、亦た是れ水蒸氣の多量なると、霉敗せる新火山岩の殊に肥沃なるを以ての故。山嶺を下らんか、駿河の平野忽ち開展し、早く見る幾群の村娘は歌を和して新茶を採ることを。茶も素と熱帶植物、而かも其の日本の最主産物と化成せるは、氣候の比較的溫暖なると、地味之れが發育に順適するに因ると雖も、亦た水蒸氣多量の感化最も與る所。富士山一萬二千餘尺此間に聳立す、東海より東南風の吹き携へる水蒸氣は、寒冽なる山嶺の空氣と撞撃し、宛として白綿を曳くに似、而して晨夕空氣の運動靜穩となるや、此の綿に似たる白雲は漸く下降して山腹以下に縹繞するを見る、其の

大菅中養父

心あての雲間はなをもふもとにて

おもはぬ空にはるゝふしのね

の如く、晨夕行客の富士山嶺を白雲の上に仰望するは此故、若し夫れ日光之れを射らんか、濃紅淡紫、千變萬幻、蓋し畫師の最も太悟すべき所。富士、大井、天龍の諸江を渡る、諸江齊しく源を日本中央の大山系に發す、大山系固と高崇、故に所在の空氣は寒冽にして蒸發力は爲めに遲緩に、加ふるに冬間堆積せる氷雪は夏季に到り漸次に融消するを以て、源水甚だ多量、是れ富士、大井、天龍諸江の激烈なるにも關せず、夏に入りて能く流水の滾々たる所因。次で遠江、參河、尾張、伊勢、近江の諸州を過ぐ。沿道の濤聲（遠州洋の）、機聲（參河木綿を織る）、鷄聲（尾張熱田神社の）、漁歌の聲（伊勢海の）、兒童讀書の聲（近江村邑の）、皆な水蒸氣多量の感化に因り、聞き得たり殊に其の音響の分明なるを。行々竟に舊都に入る。

#### （四） 山陰道、北陸道の水蒸氣（夏）

山陰、北陸の各地、冬季中、亞細亞大陸よりの西北風は日本海を經、海の水蒸氣を拉して吹き到り、日本中央の大山系に撞撃し、此所に凝結するを以て、水蒸氣多量に、氷雪四境を充塞す、而かも夏季は之れと全然相異り、太平洋岸（東海道等）は、印度洋上なる季候風に感化せられ爲

めに濕潤多雨となるも、日本海岸（山陰道、北陸道等）は、此の感化を享くること些少に、山陰道の初夏早く既に

郭公こえ晴れくしいつも山 出雲山

寛之

の象あり。愈々夏に入りて晴雨計の昇降益々些少に、空氣乾燥にして天候齊整、日本海は波穩かにして鏡面の如く、唯だ朝暮陸風海風の規律正しく交るく吹き來りて雪の如き蕎麥の花を揺曳するのみ。然れども冬間に於ける水蒸氣多量の現象は隆夏に到るも歴々とし、大山（伯耆富士）峯頂の谿間時に殘雪を看、人をして轉た

伯耆富士松江の夏に蓋すなり 松江

三千風

の感あらしむ。

北陸道に入る、金澤の市上、南に白山の雪色を望み、街頭兒童の笹が枝に雪を包みて「白山の雪々々々々」と喚ぶを聞く、聲々清涼滴れんとす、焉んぞ知らん、夫の「松江の夏に蓋す」るの冷氣、笹が枝内一掬の雪、正に亞細亞大陸より西北風の冬間拉し來れる水蒸氣の變形なるを。越中に入り、神通川を渡る、水量漾々、鱒魚潑刺、是れ南方連嶽の峯頂より解け去りたる雪水に因る、亦た亞細亞大陸より西北風の拉し來れる水蒸氣の變形。神通河畔、劍嶽、後立山、立山、赤鬼ヶ嶽、鐘ヶ嶽（山の各名稱既に圓錐形の兀立するを示す、自ら火山的の者）を仰ぎ望まんか、稜々たる峯頂齊しく白雪を冠むり、眞に是れ

たち山にふりおける雪をとこ夏に

池主

みれ共あかすかむからならし

玉山壁立撫青空。鐵鎖援雲摩月宮。晚嚼會仙壇畔雪。朗吟飛下北溟風。立山

龜田鵬齋

大山、白山の雪神通川の水量を深々たらしめたる源、劍嶽、立山、後立山、赤鬼ヶ嶽、鐘ヶ嶽の峯頂の雪、針木嶺の雪田は皆な冬間亞細亞大陸より吹き來りたる西北風の日本海を經過せし間に拉し來りたる水蒸氣の變形なり。

針木嶺の山道、登ること千八百米突（海拔）、隆夏實に雪を踏む、登ること更に八百米突（海拔）、嶺頂に達し、脚を雪上に停めて南望せんか、八ヶ嶽、駒ヶ嶽（信濃）の間、恰も富士の芙蓉八朶を認む、眞個に一幅の油畫、畫師の品題に入る至妙の處（第百三十一頁と参照すべし）。蓋し日本中央の大山系や、冬間水蒸氣の多量に因り、氷雪滿積、而して隆夏其の一たび融消せしもの、今少しく寒冷なる溫度に遭遇せば、更に凍冰して所謂「氷田」を化成せしや必然、唯だ溫度の少しく高きが爲めに竟に此に到らず、日本に「氷田」を看るべからざるは太遺憾、然れども既に榕樹、椰樹を見、兼て亦た「氷田」を看んとす、是れ貪慾隘くを知らざるもの、既に隆夏針木嶺上二里

四方の雪田を看、又た嶺の谿間に「氷河」を看る、亦た以て「氷田」の看を做して可。之れを要するに

あら世話し花見る中へ越の夏

不 筈

の句、日本海岸に於ける夏季の來狀の全班を蔽ふ、十七字、正に百卷の地文學、萬千の氣象的材料に優る。

(五) 紀南半島、四國の南半、九州の水蒸氣(秋)

あき風の骨見付けたる鳴門哉

百 和

と、秋風早く鳴門海に吹き到るや、紀南の大半島は忽ちにして黄金世界と化成し、玉柑累々、蓋し太平洋より吹き到る水蒸氣の紀州山系一帯に撞撃して凝結し、西方、南方一面を雲包霧裏すると、温暖海流(黒潮)の近洋に流駛すると、地形南方に斗出して氣候の特に温暖なると、此の三者實に「沖の暗いのに白帆が見ゆるアレハ紀の國蜜柑船」(何等の詩趣何等の活畫圖、神韻千古)の句あらしむる所因。

四國の南半(土佐全國、阿波の一部)も、亦た太平洋より吹き到る水蒸氣の四國中央の山系に撞撃して凝結することなれば、北半(阿波の大半、讃岐、伊豫の大半)と全然氣象を相異にし、

天候多雨、熱帶植物能く暢茂し、一般植物も亦た鬱葱す。若し夫れ秋風一陣九十九里灣に入るや、假令秋山は春山に似ず一般に明淨拭ふが如く、秋江は水涸れ沙長きものなるも、而かも四國の南半は日本國中にて最も水蒸氣多量の處、其の現象は躍如として一景一境に代表せられ、阿土二國の境界なる魚梁瀬山脈は白雲縹緲として背腹を捲き、夫の一代の英物たる野中兼山が心血を漉ぎて繋通せし各處の溝渠運河は水量殊に多々に、紙、鯉節、煙草を搭載せる小艇絶えず上下相來往し、四萬十川(一名渡川)は汪々として湖水の如く、幅或は二十町、深サ時に十尋、中に白渚青嶼ありて、煙霧杳溟、岸を隔つるの人家隱見出沒の間に在り、想ふ四國の南半益大の處に此の湖様の大江ある、實に所在水蒸氣の多量に源因し、所謂「四萬十」條の溪水(造大にもせよ)合流するを以てなり。

秋既に四國に來る、九州豈に動かざらんや、一朝

彦の嶽や色なき風もけさの秋 彦山

三 千 風

に到り、嶽下の耶馬溪(原名山國)は

肌入た羅漢もありてけさの秋 耶馬溪 羅漢寺

涼 袋

となり、涼氣既に紫海に横はりて、

西肥城郭古諸侯。滿目人煙接地浮。紫海潮聲高永夜。天山雪色入深秋。白沙衰艸行臨野。落

日涼風獨倚樓。十歲龍鍾書劍客。追懷往事不勝愁。佐賀

古賀穀堂

の候に入るや、獨り西肥のみならず、「銀杏挿天知故國」てふ阿虎の故城 熊本城雅名「銀杏城」に公孫樹黄金を布き、筑前、筑後の江堤に櫨紅綿を曝らし（櫨は九州の秋を代表す）、日向の連山に柯樹黄ばみて、薩摩の火山岩上に柿、桃葉衛子色を染む、栗、ドウダンツ、ジ、ナラ、櫻桃、南燭樹、山毛櫨、榭、地錦、亦た齊しく葉を染め來り、柑類亦た累々、紅色、黄色、黄丹色、黄金色、白銀色は、濃淡深淺、樟、棕櫚、竹、鳳尾松の鮮綠色と其間に錯繡し、秋雨瀟々の時、之れを眺觀せば、更に一層の彩色を添ふ。海外の人、談會、秋間彩色の多種多様な事に及ぶや、輒ち北亞米利加北部の森林を説き、且つ獨逸の山中に於ける榭屬植物の黄葉を艶稱す、而かも其の種類極めて些少、固より榭、オホカシ、血櫨、麩櫨、ウラジロガシ、石櫨、アラカシ、チリメシ、ホソバガシ、ヒリウガシ、ヤナギガシ、ハゴロモガシハ、枹、オホナラ、ミツナラ、柯樹、サツマシヒ、櫨、アベマキなる十七種二變種の榭屬が一齊に黄葉する日本の秋色と比觀すべきにあらず。宜べなり歐米の秋色を謂ふ者、一たび日本の秋を見るや、忽ちにして慚然自失すること、宛然一千四百餘の彩色を所有して宇内第一と誇揚せる獨逸の一染工場主をして、二千の彩色を所有せる日本京都の川島氏に會せしむと一般。既にして

やつしるや蜜柑の秋も今三日 八代

支考

となり、秋や漸く九州を拂ひ去る。

### (六) 北海道の水蒸氣(冬)

西北風、亞細亞大陸より日本海を經、海の水蒸氣を拉して吹き來り、北海道中央の大山系に撞撃するや、忽ち凝結して雪意漸く動き、九月下旬、凍雨霏々、木葉方さに飛びて林梢蕭疎、石狩嶽上早く白皚を被ふるを看、十月中旬、札幌市西の手稲山上雪既に下り、十二月下旬以降、玉屑淅瀝、悉く石狩の平野を蔽ふ。此際淡墨色の同雲空に連り、天色糝糊、忽ちにして雪を下すものは西北風の日本海上なる水蒸氣を拉し到りたるが爲めのみ。雪既に石狩の平野に下る、轎車三々五々陸續來往す、是れ奇觀、而かも奇觀中の最奇觀は實に原人時代の山林中に雪の滿積せる所是れなり。想ひ起す、混茫一白、楡樹々枝玉を懸け、其間蝦夷松、棋楠の聳立して皎光翠色相點綴する處、兩群の鴻雁同雲を度りて、一幕の天風時に冰海を剪りて來る、北方豪健の象歷々眼に在り、眞個に文人、畫師の氣局を恢弘するに足る所。東海岸に到りては、寒冷海流北極圈より來り、三冬の間、海上一面に冰封し去る。蓋し水は凍氷の際容量の百分の七増殖するを以て、氷の益々張り詰むるや、遂に龜裂を生ず（信濃諏訪湖の冰封する間、諏訪明神の狐の「神渡り」とて水面に一條の大割線を生ずるや、爾後人馬の安慮して氷上を渡過するも此理と一。氷厚サ四寸能く騎

兵隊を渡らしめ得、是に於てか人馬其上を渡り、且つコマイ魚釣り（コマイ魚は冬間根室灣中に群游す、氷に小穴を穿ちて海水まで貫き、鉤を此中より垂るれば、輒ち餌に懸りて多く獲。冬間諏訪湖の氷上、「氷引き」とて漁人の鯉、鯽、鯰、鱈、アカウヲを釣るも之れと同一趣向）の小屋氷上上る處に點散す、是れ南方人士の看る能はざる所、亦た一奇觀。

(七) 山陽道、四國の北半

日本國に水蒸氣の多量なる、是れ其の江山を洵美ならしむ所因、而かも水蒸氣の多量なる處のみとせんか、景物一樣、時に或は遺憾あり。此間に際し山陽道、四國の北半は、北は中國の中央を横絶する山系に依り、亞細亞大陸より日本海を經、吹到せる水蒸氣を遮斷し、南は四國の中央を横絶する山系に頼り、太平洋より吹到せる水蒸氣を障屏す、是を以て空氣特に乾燥、天色海光轉た朗かに、

うみすゞし百八灯の星のかけ 嚴島

不 言

の象あり。潮水も亦た空氣の乾燥なるが故に蒸發劇甚、爲めに鹽分を含有すること多量、是れ山陽道、四國の北半に製鹽業の盛なる所因。其の磯馴松の蔭、鹽焼く賤が苫屋より煙の高く颯りて一層の歌趣を添ふもの、亦た空氣の乾燥なるに因る。

之れを要するに、到る處水蒸氣多量なるの間、此の一部分の乾燥なる箇所を遺す、乾濕相待ちて日本國の景象却て大觀を加ふ、天の日本を惠する大又た妙。

水蒸氣多量の現象、其の痛奇なるものは、

(八) 迷 景

にして所謂「蜃氣樓」なるものは是れ。古來之れを記する者、其間妄誕の理窟を存するも、現象の實際を言ふ所に到りては取るべきもの多し、曰く、

初は幕を引るがごとくなりしがしばらく見る間に城廓のごとく矢倉高塀やうのものも見え矢間などのごときものも見えしか又暫する間に松原の如く繪に書る天の橋立などのやうに見えし夕暮に及び風少し出たれば漸々に消失て跡かたもなくなりしなり富山よりは纔に六里を隔てたる所なれば城下の人々皆見物したく思へども何時に結ぶもしれがたく又むすひたる時急に人して告しらすにも其間には消失て見るべからず此ゆゑに魚津近所の海邊の人は例年見る事なれど二三里を隔てたる地方の人は一生涯つひに見ざる人多し余か越中にありし時も三四月の間を魚津に逗留して蜃樓を見るべしと人々にすゝめられ余も亦年頃の望なりしかど富山にありし比は正月二月なればそれより三四月まで越中に逗留せん事あまり永くしければ残念

なりしかども見ずして越後にこえたり越後の糸魚川にて松山茂叔に此事を語りしに此人も糸魚川の海中遙に山の出来たるを見たり漁人のいひしはこれは鹽山といふものにて折々見ることなりといひしと語られき余初め唐人の作れる詩杯を見て思ひしは蜃樓は大洋にある事にて陸地近き入り海にはなきことのやうに心得しが魚津の地理を見るに左にはあらず魚津は北海に臨める地なるに向ふの方七八里と思ふ程に能登國の山を屏風のごとくに見る魚津の海は東よりの入海なり海中より蒸登る陽氣向ふの山に映じて色々の形を見るく向ふに當なく數百千里見はらしたる大海にては陽氣のぼるといへども向ふの當無れば映ずることなくして人の目に見えかたしとそ覺ゆ伊勢の桑名の海にも三十年五十年の内にはたま／＼蜃樓を結ふ事ありといふ是も向ふに尾張三河の山を受てあるゆるなるべし又安藝國にてもたま／＼は有り云是も向ふに山あり（東遊記）

魚津の所在たる富山灣は、山岳を以て圍繞し、特に東南には氷雪を堆積せる立山の連山あり、其の峯頂より吹下せる風は、灣の水面を吹き廻り、水面上の空氣を上層よりも數等寒冷ならしめ、空氣の密薄を下層と上層と殊に差違せしむ、是時に當り太陽の光線魚津より映するものは、之れと直ちに對岸せる能登半島の連山の東側南側に反射し、會々空氣の密薄劇甚なるに逢遇して屈折し、竟に迷景を生ずるものとす、南鈴（「東遊記」の著者）の紀する所信然々々。

伊勢國四日市の海面を那古浦といふ（中略）此浦より春夏のあいだ蜃樓海上にたつ諺に云伊勢太神宮尾の熱田宮へ神幸あるといふ其形鳳輿行幸旌蓋前後にあり又は諸侯行列の體又は樓臺宮殿の相鮮かに見へて漁人時々見る事あり忽須臾のあいだに消／＼となる又尾州鳴海の浦などにも春の頃見ゆるとく又西國北國などにもあり按るに潮水の氣陽精に乗じて立昇るなり陽炎の類にやあらん（東海道名所圖會）

#### 那古浦蜃樓記

靜者天地之質也。動者天地之氣也。質者姑不論焉。夫一氣之運動轉旋也。含氣者皆與焉。神仙人靈禽獸鱗蟲。有趙遙者。有苦勞者。有顯見者。有隱匿者。彼此萬態。皆一氣哉。吾鄉四日市驛之爲地也。在勢灣北畔。而遠望東南數十里。面于大洋海門矣。是海門也。南界勢之熊岳。北則尾州海嶠也。其間亦數十里。有龍洲及小洲數處。點々如盆池設石然。吾鄉所望不能挹取其微而已。春夏之交。數月中一日。晴霄和氣。雲靜風收將雨之前。自熊岳至尾之嶠。忽爾烟霧靄靄。失海門所在。而地如連接。靄上有物。如雲烟變態。或臺閣。或門闕。前有干旄。後有輦路。行伍排列森森孑孑。奇觀不可說也。須臾湮滅。而山海景象復平常矣。其顯見也。發南。而移轉。而失北。古今不違。歲率五七回。若二三回。或不見焉。不過吾鄉畔數千步。蓋所以爲吾鄉名勝也。土人傳道。二所皇太神廟遊幸于尾之熱田神廟也。博物者云。勢灣之北畔。產蜃也尙矣。蓋以爲其所吐也。嗚呼神靈之遊幸也。蜃之吐氣也。天理不可窮。神慮不可測。若夫天地間之一氣。運動轉旋。爲奇觀爲名勝者非邪（下略）

寛政七年乙卯夏五月

勢州四日市驛廳馬曹 西村貞 節甫

の如き是れなり、是れ「神靈之遊幸」にあらず、「蜃之吐氣」にあらず、水蒸氣と太陽の光線とに交渉せる一現象のみ、日本人幸に水蒸氣の多量、岬灣の出入多々、高山の海岸を圍繞せる國土に在るを以て多く之れに逢遇す。

以上水蒸氣多量の感化する所、佳なるもの奇なるものに止まる、然れども其の日本國の現象に感化する、豈に單に佳なるもの、奇なるものに止まらんや、豪放の特に豪放、跌宕の最も跌宕なるものに到りては、實に

(九) 颯 颯

是れなりとす。是れ秋間九月、十月、印度洋上季候風の南退するに當り、氣象頓に激變し、爲めに太平洋上(特に薩南列島、沖繩列島の間)に起るもの。曲亭馬琴は近代の俊髦、其の著はせる小説、些事と雖も苟くもせず、資る所の材料悉く據るあり、皆な知者に對して而して後執筆す、今「椿説弓張月」中掲ぐる所の沖繩海上颯颯の紀事を閱了するに、荒天の前に於ける快晴、水蒸氣の模糊荒天の豫兆として文鰩魚トノサマの飛揚、海蛇クラゲの浮出、皆な實境に逢遇せし者に據るにあらずんば知るべからざる所、其間荒唐の言辭も亦た在りと雖も、敘事至緻至密、實境躍如、取るべきもの甚だ多し、加ふるに文字踔厲跌宕、乃ち拔萃して鄙筆に代へんか。

この日天よく晴て一點の雲なく渺々たる洋中波靜にして順風に眞帆揚たるに日ははや入はてし月海よりさし昇り頃しも秋の最中なれば金波箔を漏り玉兔浪を走り汐風いと冷やかなりかくて曉方ちかくなるまゝに霧いとふかかたちこめて咫尺の間も見わきがたく船は潮に引れけん午の比及に霧は霽たれど何處の澳とも思ひわかず時に魚ありその狀鯉の如くにして鳥の翼あり蒼文白首嘴赤く其音鸞雛に似て波の上に群り飛ぶこといくばくといふをしらず且して水面穢れ泡だちて米糟を散せるごとく夥クラゲの海蛇浮出て船の左右に充滿たりこれたゞ事にあらずとて衆皆面をあはしつゝ思ひ惑さるものなし當下爲朝は水と天との景迹に目をつけて大に驚き白縫姫に宣ふやうわれ西國に成長り又伊豆の島々に十年の春秋をおくりしかば渡海の風信自然にくはし大約南海は三月清明のち地氣南より北にゆくこゝをもて南風を常とす又九月霜降の後地氣北より南にゆくこゝをもて北風を常とすもその例に反ときは風の怒らざるとなしそれ大風烈しきを颯といふ又甚しきを颯と稱ふ颯は常に驟に起り颯は漸ありて來たる颯は瞬のうちに發りて倏に止み颯は一晝夜或は數日にしてなほ止まず正三三四月は颯おほし五七七八月は颯おほし渡海の船颯に遇ときはなほ脱るゝことありもし颯に遇ときは當がた

し十月以後は北風常に作るしかれども颯颯に定期なし五六七八月は南風に颯ありその風發ら  
 んとするときに北風まづ至り轉じて東風となり又轉じて南となり亦轉じて西南となる颯颯の  
 はじめて發らんとするときにまづかならず雨降るそのとき半天に一朶の雲出づまた斷虹のご  
 ときものありこれその應なり又颯の起るときに帆のごとき雲出づ又半天に及て稍ウシキウの尾に似  
 たる雲となるはそも前象なり颯は蟹に似て南海に生じ十二の足腹の兩旁より出、眼は背の上  
 にありてその口は腹の下にありこのもの海を過る毎に相負て背を示し風に乗じて遊行す海人  
 これをウシキウと呼ぶ其皮殻甚堅し異國の人これを冠にすといへりあれ見たまへ今も又颯に似た  
 る雲半天にあり嘗聞颯發らんとすれば海水穢れ泡たちて海蛇クラゲ夥水上に浮み文鯨魚群り飛ぶ舵  
 工これを見るときはふかく恐れ遠く慮りて帆を收め舵を嚴重にしてこれを避もし準備速なら  
 ざれば船忽地に傾覆ざるとなし今三ツの不祥悉く備るものどもなどて帆をおろさざるといき  
 まき給へは白縫姫はさらなり衆皆舌を振て驚き喙つゝ帆を引おろしさて碇をおろさんとする  
 に底ふかくしてその綱とゞくべうもあらざればこはいかにせんとていよゝ周章す浩處に遙に  
 後れたりける舜天丸の船やうやくに乗着て間ちかく艚ならべ八町礫紀平治高間太郎等艚先に  
 蹲踞し主の船に對てまうすやう今曉より狹霧ふかくたちこめて船のゆく所をしらず東へ赴く  
 べき船の南へ流されたるかとおぼし加海何となく海の氣色の怪しく見を候を君にはいかにお  
 ぼしめすやらんと問を爲朝見かへりて汝達がいふごとくわが船南へ漂流せしに疑ひなし故い  
 かにとなれば文鯨魚の群がり飛ぶをもて是をしれり彼魚は南海に多しおもふに薩摩瀉を去る  
 こと數十里なるべし見よ半天に怪しき雲あり且水の上に海蛇夥しく出たるぞ即惡風起らんと  
 するの前象なる今これを避んとするに船を入るべき湊口なし只手を空して死を俟のみ薄命の  
 係るところわれに於てせんすべをしらず今さら驚く事かはと回答給ふに件の兩人眉を蹙めし  
 かりと雖ども知つゝこれを防ざるは智の足らざるに似たり船大きやかなれば風波も輒く傾覆  
 すに至らず稚君の御船と殿の御船を繋て連環し衆人力を戮して艚ならばいかでか必死を脱れ  
 給はざらんと信だちて既に纜を投かけんとするを爲朝急に押とゞめ汝達の言差へり親子ひと  
 つ船にありてその厄難を等しく稟んこと究めて宜からずわが主從三十餘人命凶なるものゝみ  
 にはあらじかの網に入る魚も十に二三は脱るゝものを抑爲朝伊豆の大島にありしときはつち  
 やう以下の七島に往來し早潮黒潮の灘をすら屑とせず千里の波濤を家として一たびも大風に  
 吹流されたる事なかりき皆是神佛の擁護あるに似たりしかるに今華洛に推渡て君父の仇たる  
 清盛を狙撃んとするに狹霧に舵をとり悞て剩風濤の難に親子主從悉く大魚の腹に葬れなば天  
 なり命なりすべて一年十二ヶ月惡風の發る日あり八月十五日を魁星颯と稱す箕壁翼軫の四宿  
 はなみ風を起す事を主るとぞ我これをしらざるにあらずきのふ魁星颯の日期に船出して事な



く今日に至て颯にあはぶとても脱がたき主従が命ならずやといらへ給ふ其言いまだ訖らず船の前後に龍あらはれて水の沸たつ事二三丈瞬間に風颯と吹來る程こそあれ天驟に結陰大雨盆を覆すがごとく降そゞぎ四方野于玉の烏夜となりて面をあはするも送にその人を見ず只聲をしるべとしておのゝ罵り勵し力を戮して艦賊を操り命かぎりに働けども風雨ますゝ烈くて船は只管に跳り繞り浪を打入るゝことしばゝなれば水を浚乾すに違なく衆皆瞑眩て撲地と仆れ舜天丸の乗給へる船もいづちゆきけんおぼつかなきにありとも見へずはゝ木々は其處かこゝかと呼び給へど絶て答るものもなく吐嗟船は目今傾覆べう見えたりける當下白縫は潮垂るゝ兩の袖を絞あげよるめく足を踏かためて聲をふりたて御曹司かくては萬死に一生を得がたし(中略)しかれども風雨はなほ止ずして海の鳴音凄じく船は鞠を蹴るごとく高く揚りて半天に至り或は傾きおちいりて浪よりも低く沈みもやらず浮もやらず廿餘人の郎黨は白縫入水し給ふといへども終に應なきを視て今はかうと思ひたえ舷に手をかけてやうやくに身を起し吾儕木原山に參りつかへしより以來命は君にたてまつりぬ倘琴高が鯉に跨り烈子が風に御るにあらずは脱れ給ふべくはおぼえず誘給へ死出の先登つかまつるべしといひも果すおのゝ刀を引抜て或はさしちがへ或は腹かき切り舷より轉墮て名をだにしらぬ荒海の底の水層となり(下略)

水蒸氣の感化、以上に止らず、妙に人工人作上に現象するものあり、而して特に其妙なるを

(十) 東京に於ける水蒸氣の現象

となす。想ふ東京の地位たる、陽に海門を擁し、左に澤田の長江を控ゑ、水蒸氣多量、毎歲五月中旬より十月に到る間、濕度常に八十度以上(一百度を飽和とす)を示し、煙霧時々冥合す、而かも天巧人作の相調和融渾して大觀を表出するは實に此時に在り。若し夫れ曉色微茫、水蒸氣は滿天に縹緲して大海の如く、堂塔、殿閣、層樓、其間より隱見斷續し、時に鐘聲(上野か淺草か)殷々として此の大海中より迫り來る。須臾にして曙光は、水蒸氣の間を透し來り、宮城の粉壁先づ紅を抹するや、頃刻萬變、三十萬の戸一時に顯現し、人をして坐るに蜃氣樓を眺觀するの感あらしめ、芙蓉峯萬仞、亦た蕙爾として半空に露はる。忽ちにして煙霧復た蒸上、戸、層樓、殿閣、堂塔、一々取次に大海中に没し、芙蓉峯亦た没して

霧時雨富士をみぬ日そ面白き

芭

蕉

の觀を呈し去る。忽ちにして風到り、煙霧掃はれ、堂塔、殿閣、層樓、戸、復た浮び出で、光線と水蒸氣との態遇に因り、前度と其觀を改めて顯現し、芙蓉亦た觀を改めて來り、

くも霧の暫時百景つくしけり

芭

蕉

の句を想起せしむ。既にして夕陽西に暮き、鐘聲恰も前度と音響を異にして到り、漸くにして反照收まり、紅色、黄色方さに天象を去るや、煙霧復た起り、淡紫色の水蒸氣は城樓を籠め、純白色の水蒸氣は瀬田の江上に横はると看れば、卒然として煙散じ、

霧晴て不二を積りかゝり船 石川島

鷺 洲

の都鳥と共に上下するを觀る。急遽にして水蒸氣大に湧き、空水一色、市燈は其間より明滅し、電燈の青熒なるものは更に青熒を添ふ。要するに、東京に於ける水蒸氣の現象や、天巧人作妙に相調和融渾し、轉遷幾回、晦明四時、出沒無窮、彩色多變、太觀寧ろ此處に過ぐるあらんや、誰か言ふ、東京は太俗の處と。

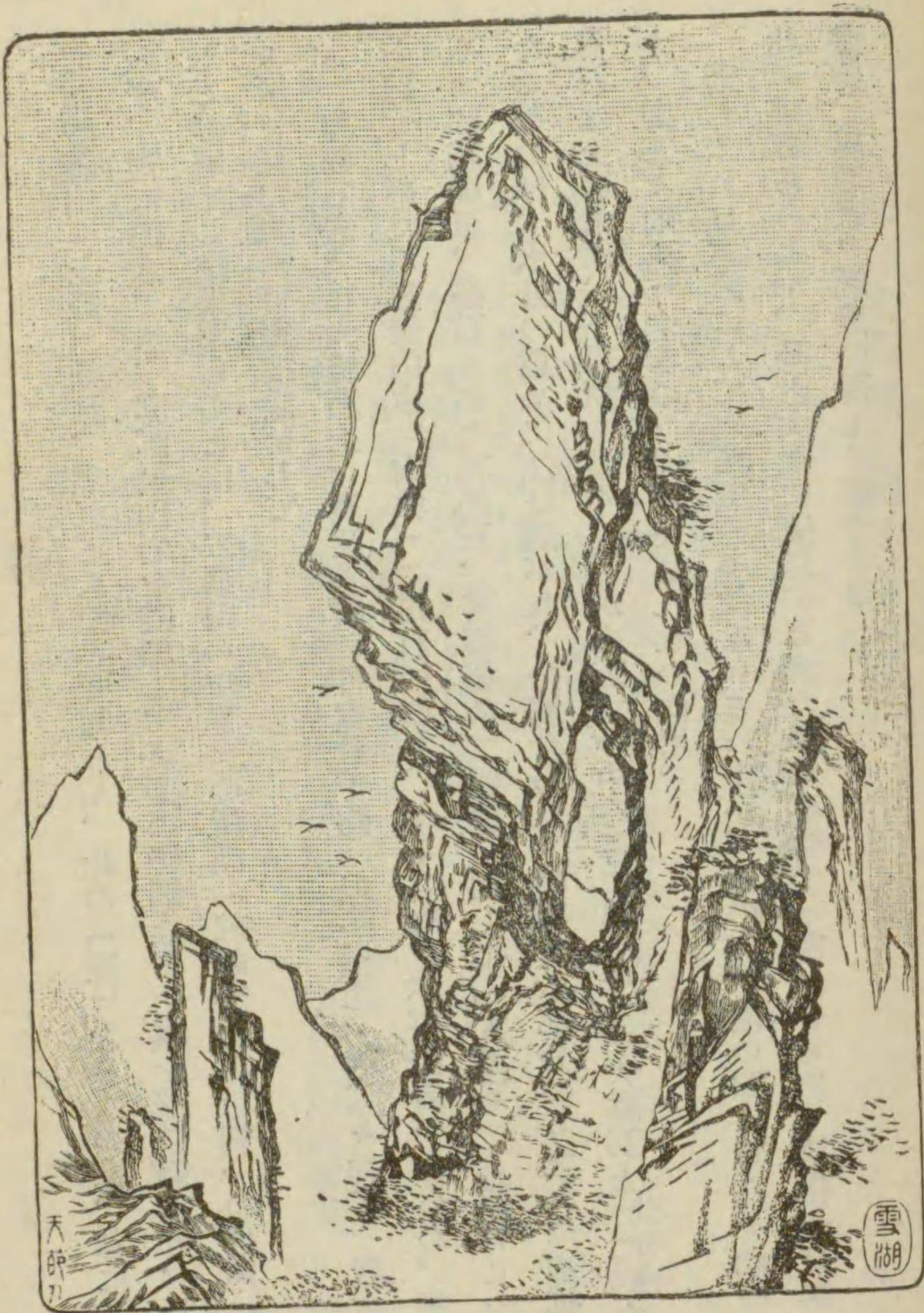
水蒸氣の感化、日本の風景を煥發するの外、魁偉磊落なるものあり、其の浸蝕は即ち

(十一) 岩石の霉敗

を誘致し、脆弱なる地皮は外部より洗ひ剥がれ、且つ内部より劇しく分解せらる、而して是れ此の最も多濕なる日本に多しとす、其の顯著なるは、

此山のすがた世に類なき奇異のありさまなれば神靈ある事むべしかゝる名山にかならず靈あり故に祈ればしるしありとぞしられける

秋里 籬 島



門石二第山義妙

望可。絶峻邊四。巾風折類。倚偏形。狭下裏上。上之巖危兀突  
(齋良積安) 至可不  
(シベス照參セ合ト部ノ「山義妙」頁二十二百第)

てふ妙義山（上野）是れ、然れども焉んぞ知らん、此の「靈」なるものは、神にあらず、鬼にあらず、實に雨水、氷、雪が火山岩を浸蝕し、表面の脆弱なる土壌を洗ひ剝がし、且つ内部より劇しく分解せし結果ならんとは。五劍山（伊豫）の所謂「五劍」も亦た同一の作用に因り彫鏤さるゝ所。又た夫の齋藤拙堂をして

有揺石者。在大盤石上。高及人頷。可重數千鈞。以手撼之。則兀々動揺。理之不可詰者也。と記せしめたる笠置山中（山城）の揺石の如き、何ぞ「理之不可詰者」あらん。蓋し此の「大盤石」は花崗石、揺石も亦た花崗石、其質極めて堅硬、而して「大盤石」と揺石との間に在る脆弱なる部分は、水分の爲めに洗ひ剝がれ、分解せられ、堅硬なる部分のみ之れに拮抗して殘留し得、揺石は上部大に、下部漸く細く、而かも重力の中心外に出でず、「大盤石上」に屹立し、「以手撼之。則兀々動揺」するのみ、皆な是れ水的作用。

若し夫れ日本國にして水蒸氣の多量ならざらんか、天の文、地の章、焉んぞ此の洵美あらんや、此の錦繡あらんや、是れ大陸に棲息する者の多く享受する能はざる所、造化や日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に福する多し。

### 日本の水蒸氣に關する品題

是れ歐米人の其國に在りて見る能はざる所を撰擇せざるべからず。

(一) こそ吹きて曇りつる蝦夷の春の夜の月。  
 (二) 富士の峯尖、白雲の上に露はれ、太平洋の地平線上旭日正に昇り、此の白雲を下層より黄金色、黄丹色、紅色、紫色と漸次に抹し來る。

(三) お富士さん霞のころもぬがしゃんせ

雪のはだへが見たうござんす。蜀山人

(四) 峯腰（富士）一片雲。散作千山雨。茶山

(五) 半空湧出兩浮圖。更有伽藍俯九衢。十二帝陵低不見。黑風白雨滿南都。竹外

(六) 笠島や箕輪をかけて行く時雨。清民

(七) みち汐よ鳥海山の八重かすみ。素盈

(八) 初虹や橋またひとつ雄鹿の島。朝四

(九) 朝ほらけ宇治のかは霧たえくくに

あらはれ渡る瀬々のあしる木。権中納言定頼

(十) 卯花雪の如く、杜宇聲々、梅雨霏々。

(十一) 長空一碧、忽ちにして半天一點の黒雲を見る、雲疾く馳せて、地平線上に下降し、靄霧冥合、颯颯將さに來らんとして、汀上の椰樹三五株、頂上の葉早く翻りて幹と漸く直角をなす。

(十二) 籬落の秋霽、夕陽反射、霜後の柿實、其葉と共に丹紅燃えんとす。

(十三) 矢矧川かすみの中を流れけり。李喬

(十四) 五月雨や或夜ひそかに松の月。蓼太

蘆荻花飛拂渚汀。深秋時節恰繫令。憑人勿說前朝事。落月寒煙壽永陵。  
水瘦刀根不勝秋。一年又過古毛州。臨江閣上三杯酒。紅樹夕陽弔故侯。

矧川生

#### 四 日本には火山岩の多々なる事

(一) 亞細亞大陸の火山脈、カムサツカ半島より千島列島に入り、北海道に進入し、前みて奥羽に到り、三派に別れて、中原に朝宗し來る、(二) 南洋の火山脈も亦たフィリッピン群島より沖繩列島に到り、薩南列島を経て、九州に入り、遂に二派に別れ、一派は阿蘇山を成して東走し、直ちに四國、紀伊に到りて、參河に入り、一派は肥前の温泉嶽を作る。北來の火山脈、南來の火山脈と相衝突する所を富士山邊となす、而して兩々の火山脈相衝突するや、其の勢力は地皮の最も脆弱なる箇所を求めて駛走し去り、日本本州の眞中央に一大火山脈を曳き、直ちに伊豆半島、豆南七島、小笠原列島、硫黄三島を聳起す。其他日本海中に一脈、日本海岸に沿ひて一脈、日本海と中央大火山脈との間に一小脈を延縁す。之れを要するに、日本國や、實に北來南來二大火山力の衝突點に當り、火山の存在するもの無慮百七十個、而して全國表土の五分の一は火山岩より成る、是れ日本の景物をして洵美ならしめたる主源因。

(一) 日本の風景と朝鮮、支那の風景

想ふ火山岩たる、元と地皮の皺縮せる際、熱氣を揮霍し、餘怒激して爆然外に噴き來り、噴き來りたる溶岩の外氣に觸れて收縮せしもの、故に其狀や槎牙重複、裂くるが如く、缺くるに似、或は刻削せる壁の如く、或は斧鑿せる柱に似、諸奇變幻具狀すべからず、日本表土の五分の一實に此岩に成るとせば、景物の警拔秀俊なる固より知るべきのみ。蓋し朝鮮の如き、多くは原始紀、太古紀の地質に係り、火山岩たる少々。支那の如き、北方は一面第四紀地層に係り、平々たる水成岩延縁すること無慮四萬二千方里(日本全面積の一倍七強)、所謂「黄土」と稱し、黄河の濁江汪々として其間に曲折し、注ぎて黃海に入り、上には黃雲慘澹とし、滿眸皆な黃色、一山一峯の此際に聳起するなく、風物の單一同様なる眞個に行客を惓殺せしむと、況んや若し夫れ北風直ちに蒙古より到るや、千里之れを遮斷するものなく、所謂「黃風北來雲氣惡」(李夢陽)、黃塵紛々、戸障に入り、木葉を蔽ひ、田園に累り、泉水亦た黃濁、殺風景の極を盡くす、是れ支那詩文人の動もすれば「黃塵萬丈」の語をなす所因、敢て日本の如き火山岩國の淨山澄水間に使用すべからざる語、蓋し「野曠天低日欲西。北風吹雪雁行低。黃河古道行人少。一片寒沙沒馬蹄」(屠隆)、是れ實に支那北方の景象を描きて餘蘊なきもの、其の南方に到れば、十中の七八は、太古紀、中古紀の岩石に成り、森林は幾千年來濫伐し去りて巨木高樹の幽邃少く(四川省、揚子江の上流を除きては)、僅に積著一葉の書を描きて段形的に山水を果前に現らし、所謂「風塵」して以て脚か

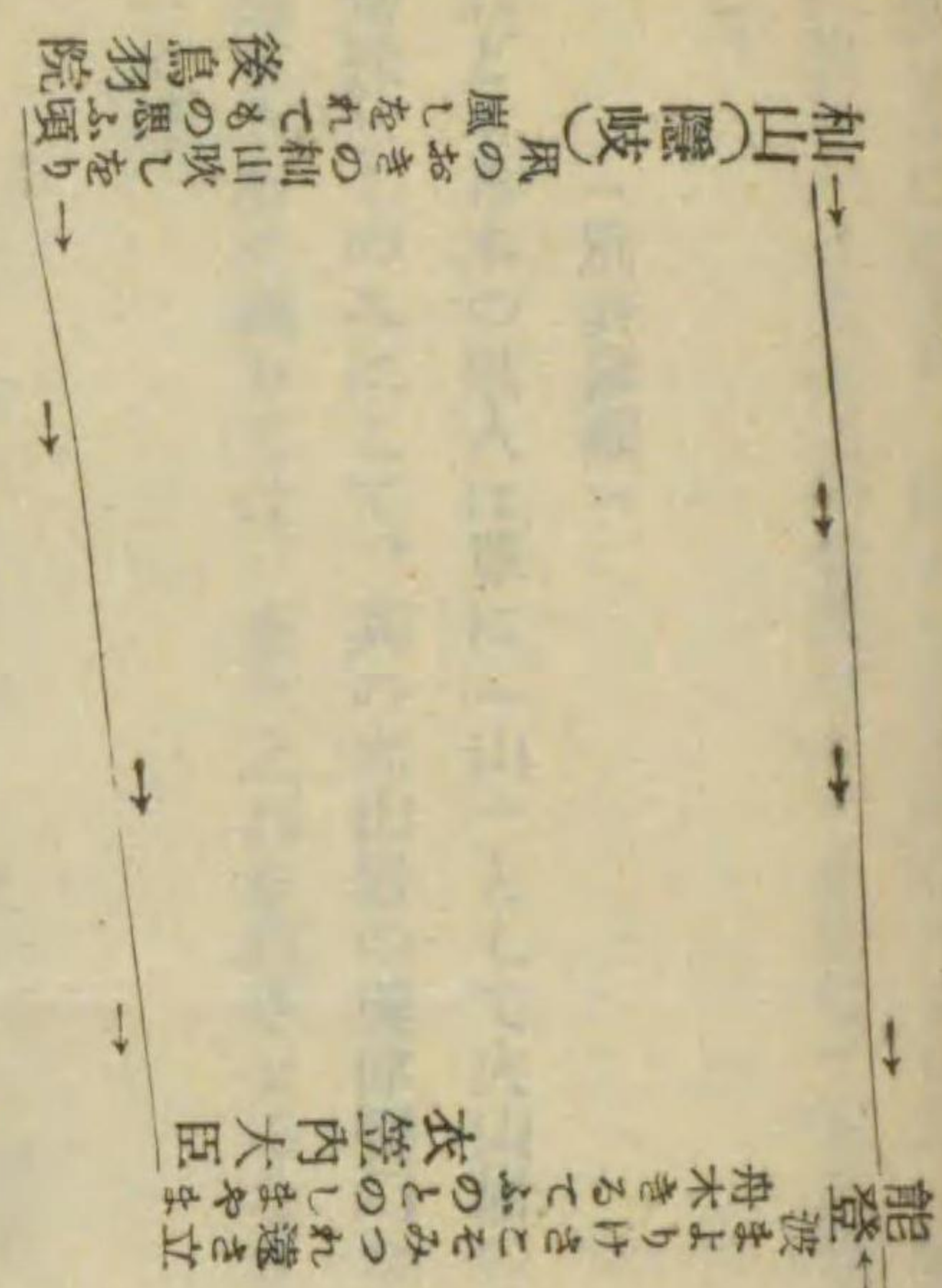
伊豆の小山の玉穂  
代も色はかはらし  
す出のみね深く  
あしかたの鶴の  
ははやけなれと  
りおたほかたぬ  
すある月かけく  
あしかたの鶴の  
ははやけなれと  
るしけみを分越して  
のしるしなりけり  
るけみの分越して  
のしるしなりけり

大島(伊豆) 鎌倉石大臣 實朝 覺盛

行人もかりとこそきけ大島の空  
山もかりとこそきけ大島の空  
堯惠

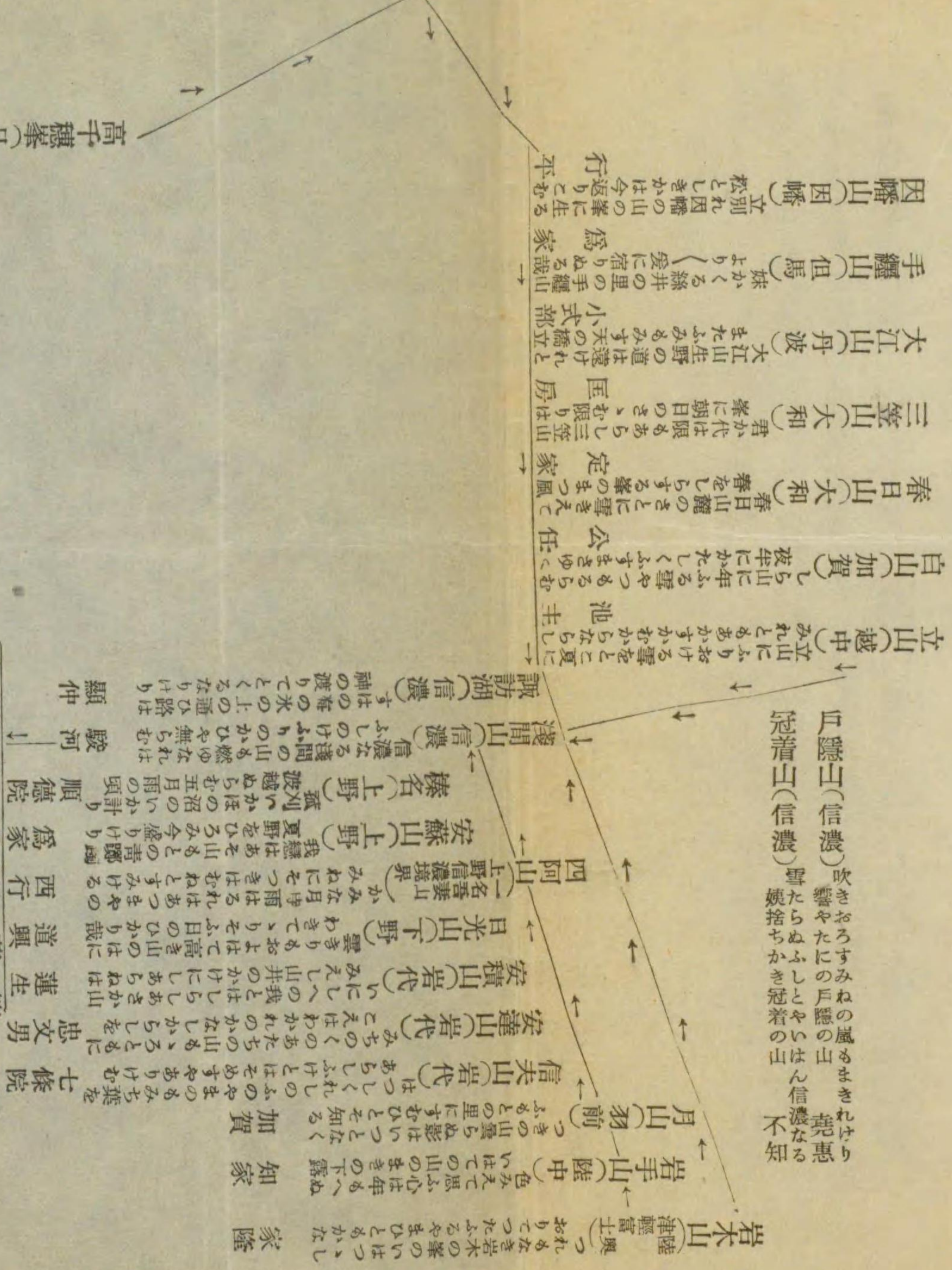


或亥育せる壘の如く、或は斧鑿せる柱に似、諸奇變文具狀すへからず、日本表土の五分の一、實に此岩に成るとせば、景物の警拔秀俊なる固より知るべきのみ。蓋し朝鮮の如き、多くは原始紀、太古紀の地質に係り、火山岩たる少々。支那の如き、北方は一面第四紀地層に係り、平々たる水成岩延縁すること無慮四萬二千方里（日本全面積の一倍七強）、所謂「黄土」と稱し、黄河の濁江汪々として其間に曲折し、注ぎて黄海に入り、上には黄雲慘澹とし、滿眸皆な黄色、一山一峯の此際に聳起するなく、風物の單一同様なる眞個に行客を倦殺せしむと、況んや若し夫れ北風直ちに蒙古より到るや、千里之れを遮斷するものなく、所謂「黄風北來雲氣惡」（李夢陽）、黄塵紛々、戸障に入り、木葉を蔽ひ、田園に累り、泉水亦た黄濁、殺風景の極を盡くす、是れ支那詩文人の動もすれば「黄塵萬丈」の語をなす所因、敢て日本の如き火山岩國の淨山澄水間に使用すべからざる語、蓋し「野曠天低日欲西。北風吹雪雁行低。黄河古道行人少。一片寒沙没馬蹄」（屠隆）、是れ實に支那北方の景象を描きて餘蘊なきもの、其の南方に到れば、十中の七八は、太古紀、中古紀の岩石に成り、森林は幾千年來濫伐し去りて巨木高樹の幽邃少く（四川省、揚子江の上流を



阿蘇山(肥後) あそ山の中よりいかにせむかき心を中務卿皇子

高千穂峯(日向) くしふるの山にかすめる春の雨元長



宇津の山道(駿河) 露しけき萬の岡部にか  
湯走山(伊豆) 早きは神の  
伊豆小山(千早) 八百萬代伊  
愛鷹山(駿河) 浮雲のあしたか山は  
足柄越(相模) ゆきとくるしみ  
蘆湖(相模) みつしけはこねの山  
箱根山(相模) 眺めゆる箱根の山を  
七條院 忠文男  
蓮生  
道興  
西行  
爲家  
安蘇山(上野) 我蘇はあそ山もとの青藤り  
榛名(上野) 孤列いかほの沼のいか計り  
淺間山(信濃) 信濃なる淺間の山も燃ゆなれば  
信濃山(信濃) 神の渡りてとくるなりけり  
立山(越中) 立山にふりおける雪をとこ夏に  
白山(加賀) しら山に年ふる雪やつもらむ  
春日山(大和) 春日山麓のさとに雪きえて  
三笠山(大和) 君か代は限もあらし三笠山  
大江山(丹波) 大江山生野の道は遠けれど  
手纏山(但馬) 妹かくる絲井の里の手纏山  
因幡山(因幡) 立別れ因幡の山の峯に生る

岩木山(陸奥) 奥つれもなき岩木の峯のいはつし  
岩手山(陸中) 色みえて思ふ心は年もへぬ  
月山(羽前) つきの山麓らぬ影はいつとなく  
信夫山(岩代) はつしくれし  
安達山(岩代) ちちのあたらの山もよるともに  
安積山(岩代) いにしへの我とはしらしあさか山  
日光山(下野) 雲きりもおよはて高き山のはに  
四阿山(上野) かみな月寺雨はあつまやの  
榛名(上野) 披越ぬらむ五月雨の頭  
淺間山(信濃) ぶしのけふりのかひや無らむは  
信濃山(信濃) すはの梅の氷の上の道は路は

船登波 舟木きりけるよのしとれ遠き立  
衣笠内大臣

和山(隱岐) 風のおきの袖山吹しをり  
仙山(隱岐) 風しをれてもの思ふ頭  
後鳥羽院



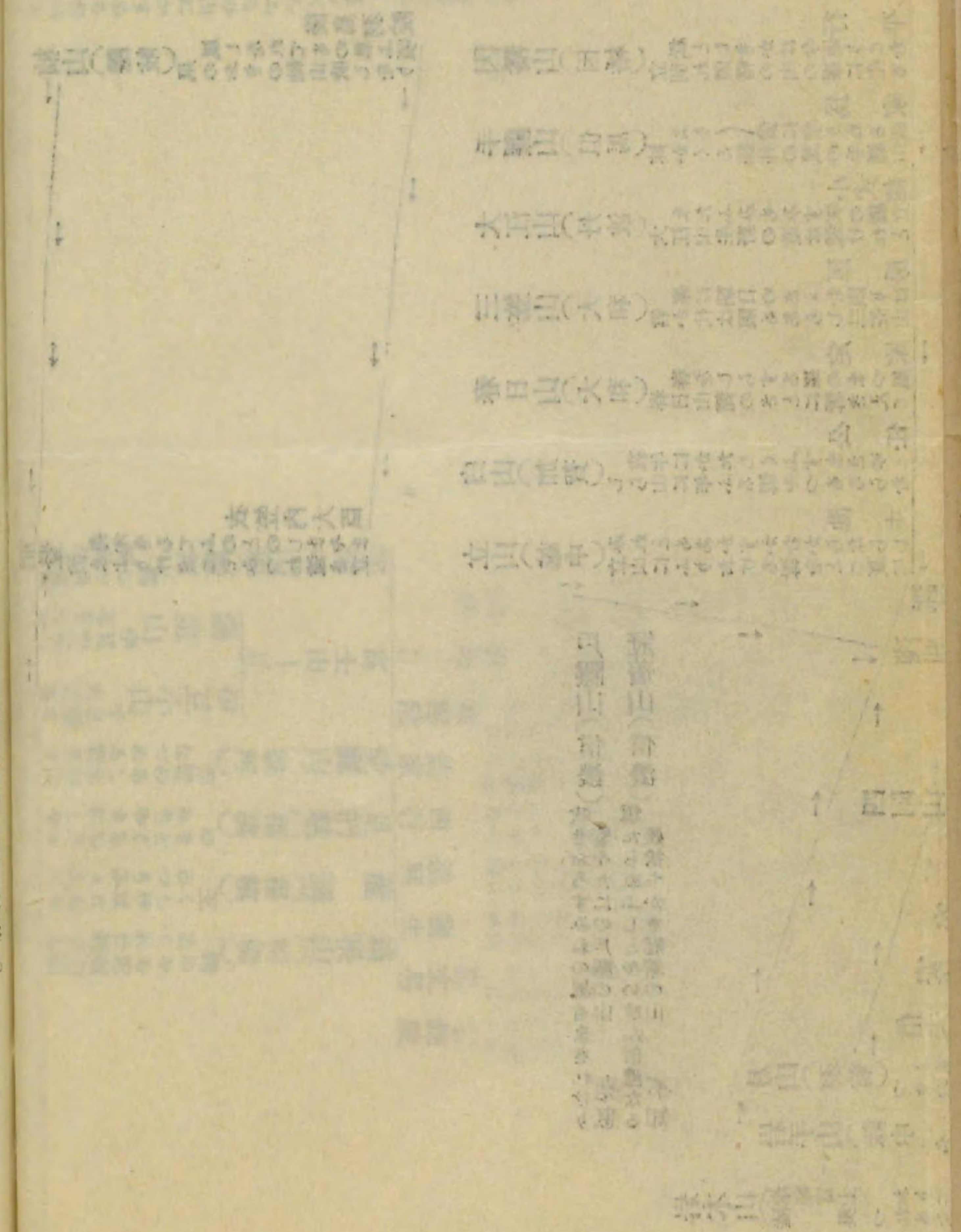
自ら慰むるに過ぎず、固より火山岩國たる日本の景象到る處警拔秀俊なるに似ず。既に然り、日本は火山岩國たり、是を以て古來歌人の好みて吟咏する所、大概は火山岩ならざるなし。

(別表參觀)

然れども日本の歌人は單に「山」として火山岩の山嶽若くは活火山を吟咏し、若くは風懷を之れに寄托せしのみにして、其の火山岩の瑰偉變幻なる所、活火山の雄絶壯絶にして天地間の大觀を極盡する所に到りては、未だ之れを寫さざるなり、詩客、畫師、彫刻家も亦た多く然り、是れ千古の遺憾。

(二) 日本の火山 「名山」の標準

春日潜庵(京師の儒士、日本近代に於ける陽明學の泰斗)言あり、「山峙。川流。雲行。雨施。花之開。葉之落。鳥而飛。魚而潛。浩浩大化。不期而然者。躍如心目。不覺令人消化夙習。夫豈獨點化同志也。我亦可以自點化焉」と。眞然、眞然、能く大極の妙を悟り、胸中に造化を融會する者にあらざるよりは、如何ぞ此言あらんや、而して此間特に人性を點化し、高邁にし、神聖にするもの實に山嶽に過ぐるなく、山嶽中、特に「名山」に在りとす。





所謂「名山」の標準如何、曰く、

一、山の全體は美術的體式と幾何的體式とを相調合安排せるもの。

二、然れども一山中の境遇は變化多々にして且つ不規律なるもの。

是れなりと信ず。想ふ全體の美術的體式と幾何的體式とを相調合安排すとは、夫の美妙なる圓錐形を聳起せる火山正に是れにあらずや、而して火山中には槎牙拮据たる岩石あり、焰煙騰沸せる新火口あり、石壁峭立せる舊火口あり、副火口あり、硫氣噴孔あり、洞穴あり、火口湖あり、瀝水湖あり、草樹の蒼翠秀潤せるあり、境遇の變化多々にして且つ不規律なるもの實に火山に過ぐるなしとす。一百年前橋南谿、「名山論」一篇を著して曰く、

余幼より山水を好み他邦の人に逢へば必名山大川を問ふに皆各其國／＼の山川を自贊して天下第一といふ甚た信し難し既に天下をめぐりて公心を以て是を論するに（中略）山の姿峨々として嶮岨畫のことくなるは越中立山の劍峯に勝れるものなし立山は登る事十八里彼國の人は富士よりも高しと云然れとも越中に入りて初て立山を望むに甚高きを覺えず數月見て漸々  
に高きを知る是は連峯參差たるゆゑく最高く聳えたがい相争ふ程なる峯五ツあり劍峯も其一之其外にも峯／＼甚多く連り波濤のごとく連り皆立山なり此ゆゑにたとへば都の北山を望むがごとし遠くより見るに何れを鞍馬山とも稱しかたきかことし是をみても人多能なる者は

反て其名を失ふを慎むへし白山は只一峯にて根張も大に殊に雪四時ありて白玉を削れるがごとく見るより目覺る心地す又山の姿のよきは鳥海山月山岩城山岩鷲山彦山海門嶽なり皆甚富士に似て一峯秀出畫かけるかごとし又景色無双なるは薩摩の櫻島山之蒼海の眞中に只一ツ離れて獨立し最嶮峻なるに日光映すれば山の色紫に見へ絶頂より白雲を蒸かごとく煙り常に立登るたとへは青疊の上に香爐を置たるかごとし大抵海内の名山是等に留るへし其山内の奇絶は又別に書あり今此所には仰望む所を論するのみ

と。南谿の所謂「名山」たる立山、白山、鳥海山、月山、岩城山、岩鷲山、彦山、海門嶽、櫻島山は、齊しく是れ火山に係る、此等山嶽の何にが故に「名山」なるやの理に到りては彼れ未だ深く推究せず、且つ其の悉く火山たるを悟了せざりしと雖も、實際上目撃の結果、此等山嶽を以て「名山」なりと判定し、而して今日其の悉く火山たるを知らば、眼識古今眞に期せずして相會したるもの。要するに「名山」とは火山の別稱なり。

想ふ火山及び火山岩は天地間の大觀を極盡するものなり、人間に在りて自然の大活力を認識せんと欲せば、之れを看破するに過ぐるなしとす、請ふ往きて火山に登臨せんか。

「名山」中の最「名山」を

## (三) 富士山

となす。豈に一辭一句だに自美自讃を要せんや、聽け此山に對する世界の嘆聲を。

「富士」は蝦夷語「火ノ女主」より由來す、以て太古蝦夷人の此山を崇拜し且つ愛慕せしを知る。

日本國。亦名倭國(中略)。東北千餘里。有山。名富士。亦名蓬萊。其山峻。三面是海。一朶上聳。頂有火煙。日中上有諸寶流下。夜即却上。常聞音樂(下略)。

後周 (義楚六帖)

芙蓉獨立臥清虛。始信大東天帝居。堪競俊才高復潔。氣調來迫奈君如。

朝鮮國文學 秋月

人とはいいかゝたらん言の葉も

琉球 讀谷山王子

およはぬ富士の雪のあけほの

荷蘭 博士ケムフェル

“Mons excelsus et singularis.”

“Not only do we find a vast number of native books describing this mountain, but every book treating of Japan which has been published in foreign countries, always finds occasion to mention the ‘peerless Fuji.’ In consequence of its height, the symmetrical curvature of its slopes, and its solitary grandeur, Fuji has become one of the most famous mountains of the world. Not only is this mountain an object of admiration to the European, but it obtains an equal if not greater share of admiration from the Japanese.” 英國 博士ミルン

富士山に對する世界の嘆聲此の如し、豈に一辭一句だに自美自讃を要せんや、然れども理學上其の優絶なる所は竟に説かざるべからず、蓋し理學上富士山の優絶なる所は、其の麓底の平面より峯頂に到るまで、同一距離の縦坐標を以て山を幾個に横切し、一對の縦坐標の加を其差を以て除するに常に不變數の商を得、宛として對數曲線の定則を表はすに在り。此の規律の齊整に加ふるに、至妙なる美術的體式を以てす、宜べなり

鍾得秀靈氣。築成東海灣。天工盡于此。不復出名山。

石野雲嶺

の句や、眞に「天工盡于此」、日本人の富士山を誇揚し、彫刻に、繪畫に、詩文に、俳諧に、之れを以て「名山」の宗と仰視するもの偶爾にあらず。富士實は全世界「名山」の標準。

風懷の高士、彫刻家、畫師、詞客、文人にして、自然の大活力を認識し、卓落雄拔の心血を寄

托せんと欲せば、主として火山若くは熄火山に登臨するに在り、乃ち全國の火山、熄火山を一々  
縷述せんか。

(四) 千島列島の火山

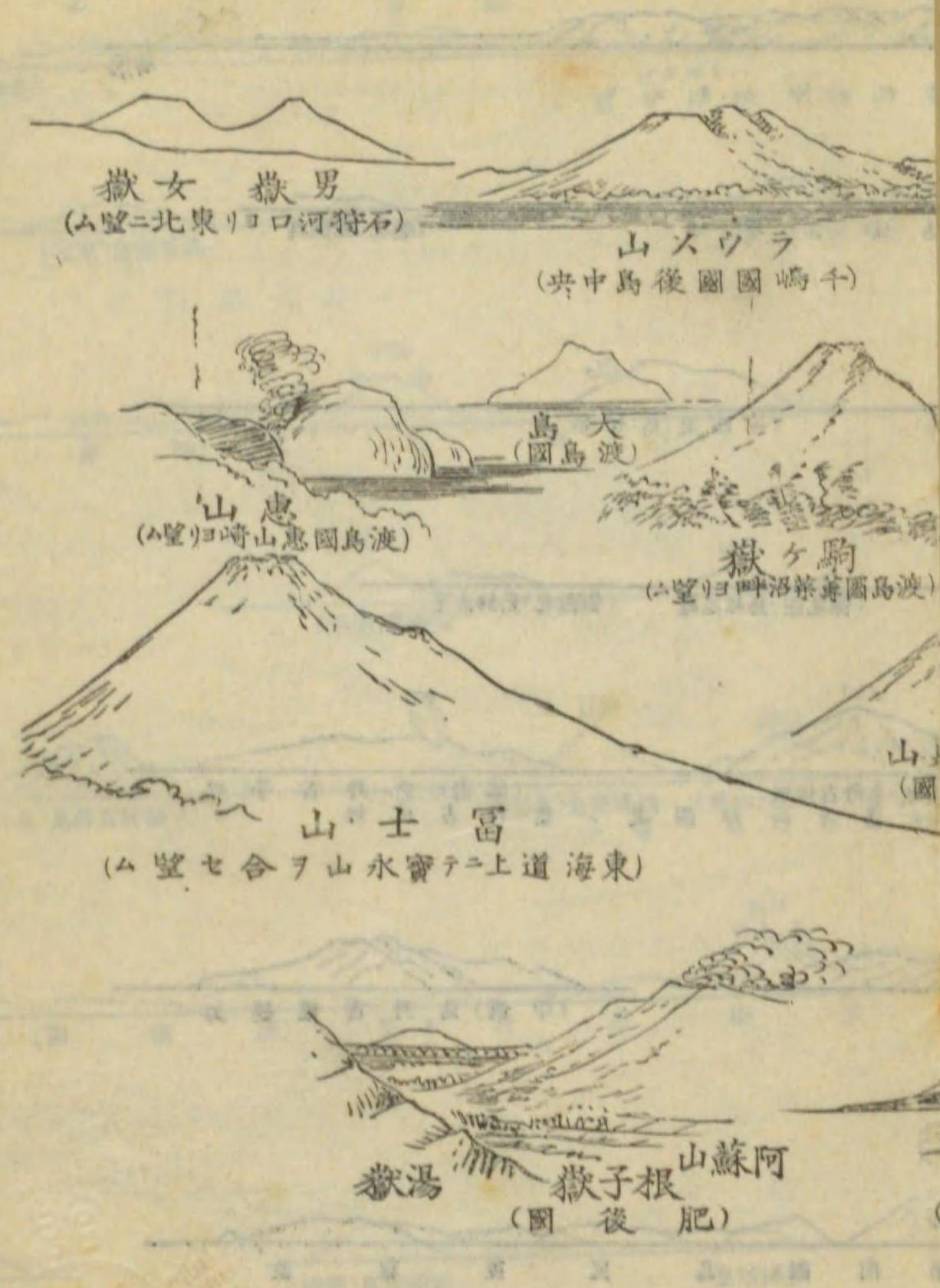
后土の大活力、其の胸腹より發し、爆然として壁き起したるものを千島列島となす、宜べなり  
其の景象の到る處磊落豪健なることや。試みに舟を此間に行らんか、無數の小富士山は我帆を逐  
ひ來り、近山は剝るが如く、遠山は箭の立つに似、人をして恍乎送迎に違あらざらしむ、沿岸亦  
た火山岩の峭壁百尺、波浪疾く馳せ疾く撃ち、天雪は浪雪と相交り、眞に造化の偉觀を極む。蓋  
し日本風景の粹は火山及び火山岩に在り、而して日本の火山及び火山岩の粹は千島列島に在り。  
(千島及び北海道の火山のみは尺度を用ふ)

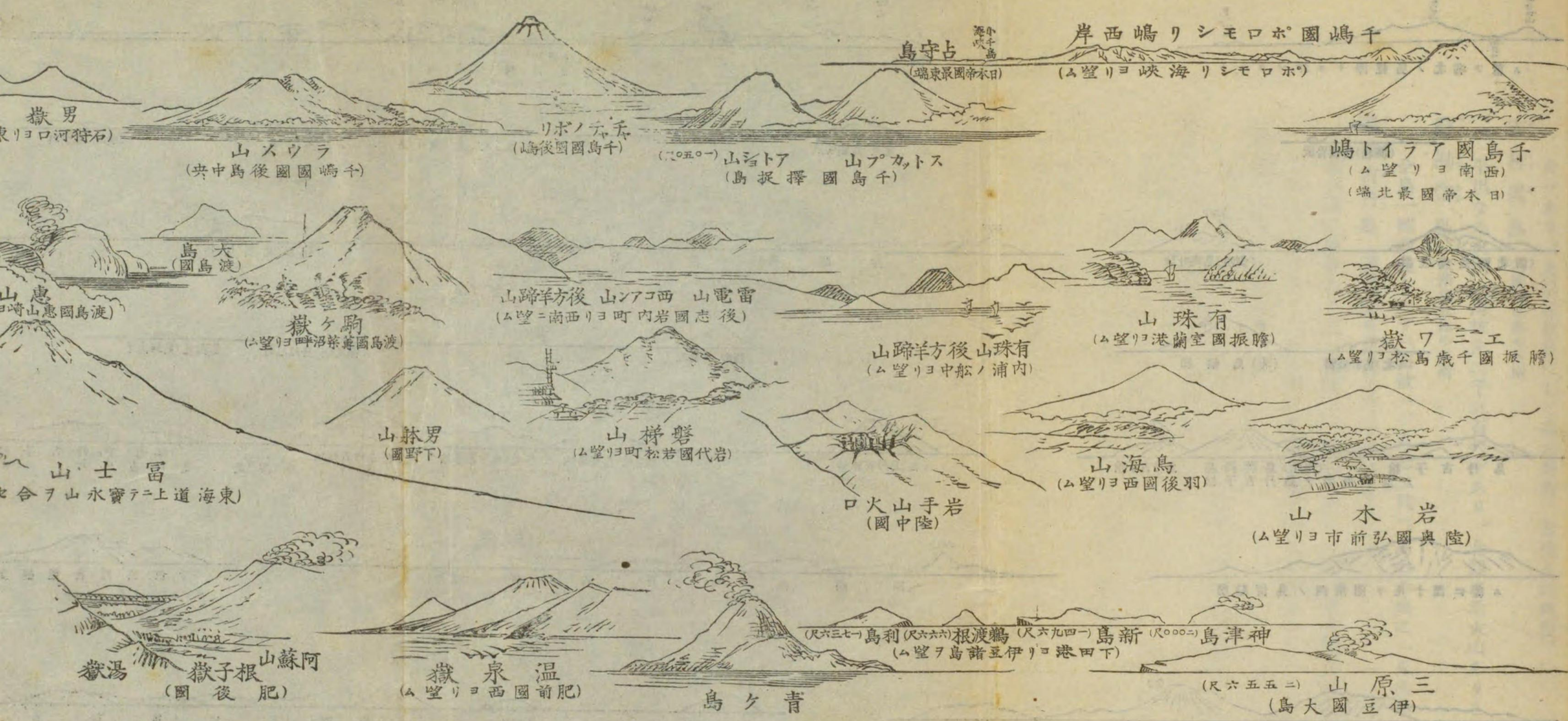
阿頼度島 千島列島の極北端海拔六、七二〇尺

島は一圓錐體の兀然海上より聳立するに似たり、其形規律甚だ齊整、其の秀絶なる千  
島列島に冠たり、我皇版圖の極北に富士山を代表す。

波羅茂尻島 帝國の極東たる占守の南に在る大島

北端に活火山アシリマツヤ(海拔凡四千尺)あり。西南端にフス山(海拔凡六千九百





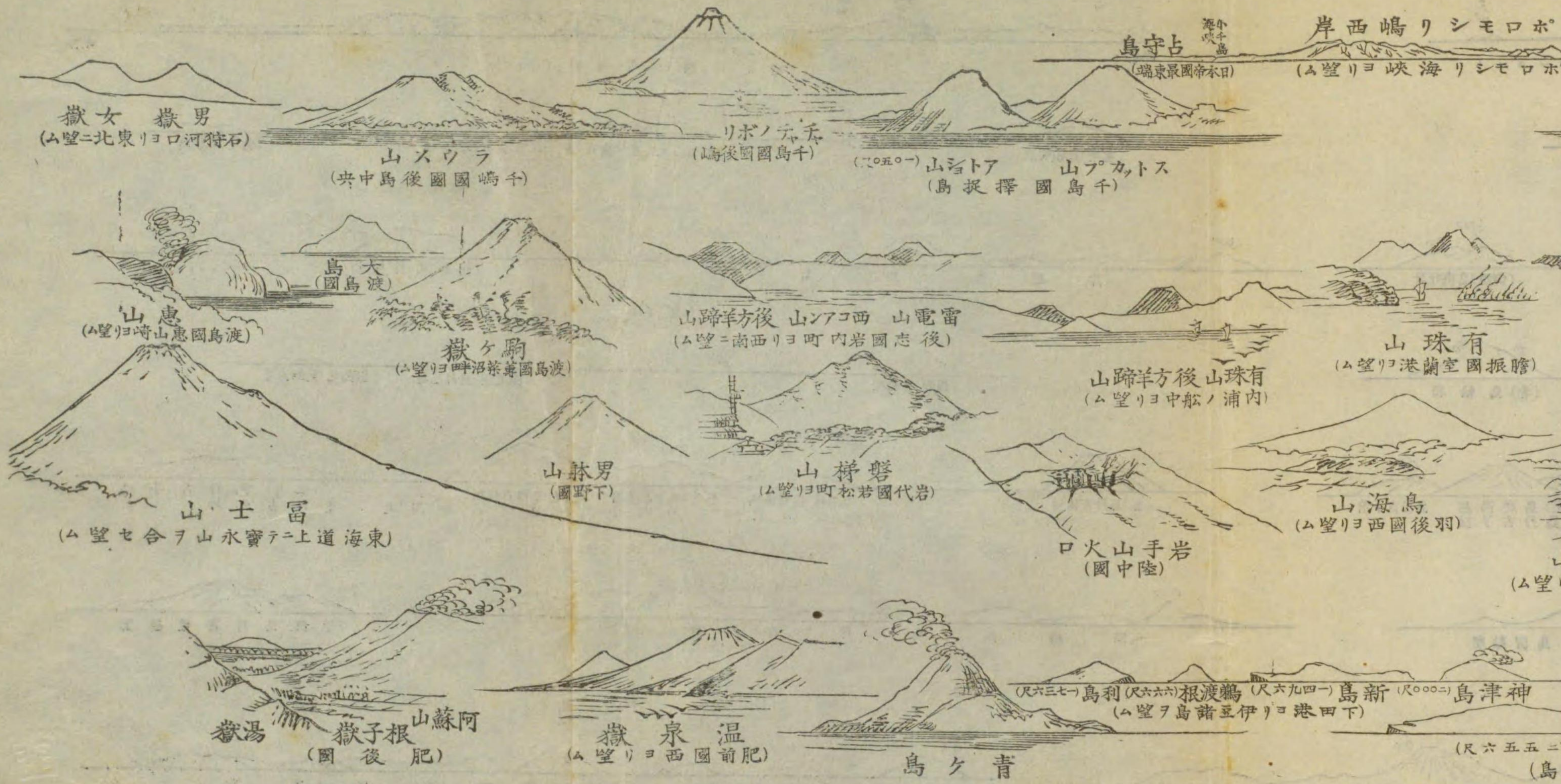
山 火 ノ 國 本 日

(ル到ニ南西リヨ北東)

(りな山火な皆は山名)

(シベス照參ト間ル到ニ頁八十五百第リヨ頁十九第)

阿頼度島 千島列島の極北端海拔六、七二〇尺  
 島は一圓錐體の兀然海上より聳立するに似たり、其形規律甚だ齊整、其の秀絶なる千島列島に冠たり、我皇版圖の極北に富士山を代表す。  
 波羅茂尻島 帝國の極東たる占守の南に在る大島  
 北端に活火山アシリマツキ(海拔凡四千尺)あり。西南端にフス山(海拔凡六千九百

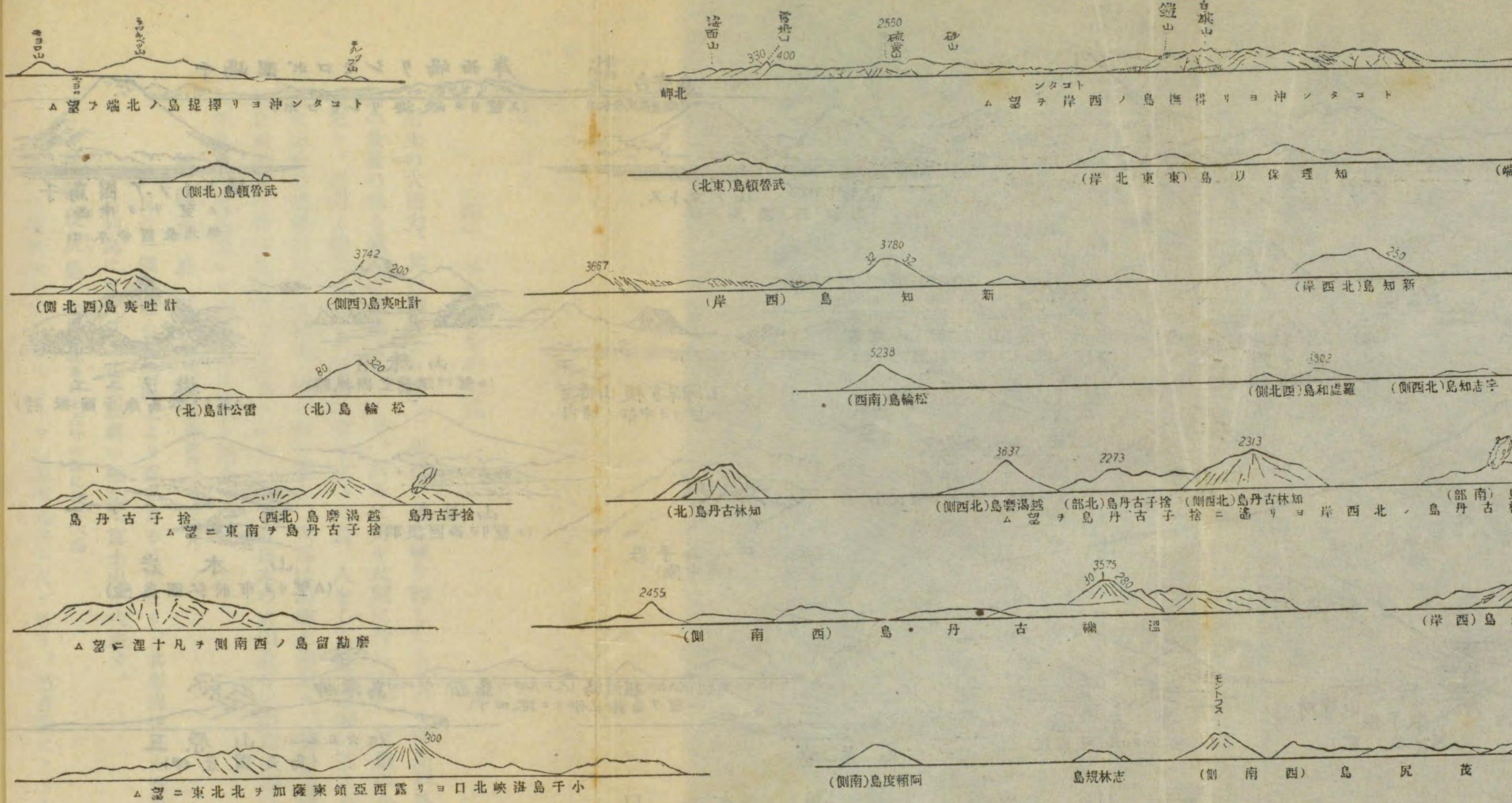


山 火 ノ 國 本 日

(ル 到 ニ 南 西 リ ヨ 北 東)

(り な 山 火 な 皆 は 山 名)

(シ ベ ス 照 參 ト 間 ル 到 ニ 頁 八 十 五 百 第 リ ヨ 頁 十 九 第)



島 列 島 千

(ル到ニ東北リヨ南西)

(シベス照參ト間ル到ニ頁三十九第リヨ頁十九第)

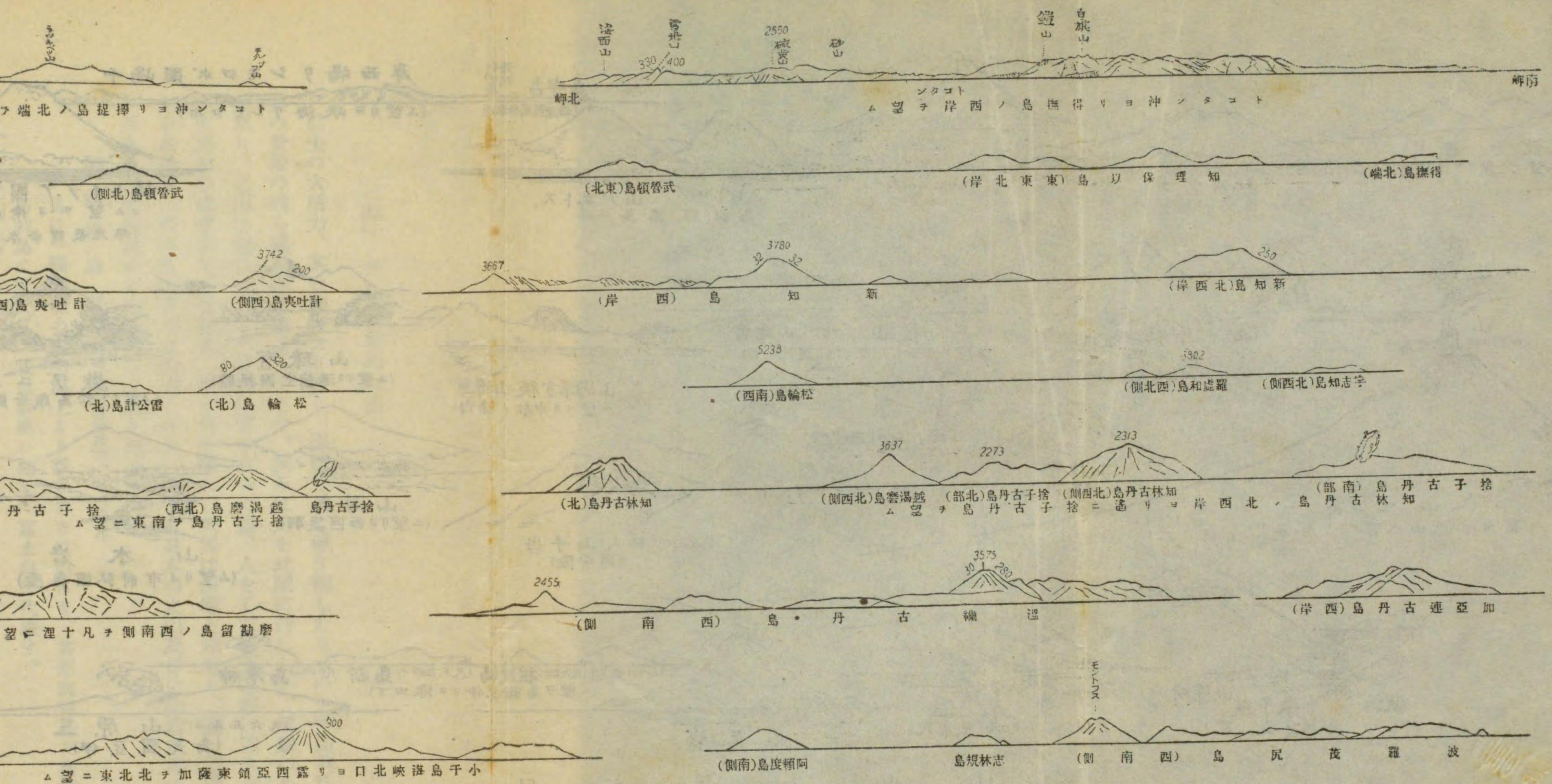
(ル據ニ所ルス影撮地實ノ君郎次莊山横士學農)

尺)あり、其形圓錐狀にして甚だ齊整。其他火山四個。

志林規島 平坦なる火山(海拔凡二千五百尺)あり。北端に活火山ありと云へり。

磨勘留島 波羅茂尻島の西南 全島一圓錐體をなす(海拔一、八七二尺)。島の中央に一火山ありと。

温禰古丹島 波羅茂尻の西南海上凡二十哩に在り 北西端に圓錐的火山(海拔二、四五五尺)あり。東南端に富士山狀の火山(海拔三、



千島列島

(ル到ニ東北リヨ南西)

(シベス照參ト間ル到ニ頁三十九第リヨ頁十九第)

(ル據ニ所ルス影撮地實ノ君郎次莊山横士學農)

越<sup>エ</sup> 渴<sup>カ</sup> 磨<sup>マ</sup> 島 捨<sup>シ</sup>子<sup>シ</sup>古<sup>コ</sup>丹<sup>タン</sup>島 加<sup>カ</sup>亞<sup>ア</sup>連<sup>レン</sup>古<sup>コ</sup>丹<sup>タン</sup>島 溫<sup>オン</sup>禰<sup>ネ</sup>古<sup>コ</sup>丹<sup>タン</sup>島 志<sup>シ</sup>林<sup>リン</sup>規<sup>キ</sup>島 磨<sup>マ</sup>勘<sup>カン</sup>留<sup>ル</sup>島 全島宛として富士山狀の火山（海拔三、六三九尺）をなし山頂尖立す。

越<sup>エ</sup> 渴<sup>カ</sup> 磨<sup>マ</sup> 島 捨<sup>シ</sup>子<sup>シ</sup>古<sup>コ</sup>丹<sup>タン</sup>島 加<sup>カ</sup>亞<sup>ア</sup>連<sup>レン</sup>古<sup>コ</sup>丹<sup>タン</sup>島 溫<sup>オン</sup>禰<sup>ネ</sup>古<sup>コ</sup>丹<sup>タン</sup>島 志<sup>シ</sup>林<sup>リン</sup>規<sup>キ</sup>島 磨<sup>マ</sup>勘<sup>カン</sup>留<sup>ル</sup>島 全島宛として富士山狀の火山（海拔三、六三九尺）をなし山頂尖立す。

北端に富士山狀の活火山（海拔二、二七三尺）あり。西南端に活火山（海拔凡二千七百五十尺）あり、白煙常に蒸騰す。二山の間土地平坦。

捨<sup>シ</sup>子<sup>シ</sup>古<sup>コ</sup>丹<sup>タン</sup>島 加<sup>カ</sup>亞<sup>ア</sup>連<sup>レン</sup>古<sup>コ</sup>丹<sup>タン</sup>島 溫<sup>オン</sup>禰<sup>ネ</sup>古<sup>コ</sup>丹<sup>タン</sup>島 志<sup>シ</sup>林<sup>リン</sup>規<sup>キ</sup>島 磨<sup>マ</sup>勘<sup>カン</sup>留<sup>ル</sup>島 全島宛として富士山狀の火山（海拔三、六三九尺）をなし山頂尖立す。

全島不規律なる火山狀を現す。火山の大湖一個小湖二個ありと云ふ。

加<sup>カ</sup>亞<sup>ア</sup>連<sup>レン</sup>古<sup>コ</sup>丹<sup>タン</sup>島 溫<sup>オン</sup>禰<sup>ネ</sup>古<sup>コ</sup>丹<sup>タン</sup>島 志<sup>シ</sup>林<sup>リン</sup>規<sup>キ</sup>島 磨<sup>マ</sup>勘<sup>カン</sup>留<sup>ル</sup>島 全島宛として富士山狀の火山（海拔三、六三九尺）をなし山頂尖立す。

五七五尺）あり。二山の間四個の圓錐狀なる火山あり。

北西端に圓錐的火山（海拔二、四五五尺）あり。東南端に富士山狀の火山（海拔三、

溫<sup>オン</sup>禰<sup>ネ</sup>古<sup>コ</sup>丹<sup>タン</sup>島 波羅茂尻の西南海上凡二十哩に在り

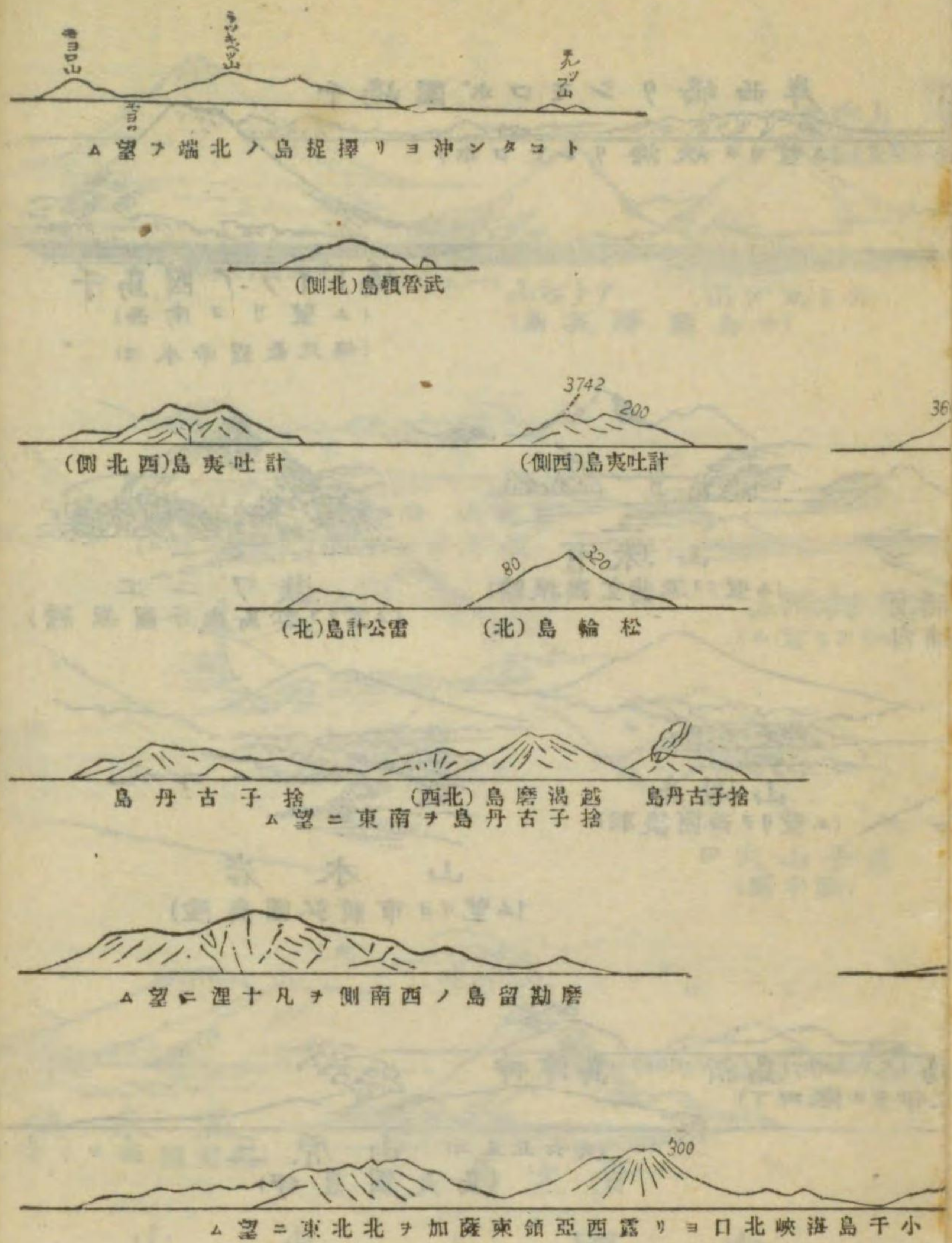
全島一圓錐體をなす（海拔一、八七二尺）。島の中央に一火山ありと。

磨<sup>マ</sup>勘<sup>カン</sup>留<sup>ル</sup>島 波羅茂尻島の西南

平坦なる火山（海拔凡二千五百尺）あり。北端に活火山ありと云へり。

志<sup>シ</sup>林<sup>リン</sup>規<sup>キ</sup>島 波羅茂尻島の西南

尺）あり、其形圓錐狀にして甚だ齊整。其他火山四個。





知林古丹島 越湯磨島の西西北

全島圓錐體なり、頂上(海拔二、三一八尺)は二重富士山状をなせり。

雷公計島 捨子古丹島の西南

海上より突起せる圓錐體(海拔一、三四三尺)、或は曰ふ活火山なりと。

松輪島 雷公計島の西南西

全島秀絶なる圓錐體をなす、頂上(海拔五、二三八尺)は少く缺損す。

羅處和島 松輪の西南十九哩

北南各一個の圓錐山あり。南山(海拔三、〇八二尺)は北山より高且大。

宇志知島 羅處和の西南十哩

北南二小島あり、共に火山的。南島に温泉あり、硫氣盛んに飛昇す。

計吐夷島 宇志知二島の西南

此島(海拔三、九四二尺)の中央なる山頂より蒸氣を噴出すと云へり。

新知島 計吐夷島の西南海上凡十八哩に在り

北端に鋭尖なる圓錐山(海拔三、六六三尺)あり。中央にブレグオスト峯(海拔三、七八〇尺)あり。南端にも一火山あり。其他火山三個あり。

知理保以島 新知と得撫との間

北南二島より成る。北島に二圓錐狀活火山あり。南島は死火山なり。

得撫島 新知島の西南五十六哩の海峡を距つ

北端に平低なる圓錐山あり、其北なる摺鉢山(海拔凡四千尺)は鋭尖にして頻に硫氣を噴く。中央に雪光山あり、缺頂圓錐體にして秀絶。

得撫島 得撫の西南に在り、長凡四十三里幅最廣五里周回凡二百八十里、千島三十二島中最大なる者

モヨロ(海拔三、四七五尺)、富士状をなし二火口あり、半月形の湖あり周回二里。チルップ、紗那の西北に立つ。シャシヨウシ、紗那の東に聳ゆ。ヘチラヌップ、留別の東南に秀ぶ。單冠(表畫にはストカップと記す)眞個の富士。鶏冠(表畫にはアトシヨと記す)、(海拔凡四千五十尺)二重富士状をなし秀絶。ペレタラベツ、島の最南端に在り、硫氣を噴く。

後島 千島列島中の最南に在り。北海道本地と八哩の海峡を以て距つ

チャチャノボリ(海拔五、〇五八尺)、島の北端に在り、富士の上に更に小富士を載するが如し。ルルイ圓錐山。ラウス(海拔凡三千尺)、島の中央に兀立す。タチウス(海拔凡千五百尺)、其北に二湖あり、一湖(ポントーと云ふ)より硫黄の熱湯を噴く、共

に舊火口なるべし。

(五) 北海道本島の火山

北海道本島、亦た火山多々。之れを大別して三區分となす、(一)千島列島より連続せるもの、(二)後方羊蹄山麓に屬するもの、(三)渡島山系の東脈。

(一) 千島列島より連続せるもの

硫黄山 知床海角の中央邊

良牛山 海拔凡千五百尺、北側の側火口には熱湯沸騰し硫黄の蒸氣を噴出す。知床海角の中央邊

摩周、又マシユイ 根室國西別河の源

マシユイ嶽頂の湖は即ち舊火口なり、風光絶佳。湖畔に新火口あり。海拔凡五千尺、硫黄山の南隣に在り、缺損したる火口様のものあり。

アトサノボリ 釧路國釧路湖の東

阿寒嶽 海拔凡千六百五十尺、硫黄坑山として特に著名たり、噴煙甚だ壯大。釧路國阿寒湖の東

阿寒嶽 釧路國阿寒湖の東



嶽寒阿男 點高最ノ嶽寒阿女

(士富寒阿) (ム望ヲ部一ノ内口火リヨ壁口火)

(す産もに峰高の州本) さくまこ (品稀の界世全) ますふんかあめ

*Dicontra pusilla*, Sieb et Zucc. *Arenaria merckioides*, Maxim.

(物植ノ中口火嶽寒阿女國路釧)

樽タル

前マイ

山

瞻振國支笏湖東南惠庭嶽と相對せり

海拔二千八百三十尺、千歲村より川に沿ひ原人時代の山林を過ぎり行くこと七里、火口壁あり此中の新火口より硫氣と蒸氣とを噴出す。

惠エ

庭ニ

嶽

瞻振國支笏湖の北に峭然兀立す。札幌より南に望む

海拔凡三千八百尺、峭然たる火口あり、山頂に鋭尖なる岩塊あり。札幌農學校寄宿舎南室の玻璃窓に映發するもの實に此嶽、想ひ起す、十年前此の嶽色の几前に落ちたることを、知らず嶽色恙なきや否や。

(二) 後方羊蹄山彙に屬するもの

此の山彙に噴煙せる火山數個あり(表圖中の男嶽女嶽も此間に在り)

オフタテシケ 十勝、石狩の境界

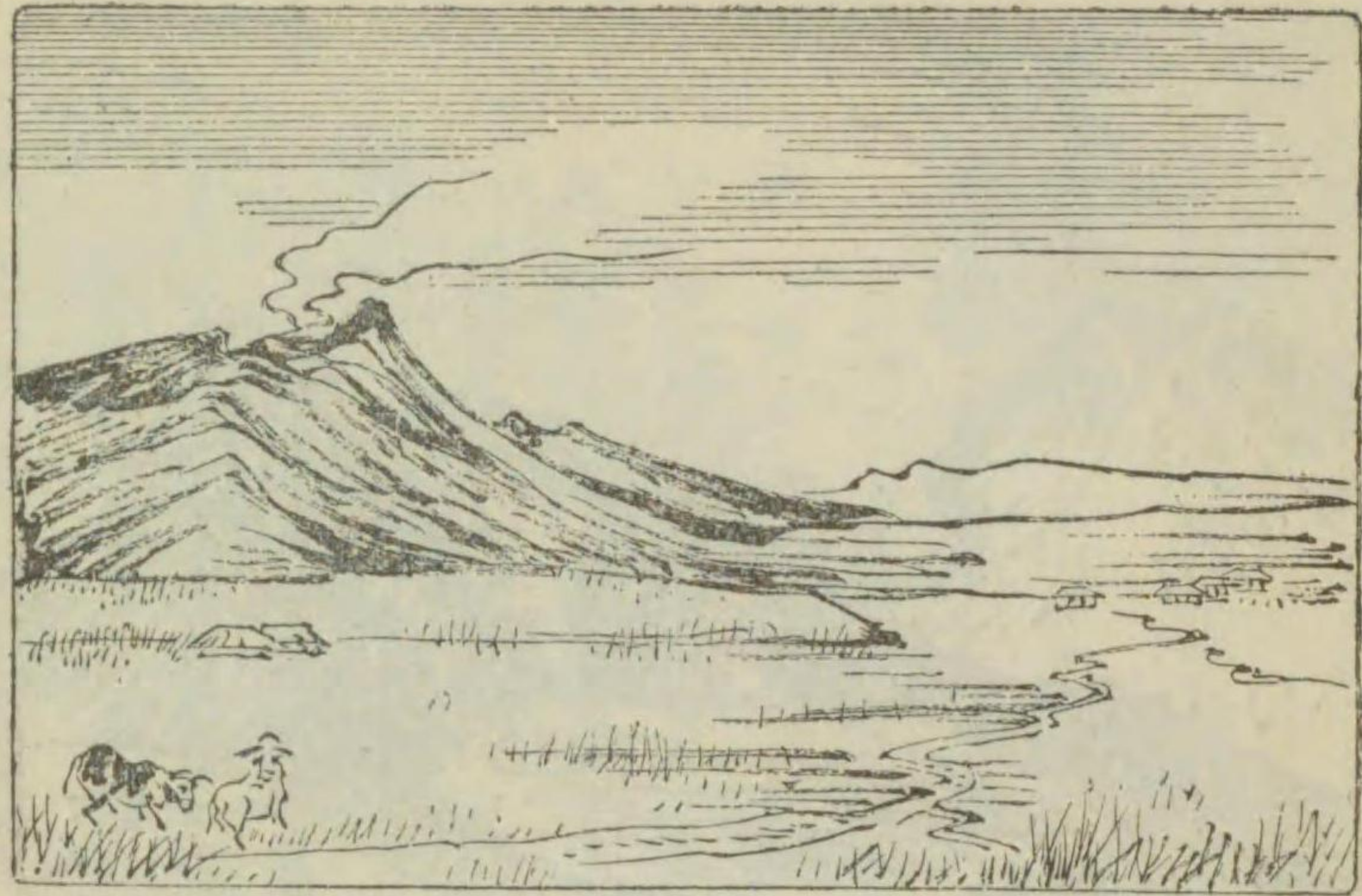
海拔凡七千尺、世の所謂石狩嶽なるもの、西南側より煙氣を噴出す。

ヌタフカウシベ 石狩國石狩河の源

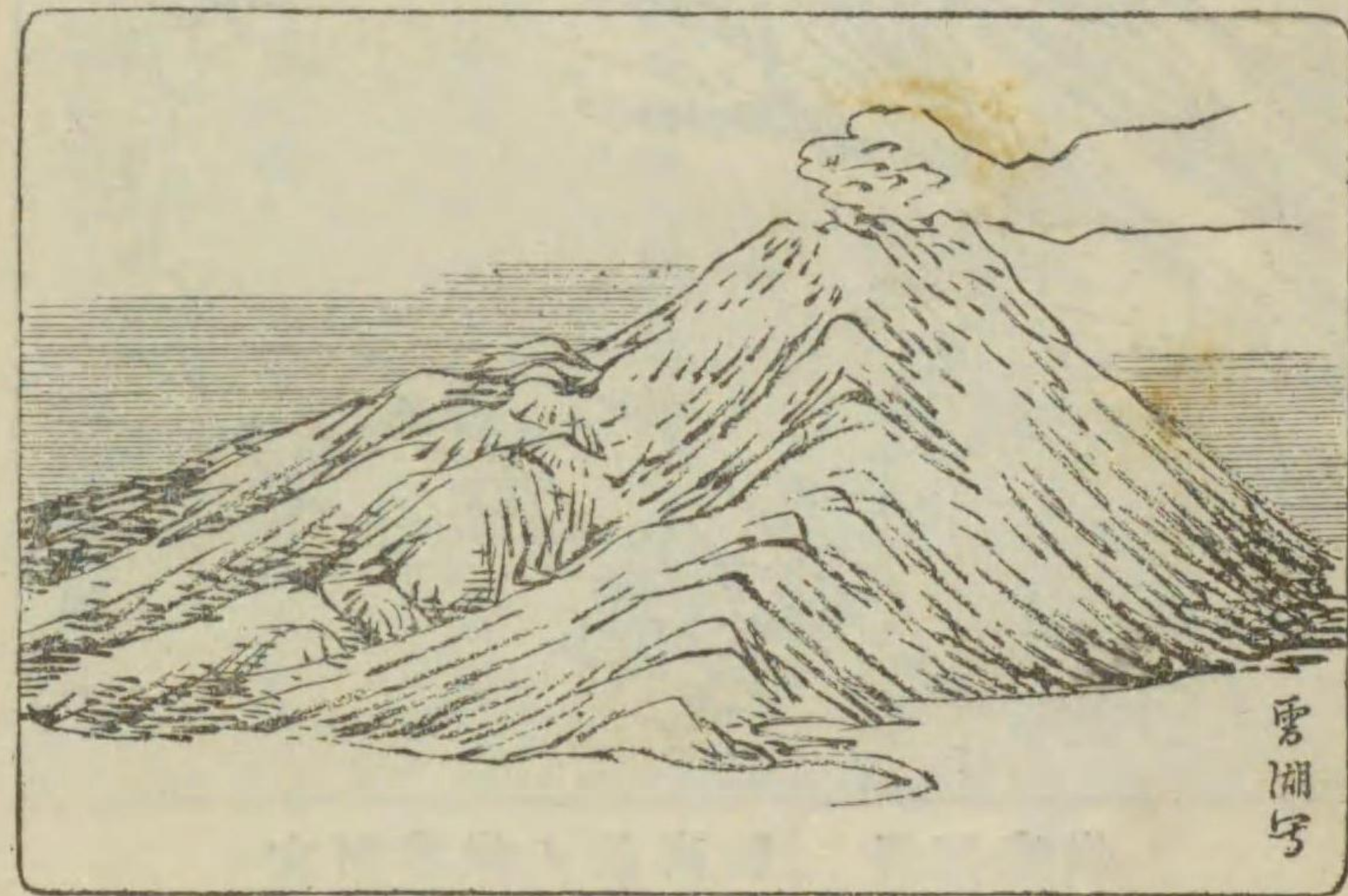
海拔凡四千七百九十尺、頂に火口壁、熱湯池あり、四時硫煙を噴く。

女阿寒嶽 釧路國阿寒湖西南

海拔凡四千八百尺、秀絶なる圓錐體を聳立す、山頂の眺望眞に雄拔。



山 前 樽  
(ム望ニ北西リヨ原曠牧小苔國振瞻)



山 間 淺  
(ム望ニ北リヨ原分追國濃信)  
(リナ詳ニ頁十二百第)

雪湖号

登<sup>ノボリ</sup> 別<sup>ベツ</sup> 瞻振國登別河上流

間歇泉の池（火口）あり。數多の熱湯孔（溫泉場）あり。硫氣噴孔あり。

有<sup>ウ</sup> 珠<sup>スズ</sup> 嶽 瞻振國洞爺湖の南

海拔凡千八百六十八尺、二個所より噴煙す、登臨せば風光殊に跌宕。

マクカリヌプリ 瞻振の西北に在り

海拔六千四百尺、誤稱後方羊蹄山、火口あり、秀絶なる富士山〔狀？〕をなす。

硫<sup>イ</sup> 黄<sup>フホ</sup> 山<sup>ノボリ</sup> 後志、石狩の境界

海拔三、三、七四尺、數個の火口ありと云へり、岩内市街より東南五里。

(三) 渡島山系の東脈

駒<sup>ケ</sup> 嶽 渡島國函館市街より峠下、シコノツペを經、嶽麓の燒山村に到る八里二十三町、畫師文人は必らず登臨すべし

海拔三千八百六十尺、函館の正北に在り、函館を出で、五稜郭、桔梗野牧場、七重試験場を歴覽し、峠下村を經、蕁菜湖畔の一亭に夕陽の湖水に倒射するを看、此亭に一睡し、半夜疾く起ち、拂曉駒ヶ嶽の火口壁に登らんか、曙色噴火灣より來り、蕁菜の湖光、函館の海色、之れに映發し、眞個一幅の活畫圖、況んや脚底火山岩の磊落雄渾なるを添ふるをや、文人畫師若くは風懷の高士は登臨すること最も可。

惠<sup>エ</sup> 山<sup>ヤマ</sup> 函館より湯ノ川、小安、戸井、尻岸内、ニダ内を經、山麓のド、ホツケまで十五里廿三町

海拔凡千九百十尺、函館を發し一里二十九町にして湯ノ川溫泉場あり、行樂の處、湯ノ川を去り海岸に沿ふこと十四里、山麓のド、ホツケに達す、其間懸崖百尺、跌宕壯絶、時に飛瀑の海中に直瀉するあるを看る、ド、ホツケより登ること一時間にして山頂に達す、火口壁あり、壁の上部は純黄色をなし、常に皎白濃密なる硫氣を噴出す。

征帆一たび噴火灣に入らんか、左に惠山、駒ヶ嶽あり、前に有珠、マクカリヌプリ（後方羊蹄山、硫黄山あり、右に登別、樽前（玳瑁山）、惠庭あり、八火山の秀色は歴々として雙眸に落つ、全世界中、復た此の雄絶壯絶の觀あらんや、宜べなり「噴火灣」の稱。

鴻爪雪泥幾往還。征帆復過火山灣。十年舊識孱顏好。煙霽羊蹄山又山。  
胡笳聲歇水西東。夾岸棋楠看欲空。剝木舟遙人既去。有珠山上月如弓。

矧 川 生

(六) 本州東北の火山

本州東北の火山に三主脈あり、(一)中央火山脈、(二)西岸火山脈、(三)寒風山火山脈。

(一) 中央火山脈

是れ北海道火山脈より、津軽海峡を經、陸奥國斗南半島の燒山、恐山に連り、延縁して舊奥羽の境界となり、太平洋に注入する川河と日本海に注入する川河の分水脊となり、本州東北部の主軸をなし、南に下りて兩毛の間に入り、竟に富士火山脈に合するものとす、北方豪健の象を形成するもの實に是れ。

燒山 陸奥下北郡の西部

齊整せる圓錐體をなす、第三火口は缺損す、岩質は大概輝石安山石。

恐山 陸奥下北郡の中部

海拔凡千米突、硫氣を噴く、舊火口の大湖（恐山湖）をなすものあり。

八甲田山 陸奥東津輕上北郡

海拔一、八五二米突、東津輕郡より上北郡に延縁す、火口三個あり。

赤倉山 陸奥東津輕上北郡

十和田湖の北岸に秀起す、第三紀層高原より突立する熄火山となす。

十和田湖 陸奥上北郡より陸中鹿角郡に開展す

海拔凡四百五十米突、湖中の「内海」は舊火口にして其岸は峭壁に水殊に深く、晶明

陸の如し、山影湖心に落ち、水色山光明媚一幅の畫圖。

戸來嶽 陸奥上北三戸二郡

海拔一、二一七米突、十和田湖の東岸に兀立し上北三戸二郡に跨る。

名久井嶽 陸奥三戸郡の南部

海拔六五九米突、三戸町の東に在りて馬淵川の南岸に孤高天を衝く。

七時雨山 陸奥、陸中の境界

海拔一、一〇六米突、馬淵川上流の南に當り兀然たるもの是れなり。

森吉山 羽後北秋田郡東南阿仁銀山より三里

阿仁銀山の東に聳ゆ、奥嶽（海拔一、四五九米突）は圓錐狀をなす。前嶽（海拔一、

二四九米突）は舊火口の西壁をなす、嶽上の眺望絶佳。

燒山

鬼ヶ城山

サカビ山

元山

羽後國北秋田郡同仙北郡と陸中國鹿角郡との間に聳屈せる山塊、森吉山の東に綿互せる活火山彙たり

西の方森吉山より連り東して岩手火山彙に合し中央火山脈の北部膨脹區域をなす。燒山山頂には南北凡七八町東西凡五六町なる楕圓形の火口あり。内に一沼池あり、熱水

を盛り頻りに硫氣と水蒸氣とを噴出す。鬼ヶ城山は焼山の北に在り。一小火口あり、明治二十年、此口より噴出せしことあり。サカビ山、元山は焼山の西に在り、硫氣噴孔あり、硫氣、水蒸氣を噴出す。此の所在には硫黄坑甚だ多し。

岩

手

山

陸中、北岩手郡南岩手郡に跨る、盛岡市より山麓まで七里、海拔二、一三六米突

早天盛岡市を發せば（二人曳人力車）午餐時岩手山麓なる大釋硫黄温泉に達す、夫れより十五町網張温泉に到り、此所より山路峻峻、山は三區域に別れ、一山（甲）の上に一山（乙）あり其又上に一山（丙）あり、皆な火口の峭壁たり、甲に二小湖あり、乙に宿泊の用に供する小屋あり、山頂に岩手山神社あり、健脚の者は黄昏大釋に返へり得。

駒

ヶ

嶽

陸中、羽後の境界、海拔一、五五九米突

陸中南岩手郡國見温泉の北一里に在り、ヲナメ嶽、大燒砂、長根は火口の牆壁にして、男嶽、女嶽は壁中の二圓錐山たり、麓に温泉多し。

酢

川

嶽

陸中、陸前、羽後

陸中、陸前、羽後三國の間に跨る、齊整せる圓錐山にして火口あり。

吹

上

間

歇泉

陸前國玉造郡鬼首村字吹上ヶ荒雄嶽の麓に在る二温泉

火山凝灰岩の間左右二口より噴出す、明治八年の震災前迄は噴出一晝夜に十二回其高サ三十尺なりしも、現今は度數十回最高二一六尺に減ず、左口より噴出したれば右口より噴出し雷鳴の如き響をなす。

荒

神

山

陸前中部と羽前中部との境界に在り

荒神山は北に聳ゆ。船嶽は荒神山の南に秀づ。共に火口あり。二山の北西に當り一火山ありと。仙臺市より此等山嶽を西北に望むを得。

泉

嶽

陸前宮城郡の中部

海拔一、三七七米突、圓錐體をなし、火口あり、仙臺より西北に望む。

藏

王

嶽

陸前、羽前の境界青根温泉場より西

圓錐體をなし、火口あり、頂にミツワケ神社あり、阿武隈河系を下瞰し、金華山、太平洋を望む、仙臺市より西南に當り雪を戴くものは是れ。

虚

空

藏

羽前山形市の西南

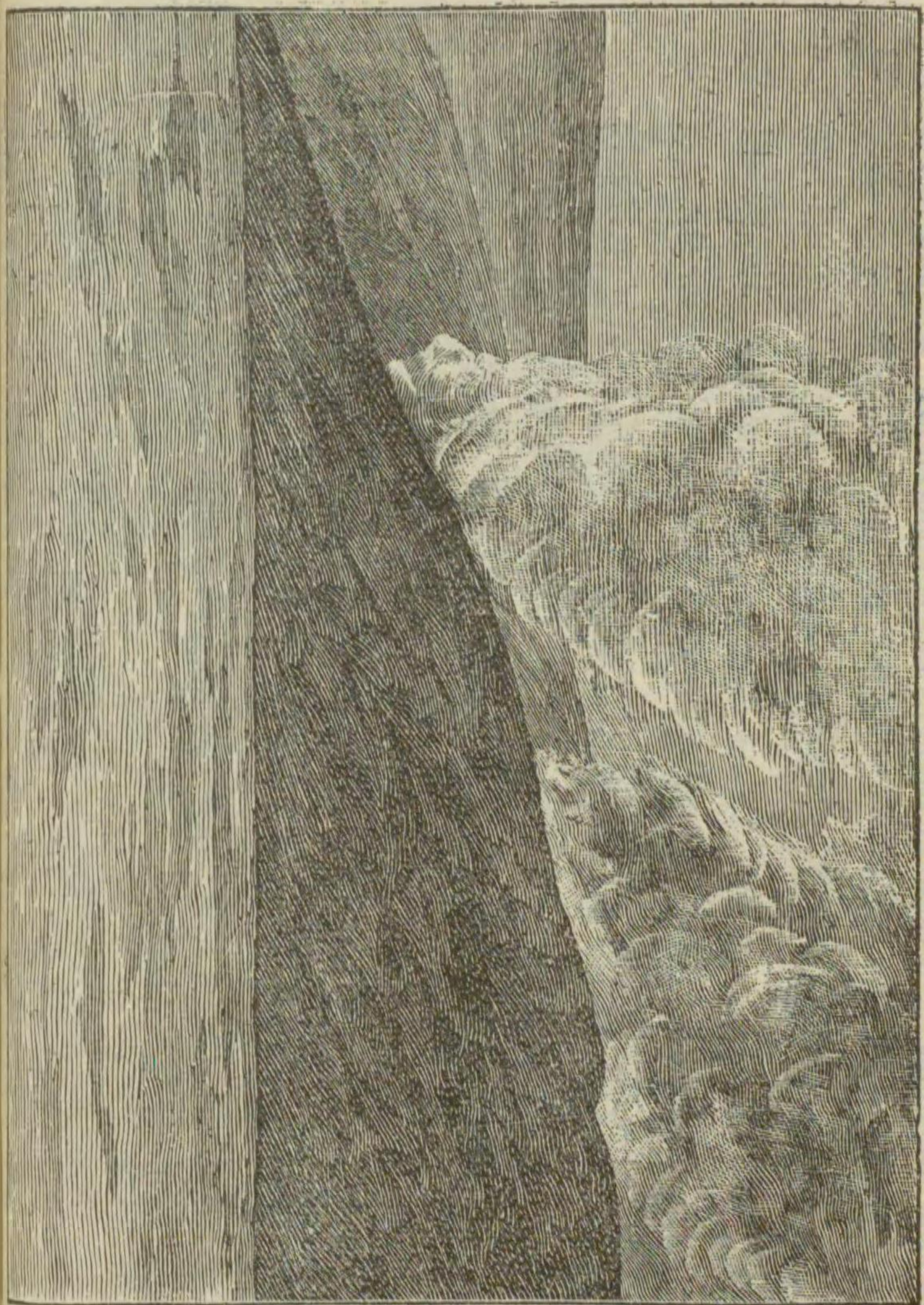
海拔一、〇一三米突、一名白鷹山、東西南村山東西置賜五郡に跨る。

信

夫

山

岩代國福島町の北に當り平原の間より兀然突起するを以て甚だ顯著なり



吾妻山ノ噴煙

(噴煙ノ狀況)

(此ノ山上ノ新學士ニメテ列シタル故理學士三浦宗次郎君ノ親ラ撮影セシメタル)

明治二十六年六月、岩代の吾妻山再び爆裂す、理學士

(地學專攻) 三浦宗次郎、西山惣吉と共に即ち山に登り、

硫燐、熱灰、溶岩を冒し、里稱「大穴」の西南なる新噴

口を探討し、坦然として其の所學を應用し、精査濶番、

竟に「吾妻山の間歇噴出性なる事」を憑證し、斯學に

有益材料を寄附す。

同七日、三浦、西山、再び噴口に到らんとす、午前十

時、大地震卒かに轟然、蒸煙擾動、硫煙天を衝きて逆上し、

熱灰飛風の如く、溶岩亂雨に似、岩兩士の頭腦を破碎し、

即ち場に斃る、斯學の爲めに斃る。

日本の武人、戰場に斃る者、古往今來何ぞ限らん、

獨り斯學の爲めに斃れたる者、先哲叢談前後兩篇中、唯

だ一人あるのみ、而して今や三浦、西山茲に在り。

想ふ日本國の地質圖中、秋田、本荘、男鹿島、足助、

名古屋、豊橋の大幅及び東京灣水底の調査は、實に理學

士三浦宗次郎の頭腦に頼りて大成せしもの、而して此の

頭腦や斯學の爲めに破碎して棺を蓋ふ、眞個に日本理學

社會の一好漢。

福島町より凡そ半里、山麓に公園地あり、神社あり、満山松樹叢生す、山頂より眺望せば阿武隈河の溪谷を下瞰し畫圖中に在らしむ。信夫文字摺り山は信夫山と異り福島町より一里半の所に在り、此山に在る「信夫文字摺り石」は火山岩にあらず、巨大なる花崗岩なり。

吾妻火山彙

吾妻富士

東吾妻山

硫黄山

吾妻山

一切經山

五色沼

家形山

岩代國信夫郡、安達郡、耶麻郡より羽前國東置賜郡、南置賜郡の間に跨る大山塊。全山塊は概して石安山岩より組成す。近年來時々爆裂す。山麓中火口湖多し。

岩代國福島町の西五里、温湯温泉より西一里半にして吾妻富士（一名小富士山、海拔一、七三四米突）突起す。吾妻富士の東に東吾妻山（海拔一、八八八米突）あり。吾妻富士と東吾妻山との間、北に硫黄山（海拔一、六四六米突）あり。硫黄山の正北に吾妻山（海拔一、八六〇米突）あり。吾妻山の北に一切經山（海拔一、九一九米突）

あり。此等の諸山皆な吾妻富士の環壁をなす。一切經山の北、五色沼を距て、家形山（海拔一、七二四米突）あり。此等諸山の間より近年來時々爆裂す。

吾妻富士の火口は直徑五百米突あり。吾妻富士の西に桶沼あり、舊火口にして直徑百五十米突あり。五色沼も舊火口にして直徑五百米突。

安達太郎山

岩代安達郡北西部

火口あり、汽車二本松に達せんとす右窓を開けば當面の山即ち是れ。

沼尻山

岩代耶麻郡の東部。安達太郎山の西方

猪苗代町の東北五里餘に在り、山の八合目に温泉あり、所在は谿谷幽邃、澗水浚潺、山頂に平地あり、其の四圍は斷壁なり、蓋し火口。

磐梯山

岩代國耶麻郡の中央より少しく東方に在りて猪苗代湖の北、沼尻山の西に兀然聳立す。海拔一、七七七米突、明治二十一年七月十五日の大爆裂後山の形勢一變せり

岩代國猪苗代町より西一里半押立温泉（山の西南麓）を過ぎ、山ノ神社に詣て下瞰せんか、猪苗代湖を眼下に望み、山光水色眞個に明媚、畫家大悟すべき所、夫れより中ノ湯温泉に到る、浴室の側噴煙二十餘個所あり、上ノ湯に到る、噴煙三十餘個所あり、熱湯を迸出す、夫れより湯桁山に到る、山腹噴煙十個所あり、湯桁山上より三大湖を望む、即ち明治二十一年大爆裂の際新に化成せしもの、湖中ボヤ魚、イハナ、鱒、鯉、



鱒殊に多し、桑滄の變人をして驚殺せしむるに足る、夫れより火口に到らんか、大噴煙十七個所、小噴煙に到りては百を以て數ふべし、火口の墻壁は直角をなす、口中小湖沼甚だ多し。

那須 嶽 下野那須郡西北部、海拔一、九一二米突

那須停車場より二人曳人力車にて板室温泉（山の南麓）に到り、夫れより登山せば一日にして停車場に返り得、山中に硫氣噴孔百餘あり。

鶏頂山 下野鹽谷郡の北部、鹽原温泉場の南、一名高原山、海拔一、七九三米突

鹽原温泉新湯より二里、高原嶺に到る、登ること一里嶺頂の辨天ヶ池に達す、蓋し舊火口なり、夫れより山頂まで二十町、徑路殊に峻峻、山に鶏頂山神社（祭神猿田彦命）あり、山頂より眺望せば、富士山、男體山、月山、磐梯山奔馬の如く駛走し、眞に跌宕雄渾を極む。

日光火山彙

赤雜山 海拔二、二九〇米突

舊火口あり、此口より日光「七瀧」の一出づ、瀧は稻荷川の源をなす。

女貌山 海拔二、三八四米突

「七瀧」を経て登ること便、硫氣噴孔あり、山頂の眺望は壯宏無比。

大眞名子山 海拔二、三八五米突

登り一里八町、山徑の峻峻なる所には鐵鎖を繋ぎて登山者に便にす。

小眞名子山 海拔二、三四〇米突

女貌山と大眞名子山の間に聳立す、舊火口あり、硫氣噴孔亦たあり。

男體山 海拔二、四八三米突

中禪寺より二時間にして登る、山徑殊に峻峻、山頂の眺望甚だ壯宏。

白根山 海拔二、二八六米突

日光湯本より西に向ひ登り得、火口あり、明治六年三月爆裂したり。

庚申山 海拔一、八九六米突

足尾町の西北に聳ゆ、怪巖奇石累々、其の變幻なる人を驚殺せしむ。

赤城山 上野南勢多郡北部、前橋市の北東に望見し得、海拔一、九四九米突

前橋市より大胡村に到り、此所より山頂に到る四時間、舊火口二個あり、一は缺損し、一は湖をなす、湖より高きこと百米突弱にして小沼あり、山に赤城神社あり、山頂よりは富士、甲斐ヶ根、八ヶ嶽、立科、淺間、白根、武尊の諸山を眺望す、風懷の高士

は須らく登臨すべし。  
榛名山 上野西群馬郡西南伊香保温泉場の西南に連互す、榛名富士（最高點）海拔一、四五七米突

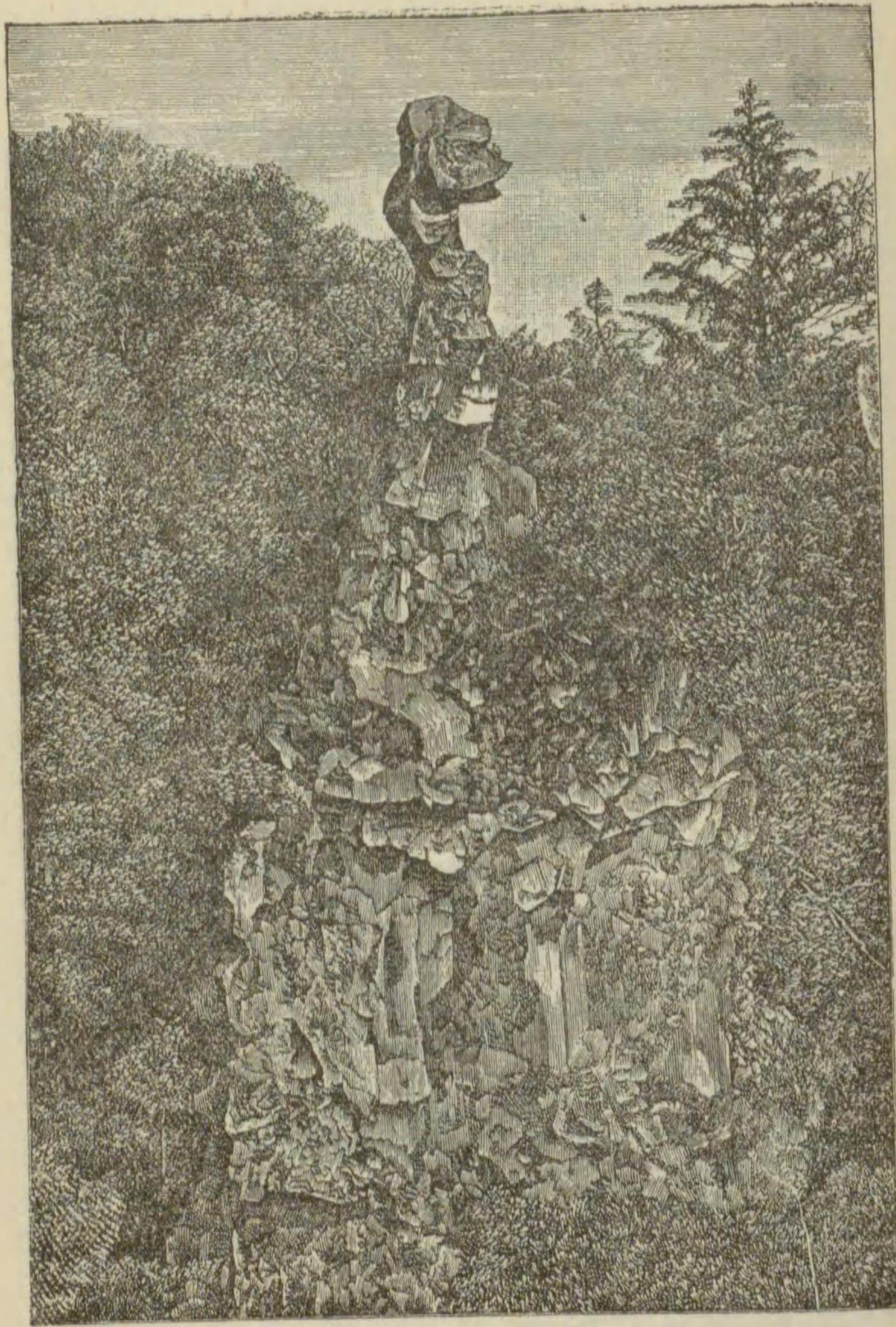
伊香保温泉より西へ登り、先づ榛名富士に登るを要す、其の眺望眞に濶大、山を下り榛名湖に出づ、是れ舊火口、湖畔に一小亭あり、午時此に倚りて行厨を開き山色湖光を喫するも快、亭を去り天神嶺に登る、嶺は伊香保より高き三百五十米突、眺望絶佳、嶺を下り溪に沿ひ榛名神社に詣る、廟祠壯宏、祠前に怪巖奇石多し、葛籠岩の如き其一。

(二) 西岸火山脈

是れ陸奥の岩木山より起り、中央火山脈に并行し、日本海に沿ひて、兩羽の中央を南走し、越後の境に到り、越後と岩代の境界、上野と信濃の境界を限り、淺間山邊に到りて竟に富士火山脈に合するもの、其間名山多々。

岩木山 陸奥國中津輕郡より西津輕郡に跨る、弘前市の西北位に當り平原に峭立す。一名津輕富士。海拔一、五九四米突

弘前市より三里百澤（南麓）に到り登る、登ること千四百米突（海拔）鶏卵形の舊火口あり、廣き所百米突、中に小池あり、此所より磊落たる安山岩を踏み嶮に登る更に二百米突（海拔）、山頂に達す、岩木川の全溪谷を下瞰し眺望豁達、頂は缺損せるも全



榛名山葛籠岩

（雅稱「九折岩」上野西群馬郡榛名山神社入口ノ左側（南行）在り）  
溪流、雨、霜、氷、雪、大氣、火山の岩を浸蝕して成す

體を觀察せば圓錐狀火山を顯示す、南麓百澤に岩木山神社（祭神大國主命）あり、舊津輕藩世々賞を吝まず裝飾す、金碧燦爛、華麗莊嚴、「奥ノ日光」の稱あり。

鳥海山 羽後國由利郡、羽前國飽海郡に跨る、酒田町より五里六町にして日本海岸なる吹浦に到り此所より登山するを以て最も利便とす、全山輝石安山岩より組成す。一名鳥ノ海山。山頂に鳥ノ海神社（祭神大國主命）あり夏間之れに詣る者多し。新山（最高點）は海拔二、一五七米突

酒田町より吹浦（山の西麓）に到りて登る、此所より山頂まで九里と稱す而かも六里に過ぎず、登ること三里鳥ノ海山神社の一ノ鳥居に達す、此所より山徑險峻、登ること一里半にして隆夏雪を見る、雪を踏む一里（里稱「大雪路」）鳥ノ海遙拜殿に詣れば人は第一火口の峭壁上に立つ、眼下に鳥ノ海あり是れ火口の凹所に消氷雪の湛へたるもの、夫れより積雪を踏み（「小雪路」）第二火口の墻壁内に入り行くこと十四五町にして本社に詣る、社の後に峭立する新山は鳥海山の最高點となす、頂に登りて四望せんか、東には陸羽の境界を限れる中央火山脈（日本本島の主軸をなす大山系）の連山奔馬の如く南走し、西には日本海浩渺して、男鹿半島、飛鳥、栗生島、佐渡、煙波杳溟の間に點綴し、南には最上川の溪谷を下瞰し越後の山脈更に其南に障立す、鳥海山頂の最奇觀は拂曉其の圓錐形なる山影の日本海に倒映する是れなり、太陽の昇るや其影疾く減縮するを以て此の景象を看んとせば、一夜を本社殿側の小屋に明かすこと可、文人畫師たる者必らず登臨せん哉、「大小雪路」の間に白花の奇草ヒナザクラ、テフカ



岩木山

（陸奥國弘前市岩木川上橋ヨリ望ム）

月グツ 山サ イフスマあり、其他奇異の植物少からず、植物家亦た登臨すべし。  
羽前東田川、最上、西村山三郡に跨る

海拔一、九六〇米突、鶴岡町若くは山形市より登る。月山の西北に湯殿山あり、北に羽黒山あり、合して「三山」と稱し詣る者甚だ多し。

朝日嶽 羽前、越後の境界

飯イ 豊ヒ 山 羽前、岩代、越後  
越後三面川の上流に峭立す、嶽の北麓なる大鳥池は蓋し舊火口なり。

御ミ 神カ 樂ラク 嶽 岩代、越後の境界  
山頂（海拔一、八八〇米突）は花崗岩なるも麓は大半火山岩なりとす。

守シ 門モン 嶽 越後北南蒲原古志北魚沼四郡に跨る  
海拔一、二一九米突、岩代河沼郡と越後東蒲原郡に跨る、飯豊の南西。

浅草山 越後北魚沼郡東北  
海拔一、六二二米突、齊整せる圓錐體をなし、山頂に舊火口一個あり。

駒ケ 嶽 越後北南魚沼二郡  
守門嶽の南西に在り、北南魚沼二郡に跨る、圓錐體をなし火口あり。

苗メ 場バ 山サン 越後南魚沼郡南部、安山岩より組成す、海拔二、一五五米突  
三國峠街道三戻村より神樂岡、御花園、馬ノ脊を超る頂に達す、「天然ノ苗場」と里稱するは舊火口の缺損せるもの、能登、佐渡、富士山を望む、山海眺觀の壯絶なる、實に越後に冠たり、頂には隆夏雪を看る。

白根山 上野吾妻郡より信濃上高井郡に跨る。海拔二、一四二米突  
草津温泉場より登ること千米突（海拔）にして鶏卵形の火口あり、廣き所五百米突幅百五十乃至二百米突、其の牆壁は峭絶なり、然れども東邊に低所ありて此所より入り得べし、内に硫黃的熱湯の大湖あり。

吾妻山 上野、信濃の境界  
海拔二、三五七米突、一名四阿山、齊整せる圓錐體にして火口あり。

(三) 寒風山火山脈

是れ羽後國男鹿半島より起り、半島の東側に寒風山、西側に新山、本山を崛起し、中央、西岸の二火山脈と并行して南南西に走り、日本海の中に入り、飛鳥、粟生島を崛起し、復た陸に上りて

直ちに越後の角田山を崛起し、日本海岸に沿ひて西南走し、越後國中の諸名山を崛起して、信濃の境に入り、竟に富士火山脈に合するもの。

寒風山 羽後南秋田郡男鹿半島の東側、八郎湯の西岸に聳立す

山頂に圓形なる舊火口あり、周回一里餘、全山輝石安山岩より成る。又た山の傍近數里の間に火山岩屑散布す、温泉の湧出する所あり。沿岸は日本海の怒浪岩石を撃ち、風光の跌宕なる東北地方に冠絶す。

彌彦山 越後國西蒲原郡、三島郡の間に跨る

海拔六三三米突、日本海岸に聳え、新潟市の西南に在り、山に彌彦山神社あり、山頂より日本海を望む。北方角田山との間に温泉あり。

米山 越後刈羽郡の西境

海拔九九一米突、刈羽郡の西境より延きて中頸城郡の東境に延縁す。

妙高山 越後國中頸城郡に在り、信濃國境の北に聳ゆ。直江津鐵道北行の汽車越後の境に入り車の左窓を開けば當山の山即ち是れなり。赤倉温泉場より登る最も利便。海拔二、四五四米突

直江津鐵道田口停車場より下車し、赤倉温泉場に到り、夫れより登ること可、妙高山阿彌陀堂（舊曆六月二十三日夜大開帳あり）へ靈拜者の登る道ありと雖も嶮岨にして可ならず、赤倉山の硫氣噴孔に到る山徑を取るを可とす、此の硫氣噴孔（甚だ高度なる二温泉湧沸す）を去るや隆夏と雖も谿間處々に殘雪を見る、又た徑の最も狭き所（幅二寸弱）には鐵鎖を懸崖に繋ぎ之れに頼りて以て僅かに通過す、硫氣噴孔數所にあり、絶頂阿彌陀堂の側に泉水あり、寒冽にして一飲齒牙爲めに冷、飲後四方を眺望せんか、東南に淺間、富士あり、南には黒姫の雙尖駢立し、其間より飯綱山を臨み、南南西に

劔ノ峯、西北西に焼山の圓頂を見る、東北は越後の平野瀟望し、日本海は玻璃盤の如く、盤上佐渡の青螺を盛る、赤倉温泉場より往復七時間にして上下し得。

黒姫山 信濃上水内郡北部

海拔一、九八二米突、信濃の北境に聳ゆ、圓錐體にして舊火口あり。

焼山 越後中頸城郡、西頸城郡の間に跨る

海拔二、四一〇米突、全山輝石安山岩より組成し、山頂は甚だ齊整せる圓錐體をなし火口あり、又た硫氣噴孔あり、但し溶岩は認めず。

高妻山 信濃上水内郡西北

海拔二、四二五米突、信濃の北境（越後との）に聳え、焼山の南に在り。

戸隠山 信濃國上水内郡の西北、長野町の西北五里に在り、中院若くは寶光院までは道路安濶にして嶮峻ならず 海拔二、四二五米突

長野町より直ちに登り得、荒安村より飯綱山麓の高原を經（原の最高所に鳥居あり）、

半里弱にして道路左右に別る、右は中院道、左は寶光院道(十二町あり)、寶光院より老杉を植ゑたる山道(稍嶮岨)を登り三十町にして奥院に達す、九頭龍神社あり、社の神酒甚だ芳醇。奥院の更に奥に劔ノ峯あり、登り三里道路嶮峻なりと雖も、山中の小屋に一宿し、翌且大陽の昇るを看る殊に奇觀たり、水蒸氣の變幻開闔の現象を大悟せんと欲せば須らく登臨すべし、必ずや得る所あり。

飯

綱山 信濃上水内郡中央、海拔一、八三六米突

戸隱道荒安村若くは戸隱中院より登る、中院よりせば一時間半にして山頂まで登り得、山に飯綱山神社あり、頂に火口あり、眺望宏濶。

冠

着山 信濃國更級郡南境

更級郡、東筑摩郡の境界に在り、千曲川を距て淺間火山彙に連絡す。

以上表記せる外、(一)中央火山脈に前乘山(陸中)、赤崩山、飯森山(以上二山、羽前、岩代の境界)、七ッ森山(岩代、福島町の東東南)、鬼面山、箕輪山、鐵ヶ杖、和尚嶽(以上四山、岩代、皆な吾妻火山彙の南に延きたる所)、會津布引山、白河布引山(海拔一、〇三〇米突)、二股山、小城森、大城森、旭岳(海拔一、九七〇米突)、小野嶽、明神嶽、博士山(海拔一、四七九米突)、船ヶ鼻山、七ッ森山(海拔一、六七一米突)、中山峠、長手山(海拔一、一六〇米突)、隠嶽(海拔一、九八〇米突、圓錐體をなし火口あり)、尾瀨沼(以上十四山一沼、岩代)、武尊山(上野、赤城山の北、海拔二、〇七四米突)の諸名山及び舊火口あり、(二)西岸火山脈に赤安山(越後、御神樂嶽の西北)、猩々森山(岩代、越後の境界、御神樂嶽の西南)、八十里越(海拔八四五米突)、六十里越(海拔一、三〇一米突、以上二越、岩代、越後の境界)、岩菅山(海拔二、五一五米突)、横手山(海拔二、一四七米突、以上二山、信濃、上野の境界)の諸名山あり、(三)寒風山火山脈に新山(海拔七二〇米突)、本山(海拔六八三米突、以上二山、羽後男鹿半島)、角田山(越後、新潟市の西南、彌彦山の北、日本海岸に聳立す)、黒姫山(海拔一、〇九〇米突、米山の東南)、不動山、鬼面山(海拔一、六一五米突)、雨飾山(海拔二、〇四〇米突)、薬師ヶ嶽(以上五山、越後、皆な妙高火山彙に在り)の諸名山あり。北日本の名山了る、君請ふ登臨し、火口湖の晶明なる洌水に嗽ぎて、太古の雪を嚼み、天風に獨嘯して、長空に向ひ浩歌せんか、君や人間の物にあらず。

(七) 中部日本の火山

中部日本の火山に二主脈あり(一)富士山火山脈、(二)立山火山脈。

(一) 富士山火山脈

是れ東北火山脈中、寒風山火山脈の西南端なる妙高火山彙より東南走して淺間、富士を崛起し、伊豆半島を構造し、竟に太平洋に入りて、豆南七島、鳥島、小笠原列島、硫黄三島を崛起するもの、其間名山殊に多々列擧すべきか。

鏡臺山 信濃埴科小縣二郡松代町の背に聳ゆ

千曲川の東岸に聳立す、姨捨山と相對す、姨捨山より月の昇るを見るに此の山嶽の凹所に圓月の懸る所宛も鏡臺の如し、故に此名あり。

淺間山

信濃國北佐久郡より上野國吾妻郡に跨る 此山は其の噴火の殊に強烈壯大なるを以て古來殊に顯著なるも亦た之れに登臨するの甚だ容易なるを以て知らる、上り四時間半下り三時間弱に過ぎず 海拔二、四八〇米突

登山するに二徑路あり、一は信濃沓掛より北行一里半にして小淺間山副火口の麓に到り、之れより西に向ひて山頂に達す、一は追分より追分ヶ原を北行し、一里赤瀧（淺間山南麓の「血ノ池」より流下する水の小瀑布をなすもの、高サ三間、水赭赤色を帶ぶ、蓋し鐵分を多量に含有する浮石の分解して成すもの）に到り徑路漸く峻峻、二里餘にして山頂に達す、現火口は直徑三百米突餘、深サ測るべからず、四時水蒸氣、亞硫酸瓦斯、硫化水素瓦斯を噴出す、現火口の西北に二里の弓狀岩壁あり、近きを前掛山、遠きを牙山と云ふ、共に舊火口環壁の殘留するもの、即ち牙山は最舊火口、前掛山は舊火口、現火口は新火口なり、山頂より眺望せんか、北には悉く上野北部の山嶽

を看、北東には榛名、赤城の連山環るが如く、太平洋を煙波杳渺の裡に認め、南に甲斐全國の山嶽來り、富士山其上に孤聳し、南西に八ヶ嶽の圓錐山頂を見、西に雄拔なる信濃飛驒の大山彙を見る。

和田峠

信濃小縣諏訪二郡中仙道に在り。海拔一、五九七米突

頂より五町にして東餅屋あり、右（西行）に入り一丘に登らんか、東北に淺間山、東南に立科山、八ヶ嶽、西南に諏訪湖、西に駒ヶ嶽、東に御嶽を望み、四望壯宏雄拔。西餅屋の側なる「椽石」は安山岩なり。

鷲ヶ

信濃諏訪郡東北部

海拔一、八八〇米突、和田峠の東南に秀づ、諏訪湖の東北に聯立す。

立科山

信濃國北佐久郡より同諏訪郡に跨る

海拔二、五三〇米突、信濃南佐久郡畑より登るを利便とす、全山玄武岩、輝石安山岩より組成す、頂は圓錐體をなし舊火口あり、四望絶佳。

八ヶ

信濃南佐久郡諏訪郡、甲斐北巨摩郡 海拔二、九三二米突

八ヶ嶽山彙中の最高山赤嶽には信濃南佐久郡板橋より樵徑に頼り登り得。山彙中の南端權現嶽には甲斐北巨摩郡長澤より登り得。兩嶽共に絶頂よりは信濃、飛驒の連山、

妙

富士、白根、金峯山等を望み得。

義山

上野國北甘樂郡より同碓氷郡に跨る此の山彙は一中心より放射せる錐狀の幾多山嶽より成り、舊火山にして激烈なる雨水雪の浸蝕を被りたるもの 海拔一、一六五米突

中仙道鐵道磯部停車場（温泉場）より下車し、一時間にして妙義村に達す、村より少しく登れば妙義神社あり、老杉鬱葱す、社より二十五町にして奥院あり、一大巖洞あり、一危峯の絶頂に竹を編みて「大」の字を懸く、長三丈幅二丈と稱す、此所より仰望せば危峯怪嶺簇々として聳立し變幻眞に無比、奥院より愈々登れば益々峻峻、山彙中の白雲山、金洞山、金鷄山皆な登るべし、金鷄山に「蠟燭岩」あり、大黒山に到る徑上「一ノ石門」あり、鞍掛山に「二ノ石門」、「三ノ石門」あり、大黒山に「髯摺り岩」あり、是れ火山岩の柱の如く聳立するもの、要するに火山岩の譎奇を極盡するは實に此の山彙に在り。

富

士山

駿河、甲斐に跨る 海拔三、七七八米突

◎須走より登るには深林の間を騎する二里「馬返シ」に到り、更に二里「中食場」に到り休憩す（一合目より八町下）、宿泊には八合目の小屋最可、九合目に迎淺間神社あり。

◎吉田より登るには深林の間を騎し二合目「馬返シ」に到り、五合目に達し始めて深林を去るを得、故に其間風景は樹木に障屏せられ御殿場口、大宮口の道の如く佳ならず。

◎人穴より登るには甚だ峻峻、且つ徑路深林の間に在れば風景樹木に障屏せられ佳ならず、然れども白糸ノ瀧を看んと欲せば登りには他路を取り下りには此路を取ること可。

◎大宮より登るには村山に到り、村山より三里八町「馬返シ」に到り、夫れより峻峻、宿泊には五合目の小屋最可、此道は古來登山者の多く取る所、故に「表口」の稱あり。

◎箱根より登るには蘆湖を北に浜りて西端に上陸し、駿河峠を越え、須山に出で、此所より所謂「須山口」の路を取るを最も利便とす、寶永山北の側を過ぎ絶頂に達し得べし。

◎御殿場停車場より登るには中畑道を取り太郎坊に到り、二合半、三、四、六、七、八、十合目（絶頂）を経、歸途には七合より灰砂上を「直走り」下り、四時間にして御殿場に返り得。

◎絶頂の舊火口、火口（「内院」）直徑六百米突、深サ百六十七米突、環壁を下り二十



分間にして火口底に達し得、底は西より東に傾向し、灰砂曇々、澗水處々、壁の四周は峭絶す。

◎ 劔ヶ峯の日出、火口の西に劔ヶ峯あり、富士の最絶頂とす、拂曉峯に登りて日出を待たんか、太平洋の地平線上曙色來り、紅紫萬狀、既にして旭光火を燃すに似たり、盛觀無比。

◎ 劔ヶ峯の眺望、南に駿河灣、伊豆半島、南西に富士川の溪谷、北に甲信の連山、西北に信飛の諸名山、越中の立山、東に筑波山、東京の平原、東南に豆南七島を望む、壯觀無比。

◎ 雲霧の大現象、日出日没の際、絶頂より下瞰せんか、雲霧脚下に起り、無涯の太平洋の如く人は孤島上に立つに似、太平洋と連り、此雲の變幻出沒と彼水の寂靜不動と對偶す。

◎ 富士山の反映、日出日没の際、絶頂の西側に立んか、嶽西を繚繞する雲霧の間、嶽下の平原、若くは太平洋水に富士の反映を分明に認め得、所謂「影富士」なるもの、奇觀無比。

◎ 「絶頂廻り」火口の側を廻行せんか、「親不知子不知」の難道、大澤の深谷、「雷岩」、「釋迦ノ割石」、金明水銀明水の二泉、觀音ヶ嶽なる水蒸氣の噴出等あり、周回凡二十町。

◎ 「中道廻り」御殿場口の登道六合目（海拔凡二千八百八十米突）より吉田口の登道（海拔凡二千二百六十米突）に到るの間富士山の中腹を廻行する事を云ふ、其間風光佳絶。

◎ 「裾メグリ」山麓を廻行する事を云ふ、御殿場停車場より廻行して鈴川停車場に出る廿六里六町、其間麓北に五湖あり（以下詳出）、「人穴」あり、白糸ノ瀧あり、到處奇絶。

◎ 富士麓北の湖、山中（周回三里餘）、川口（周回四里半）、西（東西二里南北一里弱）、精進（東西一里南北廿町）、本栖（周回三里餘）の五湖、皆な噴起の際地盤陥没に因り生出す。

◎ 山麓の諸洞穴、人穴（麓西人穴村）、胎内窟（吉田登口の西）、雁ノ穴（上吉田、長さ七十五間）、風穴（須山近傍、長さ三里餘）、岩波ノ穴、溶岩中の水蒸氣の放出に因りて生出す。

茅

ヶ

嶽

甲斐北巨摩郡東部

金ヶ嶽 海拔一、七八〇米突、輝石安山岩より組成す、東の方金ヶ嶽に連る。  
甲斐中巨摩郡北部

鬼山 海拔一、六六〇米突、茅ヶ嶽の東位に聳立す、甲府市の正北に在り。  
甲斐東山梨郡西南

伴次郎嶽 海拔一、一五四米突、輝石安山岩より組成す、甲府市の東北に秀ぶ。  
駿河駿東郡の西部

愛鷹山 海拔一、四三六米突、輝石安山岩より組成す、富士の南東麓に連る。  
駿河駿東郡西南部

箱根火山彙 海拔一、一八七米突、輝石安山岩より組成す、伴次郎嶽の南に聳ゆ。  
駿河の東南境より相模足柄上郡足柄下郡に跨る、駒ヶ嶽、神山、二子山は大火口の弱所を破りて噴出せし小火山群、金時、明星、明神の諸山は此の小火山群を環繞す。蘆湖は此の小火山群と火口壁との間に生出せし凹所に水の湛へたるもの

金時山 海拔一、一五四米突、仙石原より登る、登り二十五町、山路稍峻峻。  
御尉峠 海拔一、〇二〇米突、仙石原を經、御殿場停車場に出づる山道なり。

明星山 海拔凡そ九三三米突、御尉峠の西南、蘆湖の北、駿河との境に聳ゆ。  
蘆湖 海拔凡そ八七〇米突、箱根宿北に在り、周回四里三十町、其水澄清。

駒ヶ嶽 海拔一、三六六米突、蘆湯より登る、眺望二子山に比せば甚だ劣る。

神子山 海拔一、四三九米突、箱根火山彙中の最高點となす、山頂眺望絶佳。  
二子山 海拔一、〇五六米突、蘆湯より箱根宿に至る途より登る、火口あり。

天神城山 海拔一、二〇九米突、宮ノ下温泉場より早川を越え北方に聳立す。  
伊豆國加茂郡、田方郡の間に連續す

大山 一山嶽を稱するにあらず、最高點伴次郎嶽海拔一、四〇六米突、是れ富士火山帯の東南走するものにして是れより遂に太平洋中に入る。  
伊豆國爪木海角より海上凡二十一哩

利島 全島圓錐體をなす、最高點三原山は活火山なり、野増村より山頂の火口に到る二時間程、天城、富士、箱根及び房總の諸山を眺望し得。  
大島の南西に在り

利島 全島火山岩より組成す、圓錐體をなす、中央なる宮塚山に火口あり。  
利島の南方に在り

鶺鴒島 全島火山岩より組成す、圓錐體をなす、最高點は海拔凡三百米突餘。  
鶺鴒根の南に在り

新島 全島火山岩より組成す、南端なる丹後山は圓錐體をなす、火口あり。  
鶺鴒根の南に在り

式根島 新島の西南に在り

全島火山岩より組成す、圓錐體をなす、海岸の外に小火山岩嶼多し。

神津島 式根の西南に在り

全島火山岩より組成す、白島、天城、黒島、メウカ、向諸山は火山的。

三宅島 神津の東南に在り

全島火山岩より組成す、中央の雄山は時々噴煙す、麓南に温泉湧く。

御倉島 三宅島の南凡十湮

全島火山岩より組成す、中央に大川山あり、麓南の河口池は舊火口。

八丈島 東京より六五湮、安房國洲崎の正南

全島火山岩より組成す、西北岸の甌峯（一名西山、又た八丈富士）は新火口、南方の

三原山は頂に舊火口二あり、湖と化し用水となる。

小島 八丈の西海上五湮

全島火山岩より組成す、八丈富士の外輪をなす、海岸は巉巖聳立す。

青ヶ島 八丈の正南三七湮

全島火山岩より組成す、圓錐狀火山に火口あり、之れに草木暢茂す。

鳥島 青ヶ島の南に在り

全島火山岩より組成す、圓錐體をなす、千歳灣は舊火口の遺趾なり。

小笠原列島 八丈島の南微東、婿父母三群に別る

群島火山岩より組成す。父島二見浦は舊火口、沿岸なる鎗山、旭山は其の牆壁。野羊

島の石門、母島のワントネー澳は火山作用に因る。

硫黄三島 小笠原の南、北硫黄硫黄南硫黄三島

三島火山岩より組成す。北硫黄島、海拔凡七百七十米突。硫黄島に硫黄の結晶體より

成る一丘あり。南硫黄島、海拔凡六百二十米突。

(二) 立山火山脈

立山火山脈は、越後、信濃の境界なる箆嶽に起り、花崗岩の地帯を距て、南の方越中、信濃の境界なる鹿島鎗ヶ嶽を崛起し、鹿島鎗ヶ嶽より更に花崗岩の地帯を距て、越中の東境に沿ひ立山山彙（杓子嶽、東鐘釣、不歸嶽、瀧倉嶽、赤禿山、別山、鎗ヶ嶽、國見嶽、龍玉嶽、淨土山、小鳶、大鳶、薬師嶽）を崛起し、南走して信濃、飛騨の境界を限れる焼嶽、硫黄嶽、乗鞍嶽、御嶽に到るもの。想ふ后土の大活力、日本本州中部の地骨たる大花崗岩帯を破りて迸發し、立山火山脈を聳出す、故に此脈や、他の山系と特立して、越、信、飛の境界に盤踞し、日本本州の中部に

人跡甚だ到らざるの寔區を作す、「石劍鑽青」の四字實に立山火山脈を代表し、「非人寰」の三字眞に此の寔區を盡くす。蓋し日本の地形、其幅狭小、故に眞成なる「深山幽谷」少し、唯だ此間南北二十里、東西十里、人屋を見る立山温泉浴屋二あるのみ、故に人間に會せざる時に半月に渉ることあり。麻衣を着け鹿皮を穿てる山下の民は能く案内に應ぜん、乃ち米、味噌、鹽、漬物、罐詰、餅（溪水無き所にては之れを食ふ）アラシヤット毛布、油紙、麻繩（數十丈の斷疋を下る際に用ふ）を此輩に負はしめ、以て入らんか、熊、鹿、カモシカは人を恐れざるものゝ如く、原人時代の形象は宛として目前に映出し來る、豪興の士は此の寔區に入らずんば寄傲し得ず。

籠エトラ 越後、信濃の境界

全山輝石安山岩より組成す、西微南に延縁して大小蓮華山と連續す。

大蓮華山  
小蓮華山

越後西頸城郡西南、越後、越中、信濃の境界、籠嶽の西

大蓮華山（海拔二、九三四米突）、小蓮華山共に山頂は他の岩質に係るも、以下は悉く輝石安山岩なり。大蓮華山頂の下に二湖あり、舊火口とす、山の北麓に蓮華温泉あり（海拔一、六五六米突）、浴屋一あるのみ。

鹿島カシマ 越中、信濃の境界

後立山ウシタテ 越中、信濃の境界、立山の東に聳立す

鹿島カシマ 越中、信濃の境界、立山の東に聳立す、故に此名あり、山頂傍近は火山岩（輝石安山岩）なるも、以下は花崗岩。

立山

越中上新川郡東部富山市の東微南に障立す。雄山（最高點）海拔二、九三六米、花崗岩一帯の間を破りて迸出せしものなれば、山頂以下西部は輝石安山岩より組成す。西部は片麻岩より組成す。山頂以下西部は輝石安山岩より組成す。山に舊火口二あり共に缺損す。頂に大山神社の祠あり。世に「大」を説く者多し然れども眞成なる自然の「大」は實に立山絶頂より四望する所に在り

立山の絶頂に登らんとせば二徑あり、（一）信州口、（二）越中口是なり。（一）信州口、信濃大町より野口村に到り、此所にて案内者を備ひ且つ各種の準備をなし、針木嶺（海拔二、五九三米突、第六十三頁に詳なり）を超え、二股、黒部を經、ザラ越（海拔二、五九八米突）を過ぎ、立山温泉（海拔一、四〇二米突、安政五年二月大爆裂の際、化成せし摺鉢形なる凹所の内に在り、所在に硫氣噴孔あり、硫黄的熱湯の沸騰せるあり、溶岩累々、灰砂堆積す）に下り、夫れより直ちに北折し、追分に出で、此所にて越中口よりの登り道と合し、東折して漸く山頂に達す（追分より山頂に到る間の諸事は越中口の部に記す）。（二）越中口、富山市より人力車にて蘆倉寺（海拔三七五

米突、山の西麓、立山の神宮在住す）に到り、此所より登り初め、追分を經、蘆倉寺より八里にして室堂に達す、例年七月廿日より九月十日に到る間參詣者の宿泊用に供す（堂より左方六町「大地獄」の大硫氣噴孔數個あり、其の所在に「血ノ池」あり、其他小池五個あり、壯觀無比）、堂より更に登る一里、隆夏と雖も行々積雪を踏み、絶頂に達す、立山本社あり、社前より四望せんか、東には越後の妙高、妙義、米山、下野の日光山彙、信濃の戸隠、飯綱、黒姫、淺間を看、南には八ヶ嶽、立科嶽來り、富士山其背に高聳し、甲斐の白根、駒ヶ嶽、信濃の駒ヶ嶽、御嶽、鎗ヶ嶽、乗鞍、笠ヶ嶽、飛驒の藥師嶽を觀、南西には加賀の白山を眺め、西には加賀、越中の全平原を俯瞰し、神通、常願寺の二川汪々として其間に屈折し、北には日本海の浩渺を認む、其の眺望や富士山頂に亞ぐと雖も、山嶽を一時に夥多眺望する所は實に之れに過ぐ、自然の「大」を收悟せんと欲せば此山に登臨すべし。

藥

師 嶽 越中上新川郡東部

立山火山彙の南南西走する最南端に在り、甚だ齊整せる舊火口あり。

燒

嶽

信濃南安曇郡より飛驒吉城郡に跨る。三嶽相連。嶽にして一大山塊をなす。燒嶽を以て主嶽とす。

硫

黃 嶽

立山火山脈の南南走して信濃、飛驒の境界を限る所に簇々峭立す。三嶽皆な安山岩より組成す、共に圓錐體にして各々舊火口を存す。燒嶽の山頂傍近に硫氣噴孔一あり、其形甚だ齊整す、溶岩は認めず、山頂より四望せば、北に立山の連山奔馬の如く來り、東に信濃の諸嶺を看、南に乗鞍嶽を仰ぎ、西に高原川の溪谷（飛驒東半）を下瞰す。

乘

鞍

嶽

信濃南安曇郡より飛驒吉城郡、大野郡、益田郡に跨る。燒嶽の南に聳立す。海拔三、一六七米突

信濃南安曇郡小野川村より登り得、一日間に上下せんとするは困憊なるを以て、村より登ること一里半、廢坑せる銀山側の小屋に一宿し、翌旦絶頂に登るを要す、小屋より以上道途なく僅に一樵路あるのみ、漸く登るや、隆夏と雖も積雪を踏む、溶岩、火山岩亦た累々、行歩稍々難、絶頂に舊火口あり、朝日權現社あり、頂下に一湖あり。

御

嶽

信濃西筑摩郡より飛驒益田郡に跨る。全嶽彌石安山岩より組成し。玻璃石、角閃石を交ふ。嶽に御嶽神社を祀るを以て毎歲夏季間之れに登る者多く參詣の盛なる富士山に譲らず。海拔二、九八二米突。

中仙道福島若くは上松より登るを最も利便とす、福島より登れば一日間にして上下し得、上松より登れば一日間にては困憊するを以て、山中「タノ洞」の小屋に一宿し、翌旦絶頂に登るを可とす、頂邊に火口五個あり、火口は大概破壊缺損す、然れども其中「三ノ池」と稱するは最も完全にして摺鉢形をなし周回一里に及ぶ、飛驒に向へる

一部は懸崖にして其の半腹より蒸氣と硫氣とを噴出す、頂には四時雪あり、小祠を鎮し御嶽神社奥院（大己貴命を祀る、里宮は嶽麓字黒澤に在り、縣社なり、舊曆六月十二、十三日を大祭日とす）、頂より四望せば、北西に加賀の白山、能登半島を認め、北に立山の連山、鐘ヶ嶽、乗鞍嶽を看る、皆な白雪皚々として山頂を被ふ、北東に淺間の噴煙、上野の諸嶺を眺め、南東に八ヶ嶽、富士、駒ヶ嶽（信濃）を觀る。

中部日本の火山此の如し、試みに登臨せんか、人や漂渺として羽化せんとす、何ぞ一たび攀らざる。

(八) 南日本の火山

富士山火山脈、立山火山脈（中部日本）以南を南日本とす。南日本の火山脈、大別して四、  
 (一) 日本海火山脈、(二) 白山火山脈、(三) 阿蘇山火山脈、(四) 霧島山火山脈。

(一) 日本海火山脈

是れ日本海中なる佐渡島の金北山に起り、西南走して能登半島に上り、半島中に寶立山、高洲山、鷹爪山を崛起し、更に海中に潜入して西西南走し、隱岐に上り、隱岐の島後、島前に數火山を崛起して、復た海に入り、西南走して長門の見島を崛起し、前みて壹岐島に上り、竟に平戸島、

五島に到るもの。

金北山 佐渡國加茂郡より雜多郡の間に跨る。海拔一、一六二米突

佐渡全島の最高點にして、島の北半（俗「大佐渡」と稱す）の中央に聳ゆ、夷町若くは吉井村より登り得、山頂よりは東西に日本海を望み、南に國府川の全溪谷、島の南半（俗「小佐渡」と稱す）の連山を下瞰す。

東教山 海拔六四六米突

飯秀山 海拔六二〇米突

經塚山 海拔六二二米突

佐渡の南半（小佐渡）の中部に連續する火山彙、松ヶ崎港の西に秀づ。三山共に絶頂よりは東、南、西の三面に日本海を下瞰し、北には國府川の全溪谷（俗「國中」と稱す）を距て、大佐渡の山嶽を雙眸中に收む。

寶立山 能登の北部に聳ゆ

海拔五一八米突、山頂よりは綠剛、珠洲二海角の外に日本海を望む。

高洲山 能登鳳至郡の北部

海拔五五〇米突、寶立山の西南、輪島町（輪島塗の産所）の東に聳ゆ。

別鷹爪山

能登鳳至、羽咋、鹿島三郡の間に跨る

鷹爪山、海拔四四二米突。別所山は鷹爪山の東東南走する間に聳ゆ。共に山頂よりは東南に七尾灣、能登島を看、西及び北に日本海を望む。

隱

岐 日本海中に羅列す。島後、島前(中ノ島、西ノ島、知夫島)に別つ。列島の母岩は大概火山岩

島後の大満寺山、一名摩尼山、海拔凡六百二十米突、西郷港の正北二里に聳立す、隱岐列島の最高點にして圓錐體を顯示す、山脈中到處隱岐の名物馬蹄石(火山岩)を産す、艷美にして本州に輸出す。島前の西ノ島中央に焼火山あり、海拔凡四百六十米突、隱岐列島第二の高山、火山の傍近は杉、檜、松の良材を多産するも他山には少し。

壹

岐 全島の北方一部、東南方一部を除き盡く火山岩を敷く

島の西南に嶽ノ嶺(海拔二一三米突)秀づ。西に神山(海拔一七九米突)あり。西北に本宮山(海拔一二四米突、勝浦港の南)聳ゆ。東北岸に魚釣山(海拔一五五米突)起る。皆な火山岩とす。西岸に温泉あり。

大島

島 壹岐と平戸島との間に羅列する群島。生月島は平戸の西北に在る細長き島

生月島

皆な火山岩より組成す。大島の北部に宇戸嶽(海拔二一四米突)聳ゆ。生月島の中央に番嶽(海拔三〇四米突)起る。其他島中小熄火山あり。

平戸島

壹岐島を距る南西二十三哩、長崎港を距る五十四哩、長サ凡八里幅九町より一里或は二里

全島大概は火山岩より組成し、火山層を以て之れを被覆す。最北端に白嶽(海拔二七二米突)起る。中央より西北に安満嶽(海拔五五八米突、全島の最高點)聳ゆ。中央に有僧都山(海拔三五八米突)盤屈す。西南岸に屏風嶽(海拔四一六米突)あり。最南端に志自岐山(海拔三三二米突)突出す。五山皆な火山岩にして其の傍近には火山層敷く。

五島列島

平戸の最南端より西十八哩なる宇久島を最北とし長崎より五十五哩なる福江島を最南とす

宇久島は火山岩より組成す、最高點は城嶽(海拔二六〇米突)とす。小値賀島(宇久の南四哩)及び傍近の小嶼十餘は火山岩より組成す。福江島は列島中の最大島にして其形五角を成し角邊四里あり、島の北岸に京ヶ嶽(海拔一七七米突)、城ヶ嶽聳ゆ、東岸福江町(舊城下)の南に鬼ヶ嶽(海拔三一四米突)、只狩山(海拔八六米突)秀づ。皆な火山。

(二) 白山火山脈

是れ加賀、飛驒、美濃、越前の境上より起り、此所に白山山彙、大日嶽を崛起し、加賀、越前の境上に赤鬼山、經ヶ嶽、報恩寺山、大日嶽を崛起し、西に延きて越前國裡の日本海岸に國見嶺、越智山を崛起し、此所より西南走して若狹、丹後の境上に青葉山を崛起し、竟に西走して但馬に神鍋山を崛起し、但馬、播磨、因幡の境上に菅野山、氷ノ山を崛起し、但馬、因幡の境上に扇ノ山を崛起し、因幡に入り其の東境に陣鉢山、鳥取市の東北に駟馳山、立石山、寶木港の南に鷲峯山を崛起し、伯耆に進み入りて名和長年勤王の史蹟たる船上山、山陰第一の高山たる大山を崛起し、出雲の三郡山を崛起し、出雲、石見の境上に三瓶山を崛起し、石見の青野山に到るもの。山陰道諸國をして幽邃神聖の區域たらしむるは、實に此の火山脈中に名山の簇立せるに因る。

白山

加賀國能見郡より飛驒國大野郡、越前國大野郡に跨る、金澤市の南凡そ十八里に鐘  
ゆ、最高點(御前嶽)は北緯三十六度七分東經百三十六度五分に在り、八合目以  
上(即ち彌陀ヶ原以上)は火山岩(輝石安山岩に石英を交ふ)に係るも以下は中世紀  
層(砂岩)たり、齊整なる圓錐體をなさず、山中に硫氣噴孔あり、舊火口は水を湛  
みて湖となり硫黄沈澱す。頂に白山神社(祭神大日貴命)あり登山の參詣者多し

白山に登るに二途あり、(一)は越前福井市より勝山町を經、谷峠を超えて達するもの  
(行程十七里廿町)、(二)は加賀金澤市より到るもの。金澤市より到るの途最も利便  
なるを以て之れを取ること可、即ち金澤より四里鶴來に到るまで人力車を驅り、鶴來

より女原を經、十里牛首(海拔凡四百九十米突)に到る、深山間の峡谷に在りて日本  
國中有數なる深雪の地とす、牛首より登る四里、市ノ瀬村に到る、村より八町にして  
白山温泉(海拔凡八百十四米突、湯元と稱す、炭酸泉なり)に達す、風物愈々佳絶、  
徑の斜面益々急劇、三十度以上に及ぶ所あり、滿眸山毛櫸、扁柏、羅漢柏鬱葱す、右  
に柳谷川、左に湯谷川の深凹溪あり、徑側剃刀窟、仙人窟等の怪巖に逢ふ、彌陀ヶ原  
(海拔凡二千三百八十二米突)を過ぐ、黒百合、野鳳仙花等、一々名を知らざるの野  
花亂開し爛錦を敷くに似、此所より地質頓に激變し火山岩となる、五葉坂を過ぐ、滿  
眸皆な偃松、ライ鳥其間に翱翔し、景象自から人間の物にあらず、室堂(海拔凡二千  
四百五十七米突、堂より左折せば別山に到る徑路あり、別山は海拔二、三七八米突、  
白山の西南に連り亦た熄火山とす)に到る、堂側火山岩磊落、殘雪狼藉、遂に御前嶽  
(海拔二、六八七米突、白山山彙の最高點)に達す、嶽下に火口湖三あり、湖を距て  
て劍ノ山兀立す、劍刃を羅列するが如く一看毛髮爲めに悚然、山下に圓形なる一大火  
口湖あり翠池と稱す、御前嶽の正北十町に奥ノ院あり、途上千歳池を看る、亦た圓形  
なる一大火口湖とす、奥ノ院の北に手洗鉢あり、是れ亦た圓形なる大火口湖、奥ノ院  
所在より四望せんか、東北に立山、東北東に鎧ヶ嶽、東南に乗鞍嶽、東南東に八ヶ嶽、



御嶽、信濃甲斐の二駒ヶ嶽を看、近南に別山巍峨として峭立し、正北に釋迦ヶ嶽來る、眼界眞に壯宏。

大日嶽 美濃、飛驒、越前

海拔一、三〇九米突、美濃、飛驒、越前の境界に聳立す、白山の南。

經ヶ嶽 越前、加賀の境界

海拔一、四四六米突、白山の西南。嶽北に赤鬼山あり、亦た熄火山。

報恩寺山 越前大野郡の北部

海拔一、二一六米突、經ヶ嶽の西、勝山町の東に聳立する一熄火山。

大日山 加賀、越前の境界

海拔一、三四〇米突、勝山町の北、福井市の東微南に秀然と突起す。

國見嶺 越前坂井丹生二郡

海拔六三八米突、日本海岸に聳立す。西南越智山あり、亦た熄火山。

青葉山 若狹、丹後の境界

海拔六二〇米突、日本海岸に聳立す、頂よりは岬角海光の眺望濶大。

但馬、播磨、因幡の境上 但馬國の西境より播磨國の北西境に涉り、因幡國の東境に到るの間に巖々峭立する熄火山

但馬の西隅に神鍋山秀づ、其の傍近に湯村の硫黄温泉あり。但馬、播磨、因幡の境上に菅野山(海拔一、六五〇米突)、氷ノ山(海拔一、三一八米突)突起す。但馬、因幡の境上に扇ノ山(海拔一、四二〇米突)聳ゆ。因幡の東境に陣鉢山(海拔一、二九〇米突)峭立す。此等の諸山嶽たる實に中國東部の景象をして壯大深幽ならしむるもの。

鳥取市傍近 因幡鳥取市の東北

駟馳山、日本海岸に突起す。立石山(海拔四五一米突)、駟馳山の南東。

鷲峯山 因幡高草氣多二郡

海拔九四七米突、寶木、鹿野より南微東に入る、青谷の東南に聳ゆ。

船上山 伯耆八橋郡の西部、八橋の西南に聳ゆ

海拔九七五米突、名和長年の後醍醐帝を奉じて勤王の兵を擧げたる處、想ひ起す義人

萬斛の鮮血濺ぎて磊落たる火山岩を染めたる事を。

高麗山 伯耆汗入郡の東部

海拔七七六米突、船上山の西に秀づ。麓南なる赤松池は蓋し舊火口。

大山 伯耆國八橋汗入日野の三郡に跨る。米子町の東に聳ゆ。中國第一の高山嶽、海拔一、七八一米突

御來屋より左折し南行して登る、山腹に大神山神社(祭神大己貴命)あり、徑路は嶮

峻なりと雖も絶頂よりの眺望は最も濶大、北に隠岐列島日本海上に浮出し、西に出雲、石見の境上なる三瓶山彙の鋭頂を看、東に三國山（但馬、播磨、丹波の境界）及び但馬、丹波の連山を認め得、米子町に下らんとせば西麓より車大村に出づるを最便とす。

三瓶山

出雲、石見の境界、石見安濃郡小屋原温泉より凡一里半、男三瓶山（最高點）海拔一、二二八米突、外輪山嶽凡七あり

男三瓶、女三瓶、子三瓶、孫三瓶、外輪山をなし、其間に舊火口（「室ノ内」と里稱す）あり、周回廿町、深所は一反餘歩の池となる、池より西北二町、「鳥ノ地獄」あり、炭酸噴孔にして鳥類此所に到りて斃る、火口より東南下する五町、熱泉湧出す、八町下なる志學温泉場まで箱樋にて引くに熱度尙ほ高く槽中にて冷却せしむ、絶頂よりは前に日本海、隠岐島を望み背に無数の山嶽を看る、裾野の景色亦た絶佳。

青野山

石見鹿足郡の西境

海拔九五〇米突、石見、周防、長門の境上に秀起せる一熄火山なり。

(二) 阿蘇山火山脈

是れ肥後の阿蘇山を主幹とし、西の方熊本市傍近なる金峯山彙より起り、市の西郊に法性、花岡の二丘を起し、東東北走して阿蘇大火山彙を聳突せしめ、肥後、豊後の境上に涌出山を涌出し、二豊に入りて彦山を崛起し、豊後に黒嶽、久住嶽、鶴見嶽、由布嶽、雙子嶽を簇立せしめ、前みて海を渡り、四國に入り、伊豫に石槌山、高繩山、三津ヶ濱の海上に小富士を崛起し、讃岐に到り丸龜町の東南に飯ノ山を崛起し、更に東北走して海中に潜入し、遂に本州に入り、紀伊、和泉の境上を経て、大和の中央に到り室生山を崛起し、愈々東北走して伊勢の中央を過ぎり、竟に參河の鳳來寺山に到るもの。夫の檜垣ノ女の孤棲せし處（金峯山彙岩戸山の麓）、鏖戦十七日七千人の殺傷せし處（田原坂、想ひ起す、萬斛の鮮血濺ぎて磊落たる火山岩を染め盡したる當年の事を）、篠原國幹の憤闘して斃れたる處（吉次越）、鬼上官の安眠する處（法性山）、菊池武光の王に勤めたる處（肥後菊池郡）、「香煙は散じて數峯の雲と作る」處（彦山）、頼山陽をして「溪山天下無」と喝破せしめたる處（耶馬溪、山國川の彦山山麓を浸蝕して開鑿せしもの）、讃州儒士の「噫悲峯」と雅稱する處（飯ノ山）、「いちしの池にあまる白波」を寄するてふ處（室生山）、利修仙人の簫を吹きたる處（鳳來寺山）、皆な齊しく火山岩より組成す、日本國裡の名勝若くは歴史上の遺蹟なるもの、古往今來大抵は火山岩に屬するを知る。

金峯山

肥後熊本市の西に兀立す。三ノ嶽、熊野嶽、小嶽、平山嶽等は金峯山の外輪にして輪の長徑一里半短徑一里、海拔七〇五米突六

熊本市より三時間弱にして登り得、即ち熊本舊城の北側に沿ひ、平田の間を西行し、漸く高く漸く登り、左折して一大鳥居の下を過ぎ、行々遂に絶頂に達す、頂より四望せんか、西に有明洋、島原半島の温泉嶽を眺め、西南は天草諸島琉璃一碧の上に浮び、

南に薩摩の連山長揖し來り、正東に阿蘇の噴煙二條を仰ぎ看、北に豊筑の群嶺を認む、景物眞に壯宏、而かも頂上の壯觀は熊本の平野を下瞰する所に在り、熊本の城堞接連して五層樓樹叢の中に露はれ、白河の長江一帶銀の如く其下を環抱するを觀る、二時間にして熊本に下り返り得。

熊本市傍近

肥後熊本市は西北は金峯火山麓に圍繞せられ東北、東、東南は阿蘇火山麓に環抱せらる。故に市の所在平原は壙塹土粘土、砂礫に交ふるに多量の火山灰を以てし是等の岩土相累積して平原上に阜丘を作る。熊本舊城の如き實に此の阜丘上に建立す。故に市の傍近は火山岩の丘岡甚だ多く皆な名勝若くは歴史的遺蹟の所在にあらざるはなし。

田原坂 九州鐵道木葉停車場の東南一里に在り、坂は火山岩に係り鐵道兩側の切抜キ壁立數仞なる所亦た此岩の間を穿鑿す、西南ノ亂の紀念碑あり、碑文中「兩崖壁立徑路崎嶇」の八字正に此坂を代表す。

吉次越 田原坂の南に在り、是れ亦た火山岩の間を穿鑿したる坂路。

岩戸山 熊本市の西四里に在り、亦た火山岩、岩中に一巨洞あり、岩面に「靈岩洞」の三字を彫す、洞中に觀音の像を安置す、深サ測るべからず、奇絶怪絶、溶岩中の水蒸氣の放出に因りて生出せしもの。

法性山 荒尾山の東麓に在り、熊本市の西北一里、九州鐵道池田停車場より七町許に在り、加藤清正の靈廟を建つ、廟前に本妙寺あり、夫の三韓の啼兒を止めしめ熊本城百雉を經營せし當年の鬼上官が此の櫻雲深き處火山岩の下に千秋の俠骨を安置せんとは誰れか圖る所ぞ。

花岡山 一名祇園山、海拔一三三米突、熊本市の西南に兀立す、停車場より山頂まで約四町、頂より眺望せば熊本の全市を雙眸中に收む、山腹に鐘懸松あり、火山岩土に培養せられ翠色三百年、是れ清正築城の際梵鐘を此枝に懸け自ら撞き鳴らして役夫を指揮せしもの。

阿蘇山

肥後阿蘇郡の南部、熊本市の東十一里、阿蘇火山麓中に杵島嶽、烏帽子嶽（海拔一、二六八米突、中嶽（海拔一、四三二米突五）、高嶽（海拔一、五八三米突九、山麓中の最高點）、根子嶽（海拔一、四四八米突六、山麓の最東端）是れを阿蘇の「五嶽」と稱す、賴山陽詩あり、路繞阿蘇腰。不見阿蘇首。今朝雨霽雲又開。日照三峰觀皴皴。一峰尊嚴是丈人。一峰肩隨在其右。別有一峰似鋸牙。竦立其左爭雄秀。豁然要我爲快觀。唯恨一笑極背走。岐路高低頻回看。鬢鬢出沒猶在後。

熊本市より人力車を驅り大分（豊後）街道に頼り、白川の右岸に沿ひて平田の間を東東北行し、大津町に到る、賴山陽の所謂「大道平平砥不如。熊城東去總青蕪。老杉夾路無他樹。缺處時時見阿蘇」とは此間の景物を咏じて餘蘊なきもの、大津町より道路二條に別る、即ち（一）愈々東東北行し黒川に沿ひ、阿蘇山の北麓に出で、登るもの、（二）東行して白川に沿ひ、阿蘇山の南麓に出で、登るものは是れなり、試みに（一）の道路を取らんか、大津町より東東北行し、緩慢なる峠を登り最高點（二重嶺）に達

するや、圖らざりき人は眼前に峭絶なる懸崖を看自から其上に立ち居ることを、是れ阿蘇火山の外輪に達したるが故のみ、乃ち屈曲線的の道路を経て此の懸崖（高サ凡二百米突）を下り、阿蘇舊火口の盆地に入り、漸く山の北麓坊中村に出で、此所より山彙の中嶽に登る、登りて四望せんか、右に火山彙中の杵島嶽、烏帽子嶽長揖し來り、左に高嶽、根子嶽を仰望し、火口よりは硫氣水蒸氣天を衝きて直上し、眞に雄大を極盡す、而かも山上の最奇觀は阿蘇の舊火口を雙眸の中に收むる所に在り、即ち舊火口の外輪は北は長倉嶺一帶の山嶽を以て、東は豊後境上の連山を以て、南は大矢山、冠嶽を以て、西は倭山、二重嶺を以て、之れを限り、黒川の一水外輪の北より西を繞り、白川の上流輪の東より南を限り、今の阿蘇山は實に新火口として輪の中央に聳立するもの、輪の直徑七里、中に一町十四村あり、無慮四萬の生靈を衣食せしむ、此の如き火口の絶大なるもの實に全世界第一と稱す、夫れより杵島嶽頂下の湯谷に下り、赭泥熱湯の噴出泉を看、南下して垂玉、地獄の二温泉場を經、愈々南下し、遂に（二）の道路に出で、熊本市に返らんとせば西行して栃ノ木新湯に浴し、白川に沿ひ、白川、黒川の合流する所を經、數鹿流ノ瀧、白糸ノ瀧を遊覽し、立野峠を下り、白川に沿ひて西下し、遂に市に返り得、畫師、文人、風懷の高士たる者必らず登臨せん哉。

彌

母

山

日向、肥後、豊後 海拔一、九八〇米突。九州第一の高山嶽山頂に一小石祠及び鳥居を安置せり

（一）日向延岡町より西北十八里半河内村（日向、肥後、豊後の境上）より登り得、  
 （二）肥後熊本市より阿蘇山南麓の高森町に到り町より日向の境に入り河内村に出で登り得。河内村より山頂まで徑路殊に峻峻、而かも奔湍銀の如く、秋間滿眸皆な紅楓、晝も及ばず、頂より眺觀せば萬嶽千峯眉端に集り、東北海峽を隔て遙に四國の山色を看、壯絶。

久々黒涌

住

嶽

肥後の東北境より豊後西部に綿互す。阿蘇火山脈の東北走せるもの此の山彙を起し愈々東北走して鶴見嶽、由布嶽、雙子山に到り竟に四國に入る

涌出山（一名涌蓋山）、黒嶽、久住嶽（一名九重山）皆な完全なる舊火口あり、猛烈なる硫氣噴孔あり、炭酸瓦斯を蓄積せる「殺生石」あり、「千町無田」なる平原あり、「寒ノ地獄」なる硫黄冷泉あり、頼山陽此間の景物を咏ず、山脈東北來。隱然如巨防。豊肥其左右。連山劃封疆。蘇岳尤隆起。散漫餘勢長。地高無草木。彌望唯黃茅。居民食蜀黍。行客避豺狼。名曰九重嶺。風力四時狂。吾來秋冬際。北風輻欲颺。譬如上龍脊。冷然凌大荒。久客連山右。如在天一方。今日踰而左。中原覺可望。下瞰濛濛際。如見

彦

一髮蒼。風狂還可喜。猶來自故郷。

山

豊前田川郡、豊後日田郡、筑前上座郡に跨る、小倉町の南十四里半、大宰府町の東十三里廿三町に在り。海拔一、一七〇米突。山下に耶馬溪あり。

彦山に登るに數途あり、(一) 豊前小倉町、行橋町、若くは筑前蘆屋町よりするもの、(二) 豊前中津町若くは筑後久留米市よりするもの、(三) 筑前福岡市より大宰府町を経若くは筑後久留米市よりするもの。(一)の道途を取らんか、小倉、蘆屋よりは南行し行橋よりは西行して、豊前の香春に出で、増田川の支流に沿ひて愈々南行し、添田に到り、添田より流の右岸を泝行して増田に至り、徑路漸く崎嶇、石階を登り彦山神社の銅製鳥居に達す、鳥居より登る四十二町彦山神社に詣る、社前よりは福知山、犬山、馬見山を眺望し眼界壯宏。

由鶴

見嶽

布嶽

豊後速見郡の西部、別府温泉場の背に聳立す。阿蘇火山脈は此の山麓より國東郡の半島を經竟に海を渡りて四國に入る

共に別府温泉より登り得。鶴見嶽に登るの溪路は林樹蒼翠滴れんとす、嶽に舊火口あり、新火口あり、硫氣噴孔三個あり、活火山にして之れを探討せば奇觀多し、況んや由布嶽と同じく絶頂より下瞰せば、前に茵苜灣(火山作用に因り土地陥没して此灣を生出す)の海光を望み、別府の市街、温泉場の屋背、灣岸に隱見し、右に大分町南の

連山を望み、左に國東郡の火山半島を眺め、雙子の熄火山半島上に秀絶するを觀る。二山共に風光の快濶なること九州の東岸に冠たり。

伊豫ノ小富士 伊豫興居島の南部

高

繩

山

伊豫松山市の東北、道後温泉場の背位

海拔一、〇九〇米突、道後温泉若くは北條村より犀川に沿ひ登り得、頂に寺院あり、東西北放開して瀬戸内海の群島及び松山市を望み得。

石

槌

山

伊豫周布郡、土佐土佐郡の間に跨る

海拔二、三五五米突、四國第一の高山、頂よりは北に伊豫全國の大半、南に土佐仁淀川の全溪谷を下瞰す、眼界の宏濶なる四國に冠たり。

飯

ノ

山

讃岐鶴足郡東南部、丸龜の東南に聳ゆ

海拔五六五米突、一名讃岐富士、頂よりは土器川の全溪谷、丸龜の舊城樓、瀬戸内海の群島を望み、藝備の諸嶺を雲煙杳渺の間に認む。

大和、伊賀、伊勢の境上 大和の東境、伊賀の南境、伊勢の西境の間に在るもの

大和、伊賀の境上に室生山(海拔七〇三米突)あり。伊賀、伊勢の境上に天ヶ嶽(海

拔九九三米突)あり。伊勢の西境に大洞山(海拔一、〇五二米突)あり。此等の諸山

鳳

來寺山

三河南設樂郡東部、豐橋町の東北、豊川上流の傍近。海拔五九二米突。傍近の諸山巖悉く他岩質に係るも此山獨り火山岩たり。阿蘇火山脈の極東

東海道鐵道豊橋町停車場より登り得、町より豊川に出で、東北行して新城町を經、八東穂より東折し、瀧川を渡り、長篠古戰場に到り此所より北に山徑を登り、山麓なる門谷村に達し、橋を渡り鳳來寺の樓門に入り、石階を登る九町にして本堂に達す、階の兩側は老杉鬱蒼天日を蔽ふ、堂塔殿閣金碧壯嚴を極めたりしも近年火災に罹りて半ば烏有に歸せり、而かも當年結構の幾分は尙ほ遺存し、況んや「隱シ水」、「高座石」、「巫女石」、「行者歸」、「猿橋」等の奇蹟あり、沿道の景物亦た豪蕩なるを以て登臨するに足る、本堂より奥院まで九町。

(四) 霧島火山脈

是れ沖繩列島の鳥島に起り、東北走して河邊七島(寶島、平島、惡石島、臥蛇島、諏訪ノ瀨島、中ノ島、口ノ島)、硫黃島を經、九州に入り、薩摩の開聞嶽、櫻島を崛起し、大隅の霧島山彙を崛起して、西北折し、肥前の温泉嶽、多良嶽に到るもの。若し夫れ榕樹、火山岩の土壤に培植せられ、榮養多量、一株にして能く連理百根に到り、鬱々千有餘年、地積三百餘歩に跨り、葉々の缺くる處より熄火山の秀絶せるを仰望し、樹蔭濃なるの下、瓊浦敗後の平氏亡命人の墳墓累々、墓石亦た火山岩、莓苔其の多孔なるに乗じて之れを蒸し、游子をして千古の感慨に禁へざらしむるものは、河邊七島の景物なり。其他我皇版圖の南門に富士山を代表せる開聞嶽あり、「鹿子城中家幾萬。無窓不納紫辱顔。」の櫻島山あり、日本有史紀の最故趾たる高千穂峯あり、洋客の「聖女」と艶稱せる長崎市南の猿田山あり、雲煙薰蒸せる温泉嶽あり、近代儒士中の英物松林飯山の著書を藏さんとせし多良嶽あり、皆な洵に九州の土を粧飾す。

河邊 七島

寶島 鷹島の西南百十湮

全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放。

平島 鷹島の西南八七湮

全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放。

惡石島 鷹島の西南九六湮

全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放。

臥蛇島 鷹島の西南八二湮

全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放。

諏訪ノ瀨島 鷹島の西南八二哩

全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放。

中ノ島 鷹島の西南七五哩

全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放。

口ノ島 鷹島の西南七二哩

全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放。

口ノ永良部島 鷹島の西南五七哩

全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放。

硫黄島 鷹島の西南五二哩

全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放。

開聞嶽 薩摩縣姪郡東南部、開聞海角の最南端

海拔九二七米突、一名薩摩富士、開聞海角より峭然と突立し、秀絶なる富士山〔狀？〕をなす、頂よりは琉球洋の群島を雙眸に收め雄大眞に絶雙。

櫻島

大隅北大隅郡、櫻島灣の中央に在り。東西二里廿四町、南北二里、周十里、鹿島を離る廿四町、高峯は南北に羅列す、北に在るを北嶽と總稱し南に在るを南嶽と總稱す。全島火山岩より組成す。土壌肥沃人家山脚を環り繁華の地也。

鷹島市より小艇を賃し、櫻島の南岸火山岩の懸崖峭絶雄拔なる處を廻航し、三時間にして東岸の黒神村に着す、村に温泉あり、又た村の東方海濱に沿ひ鍋山（海拔凡三百六十米突餘）なる一卑山あり、山頂に舊火口あり、周回凡三千米突、之れを望見するに奇絶、黒神村より亂竹雜樹鬱蒼の間なる徑路を登り、一舊火口の底（海拔一、一〇五米突）に達す、周回凡八百米突、此の舊火口の南に一大新火口あり、俗に「燃鉢」と呼ぶ、櫻島の所謂「南嶽」にして周回凡二千米突、深サ凡百二十米突、四壁峭絶なる斷崖を成し遂に下るに由なし、火口の處々より硫煙を噴出す、然れども其の勢力甚だ猛劇ならず、更に北すれば、一溪流の深谷を隔て、「北嶽」の連峯あり、中に一舊火口あり、嶽の最高點を海拔一、二一〇米突となす、亦た島中の最高點たり、南嶽若くは北嶽の絶頂より四望せんか、西方眼下に鷹島の市街海灣に沿ひて起り、西南に秀絶なる富士山狀の開聞嶽を眺め、東北に霧島の連山を仰ぎ（右に高千穂峯、左に韓國嶽を仰ぐ）、更に日向の群嶺を看、脚下に鷹島灣内の幾個小島嶼を瞰視す、其の奇警なる筆すべからず。温泉は東岸の黒神村、南岸の古里村、有村の三所に湧出す。

池田 池 薩摩縣姪郡の西部

開聞嶽の麓北、周回四里卅町、深サ百卅尋乃至百五十尋、蓋し舊火口。

蘭牟田池

薩摩國南伊佐郡蘭牟田村に在る湖水

周回一里半弱、海拔凡二百七十米突、片城、飯盛、愛宕、遠見ノ城等の諸峯四周を圍む、底深くして久富川支流の源をなす、蓋し舊火口なり。

霧島山

日向國西諸縣、北諸縣二郡より大隅國西諸縣、桑原二郡の間に跨る一大火山巒なり。山巒の峯頂は大概尖圓錐體を呈出し所謂鈍頂を現はせども東端の高千穂峯は極めて鋭尖なり。西方の韓嶽も亦た尖頂を呈出し一警火山たるの象あり。高千穂峯、即ち東霧島山海拔一、六五七米突。韓嶽、即ち西霧島山海拔一、六七七米突、霧島山巒の最高點。噴煙壯大なる活火口あり數個の舊火口あり數個の火口湖あり數個の硫氣噴孔あり數個の溫泉(白鳥、硫黃谷、砒霜燃、明礬、榮ノ尾等)あり要するに后土の大活力を認識し以て君が胸宇を宏恢し以て君が意氣を豪爽ならしめんと欲せば須らく此山に登臨して太奇を探らん哉

霧島市若くは宮崎町(日向)より登り得、試みに霧島市よりの途を取らんか、市より汽船に搭じて霧島灣を北航し、風光明媚なる間を渡過して灣の北端加治木に上陸し、夫れより火山岩の化成せる奇警奔放なる景象の間を經、宮内八幡社内の蒼翠なる樹陰に憩ひ、漸く桂坂嶺を越ゆるや、人は宛然大畫圖の中に入り、顔前に霧島の諸嶺長揖し來り、高千穂の噴煙逆上して天を衝き、韓國嶽の絶頂蒼穹を摩するを看、左に薩摩の連山、櫻島山、開聞嶽、奔馬の如く南走し去る、加治木より馬上半日間にして霧島の溫泉に達す、溫泉に浴し了り、石階を登りて霧島神社に詣で、社側に憩ひて南方霧島灣の好風景を眺望し、且つ此所(海拔凡四百五十五米突)より漸く高千穂峯に登る。高千穂峯、即ち東霧島山に登らんとせば霧島神社より道路を左折し、森林の間を直

歩すること四十分、海拔凡六百八十米突の所に到りて森林を去るや、絶頂は目前に迫り來り、徑路却て漸く峻峻ならず、絶頂の西側を過ぎ、幾回か曲折して火山岩灰を踏み、遂に火口の西北側に達す、口の「直徑」凡四百五十五米突、周回二千米突、深サ凡九十米突、口の西側「御鉢」より硫氣と水蒸氣とを噴出し、其響轟々、起りて天空を覆ひ、眞個に跌宕雄渾を極む、火口より愈々登り遂に絶頂に達するや、眼界壯宏、霧島、都城、宮崎の市街所在の平野、櫻島山、開聞嶽を下瞰す、頂に所謂神代の靈物「天ノ瓊矛」立つ、黃銅の鑄造物にして、高サ二尺四寸八分、最上部の幅五寸六分、左右圍むに火山岩石を以てし上部と東部の二面のみ開く、「瓊矛」の最下部より高サ一尺七寸の所に人物の鼻二個射出す、一は東に面し一は西に面す、即ち一身二面の姿にして耳目鼻口井然とし、眞に奇物たり、霧島神社より絶頂まで二里半と稱す、三時間にして輒ち登り得。

韓國嶽、即ち西霧島山に登らんとせば高千穂嶽を下りて榮ノ尾溫泉場に到り登ること一時間にして火口に達す、口の周回凡三千米突、深サ凡廿六米突、口内空池にして火力全く熄滅し些も噴煙を認めず、夫れより熊笹灌木の間を過ぎり絶頂に達して四望せんか、東に富士山狀の夷守嶽、丸岡嶽迫り來り、二嶽の麓に大畑池、空池、枇杷池



の三火口湖あり、東南に矢嶽、龍王嶽、新燃鉢、中嶽を看、三角形なる高千穂の峯尖其上に挺立し噴煙天を衝くを認む、眼を南に轉ぜんか、脚下に大浪池の火口湖あり、水面一碧琉璃の如く湖畔檜樹鬱蒼、愈々湖面の碧を添ふ、池の南に燒地獄、砒霜燃あり、北には鉾立山、飯盛嶽、甑嶽各々孤聳し、其間ビヤクチ池、白鳥池、不動池（周回凡二千五百米突）の三火口湖を觀る、榮ノ尾より絶頂まで二時間半。

長崎市傍近

肥前西彼杵郡長崎市の傍近は盡く火山岩より組成し市街も亦た火山岩の上に建つ然れども灣外なる諸島嶼は大概火山岩の外なる岩石に係る。長崎の風光をして雄快ならしむるは實に火山力に在り、更に雄快を添ふるは海水の火山岩を浸蝕する是れなり

金毘羅山 市の北端に在る圓錐體の丘陵、市民行樂の處たり、毎年舊曆三月十日、紙鳶の競争あり、諏訪神社の左側の道路を取り登る。

稻佐嶽 海拔三八一米突、市の西北端より灣を隔て、聳ゆ、奇巖多し。

岩尾山 海拔四九二米突、稻佐山の北西、絶頂より海上の眺望如畫。

鍋冠山 市の南端大浦の南に在る丘陵、頂よりは長崎の全市全港灣を雙眸に收む、東に島原半島を望み、温泉嶽の噴煙其上より起り、東北に肥前の多良嶽を仰ぎ、近くは長崎を四周せる河原山、七面山、岩尾山、稻佐嶽、猿田山等長揖し來る、眼界壯宏眞に指顧に堪へず。

鯖腐ラカシ岩 市を北に去ること三里、大村灣岸の時津港に到らんとするや、道の左

に方り火山岩山の中腹に巨大なる圓石の火山岩柱に坐するあり、將さに頭上に崩れ懸らんとし一瞥危殆の感あらしむ。

温

泉

嶽

肥前南高來郡、島原半島の中央より起りて半島の全部に蟠る。普賢嶽（海拔一、四二四米、岩上、山、岩、野、大崩山、矢嶽、高岩山、衣笠山、高嶽之れを四圍す。此嶽は日本にて未だ他所に認めざる岩石即ち角閃安山岩より組成し花崗岩の如き外觀あり。參詣者は大概八時間にて諸勝地を巡覽するを例となせども健脚者は五時間にして巡覽し得

長崎市若くは島原町より登り得、試みに長崎市より頂に登り了りて島原町に下らんか、長崎市より東の方日見峠を越え、島原半島の對岸なる網場に出で、此所にて舟を賃し島原半島の西岸小濱温泉場の上陸し、夫れより東行し、二里半、札ノ原を經るや、山彙中の最高點普賢嶽及び次高點妙見嶽眼前に迫り來る、漸く進みて右折し半里、小地獄、大地獄の硫氣噴孔を看、温泉村に達す、村（海拔凡七百七十三米突）は古來硫黃温泉を以て名あり、硫氣噴孔四周に吹出す、其高サ二尺乃至五尺、時に一丈に及ぶことあり、頗る壯觀、温泉村より山彙中の諸嶺に皆な登り得べし、即ち最高點たる普賢嶽に登らんか。

普賢嶽 に登らんとせば案内者を賃し、密樹の間なる徑を取り、一時間半にして絶頂に達す、頂に垂直線狀なる岩柱あり、高サ八間餘、其の北面は日光より隱蔽せられ十一月早く氷柱の懸るを見る、頂より四望せんか、北には筑紫海を隔て、筑後川の平原、

肥前の群嶺雙眸の内に入り來り、東には熊本の平原、阿蘇の火山彙を眺め、東南に霧島火山彙を看、南は眼下に天草の群島瑠璃一碧上に點綴し、西に長崎の諸海角を隔てて遙に五島列島を認め、眼界豁達にして山海を掌上に弄し、九州半面の景象躍然として眉端に集る、其の觀光無限。

妙見嶽に登らんとせば普賢嶽より二時間にして達し得、即ち雜樹の間なる徑路を取り、舊火口に入り、大塊なる火山岩を踏み、夫れより徑路甚だ峻峻、遂に絶頂に達す、頂よりの壯觀は普賢嶽に譲らず。

島原町に下らんとせば、左に温泉嶽、右に高嶽の間なる窪地を過ぎ、空池なる火口湖を見、溪間に下り、又た登り、又た下りて前山の峭絶奇絶なる火口壁を見、平地に下り、遂に島原舊城下の市街に達す。

多

良

嶽

肥前藤津、東彼杵、北高來三郡に跨る、大村町より東北位

海拔一、一二六米突、西岸の大村町より荳瀬、黒木二村を經、登り得、頂に缺損せる舊火口あり、頂よりの四望は規模或は温泉山彙の普賢嶽に譲ると雖も大概は異らず、頂より少しく南に下れば金泉寺あり。

火山の日本國に普遍する此の如し、想ふ火山は天地間の所謂「大」なる者、天地間の「大」なる者にして日本國に普遍する此の如しとせば、浩々たる造化が其の大功の極を日本國に鍾めたりと斷定する、誰か之れを僭越なりと言ふぞ。博士ラボック(英國皇立學士會會員)、英吉利の風景を艶説して曰く、

多様多變の風景を小範圍の裡に呈出せるは、全世界中、我島國の如き所恐くは他に在るなけん。試みに南方より始めんか、先づ蒼海あり、沙汀あり、ケント州に白堊の懸崖あり、アラム灣に彩色ある砂土あり、デヴォンシャー州に赤砂岩あり、コルンウォール州に花崗岩、片麻岩あり(以上海岸)、内部に入らんか、白堊なるダウンの丘脈及び明淨なる流水あり、暢茂せる森林及び豊饒なる葎草園あり、西せんか、礫質なる丘陵の起伏せるあり、更に西せば、花崗岩の突起せるあり、英蘭の中央に到れば、東にノルfolk州の諸「滙水」及ぶ「澤地」あり、次に膏腴なるミッドランド地方に入れば、穀隴あり、豊饒なる牧場あり、肥大なる牛犢あり、西に向へば、ウエールスの諸嶺連り、更に北せば、ヨルクシャー州のウォールド山脈あり、ランカシャー州の群丘あり、ウエストモアランド州の諸湖あり、愈々北せば、丘陵の起るあり、陰々たる澤地あり、ノルサムバランド州、カムバランド州に畫様の城郭ありと。英吉利や、國土の美なる誠に此の如きものあらん、而かも竟に一活火山の在るなきを如何、

活火山の在るなき猶ほ可、其の火山岩の一大山だに在るなきを如何(スコットランド)蘇格蘭エデキンボロ市傍近のアーサーズ、シートは石炭紀時代に現存せし一火山の噴出管なるべしとの説あれども、一小丘にして固より言ふに足らず。日本は、ラボックの英吉利に艶説する所を悉く網羅し盡くして、之れに加ふに天地間の「大」者たる火山の到る處に普遍するを見る。一活火山だに在るなき處に於てすら猶ほ且つ「全世界中の多様多變なる風景を呈出す」と艶説す、何ぞ況んや日本をや。浩浩たる造化が其の大工の極を日本に鍾めたりと斷定する、愈々益々僭越にあらざるを確信す。且つや

(九) 日本火山の綠色

なるは、是れ亦た絶特なる所。蓋し日本の氣候たる多濕多雨、故に水蒸氣は外部より火山岩を攻撃するが上に、亦た多孔なる此岩の内部に浸入して輒ち之れが霉敗を促し、膏腴なる土壤を山上に化成し、加ふるに日本の夏季は雨量特に多大、其間温度も亦た劇しく高昇し、時しも驕矜なる大陽は峭絶なる火山の側面を炙るを以て、他邦の火山たる多くは赤裸々なるも、日本の火山は然らず、喬樹灌木相交互し、綠蔭黯然、松籟處々に起り、火山の「大」に添ふに更に韻致を以てす。一山にして能く七十屬、一百種の樹木生植し、藤、藤繡毬、野葛、扶芳藤、アケビカヅラ、ミツ

バアケビ、カウモリカヅラ、ツルムメモドキの如き蔓生植物其間に巻旋攀緣す、是れ甚だ他邦に看ざる所。更に韻致を一層に添ふるものを

(十) 火口湖

となす。想ふ日本の湖たる、(一)所謂「火口湖」種に屬するもの最も多々、即ち熄滅せる火口に雨、霜、氷、雪の瀦溜し、若くは口底より泉水の湧出して竟に湖と化成せしもの、多くは火山の絶頂若くは中腹に在り。夫の樺樹、トミ松鬱葱として帷幕する間に寒水三里中に神岩の一島を聳起する摩周湖(根室)、一碧瑩然たる恐山湖(陸奥)、水心鏡面の如く其上に八甲田山、戸來嶽、十和田嶽の影を倒映する十和田湖(陸奥、陸中)、白練を流すが如き鳥ノ海(羽後)、沿岸岩石の赭褐色をなせる藏王嶽西の藏王沼(盤城)、吾妻山中に水色藍を蘸せる略圓形の五色沼、五色沼の南に湛ゆる正圓形の桶沼、猫俣嶽西なる楕圓形の雄國沼(以上岩代)、古歌の「まこも刈る伊香保の沼」(上野)、立山の血ノ池(越中)、開闢以來千古の堅氷を凝結せる白山絶頂の楕圓形なる千歳池、翠池、手洗鉢(加賀)、「月影のすはの海」(信濃)、乗鞍嶽腹なる周回三里の大池(飛驒)、檜樹蔭然たるの下に陡潭綠水を盛る霧島山中の白鳥池、不動池、ビヤクチ池、大浪池、大畑池、御池(日向)、高嶺群簇の間に孤在する蘭牟田池(薩摩)の如き、即ち火口湖とす。其他新火口の外輪

と舊火口の内輪との間なる窪地に水の湛多たるものあり、函嶺の絶勝たる蘆湖（相模）の如き即ち是れ。獨り火口湖に止らず、火山力の副産物として湖の化成せしもの多々、即ち（二）噴起の際、地盤の陥没し、若くは溶岩、火山屑等の堆積して火山又は他岩質なる山嶽との間に窪地を生出するや、氷、雪、雨潦は之れに瀦溜して輒ち湖を化成す、此種の湖や大概は山麓に湛ゆるもの、夫の樹林翠蔚たるの下一碧十二里中にトッモシリ島を屹立する釧路湖、雄阿寒、雌阿寒二嶽相對して峭突するの間に綠蔭水畔を彩り危巖四岸に峙ち島を浮ぶること幾個其の絶勝北海道第一の稱ある阿寒湖（以上釧路）、惠庭、樽前の嶽影を鑑する支笏湖、蝦夷富士山下の洞爺湖（以上膽振）、雲煙杳靄せる猪苗代湖（岩代）、富士山麓なる明媚畫様の五湖（山中、川口、西、精進、本栖）の如き即ち是れ。（三）噴起の際、溶岩、火山屑等吐出し來り、川河の流道を遮斷して、河水爲めに滯滞し、忽ち湖と化成せしもの、夫の駒ヶ嶽下に泓然たる大沼、蓴菜沼（以上渡島）、磐梯山爆裂の際化成せし三湖（檜原、秋元、小野川）、日光山頂の中禪寺湖の如き即ち是れ。

想ふ火山湖たる、一泓澄深、而かも太陽の光線は下徹し、晶々として鏡の新に磨ける如く、鬚眉輒ち鑑すべく、俯して窺へば鱒魚、アメマス、嘉魚、洋々として往來し、玻璃瓶中を行くに似、忽ちにして巖影、樹影、山影、倒映して水中に入るや、鱒魚は山に登るが如く、アメマスは樹に攀り、嘉魚は巖上に躍らんとす、頭を擧ぐれば衆峯回環し交る／＼高を争ひて其間僅に天光を露

はし、萬象の蕭瑟たる轉た人の神骨を冷殺せしむ、况んや火口湖の四岸懸崖壁立直ちに水面より峭絶する處、愈益景象の蕭瑟を添へ來る。世に「平和」なる語あり、而かも「平和」中の最平和は實に火口湖に依りて代表せらる。誰か料らん、此の最平和の代表者は、爆聲轟々、火光煽々、天日を焼き、岩石を溶かし、硫煙空を衝きて逆上し、熱灰地を捲きて吹き散じたる當初の火口ならんとは、「平和」か、「平和」か、知れ、眞成の平和は物力を極端まで費了せずんば竟に得べからざることを。若し夫れ火山力の副産物たる各種の湖に到りては、其形曲折、出入極めて不規律、石嘴或は水心に突立し、飛巖或は潭外に錯峙し、亂礁或は波際に點綴し、變化萬狀、固より他の大陸所在なる沿岸の平卑單一景象の庸々凡々たる湖と比較すべきにあらず。一たび洞庭湖（支那）と聞かんか、人をして輒ち月白く風清きの夕を想起せしむ、而かも其岸の沮洳たり、其深サ梅雨の候と雖も僅に二尋、冬季一尋、水色常に渾濁「珊瑚色」をなすを知らば（南岸の水色は稍々澄清なるも湖の大概は渾濁す）、人をして意阻み興醒め、復た湘娥を弔ふの念なからしめん。况んや「湖光宜雨最宜晴。好景偏憐夜色清」（沈德潛）てふ西湖（支那）は、其の所在鹵濕に、マラリヤ熱の窩窟となりて、孤山處士棲遲の趾は、瘴氣の冑す所となり、其の「宜雨」日は黴菌を培養するの期なり、「宜晴」の日、「夜色清」の時は恰も沼瓦斯蒸發の際なり、眞個殺風景の極、誰か復た其畔に歸隱を計る者ぞ。君や火山力の如き氣力を揮霍し盡くして大に社會の間に